目次

プロローグ 7
第一章 特務支援課 31
第二章 再会 61
第三章 神狼の山 96
第四章 そびえる壁たち 143
第五章 星無き街で 198
第六章 金の太陽、銀の月 227
エピローグ 273
あとがき 284

口絵イラスト：日本ファルコム、エナミカツミ
本文イラスト：かしわ

「兄貴……俺、帰ってきたよ」

風の吹く丘で。

少年は、墓碑に花束を手向けた。

三年ぶりに訪れた兄の墓は、意外にも手入れが行きとどいていた。

ああ、そうか。きっとセシル姉だな。

きっと俺がいない間も、ずっとここに来てくれてたんだ。

少年は、あの人の変わらぬ優しさに気づいて、静かに微笑んだ。

そしてすぐに、胸元にこみ上げた嗚咽をこらえた。

三年経っても、あの人は兄を想い続けてくれている。

けれど兄が死んだ真相は、いまだに解き明かされていない。

三年経っても、なにひとつ変わっていなかった。

良いことも、悪いことも。

けれど少年自身は、この三年で少し背が伸びた。
そして兄には及ばずとも、少しだけ兄に近づいていた。
少年は、まるで兄の肩を叩くように、冷たい墓碑に触れて言った。
「俺も……捜査官になったよ」

その時、背後で正午を告げる鐘が鳴り響いた。
兄が眠る墓地を見下ろす、クロスベル大聖堂の鐘が……

プロローグ

「早く来いよ、アンリ。ほら、こっち、こっち」
「リュウってば、待ってよ～」
二人の男の子が、石畳の道を駆けていく。
すでに日は落ち、暗くなった街には明かりが灯っている。
その暗がりを縫うように、二人はこそこそと中央広場のオブジェに身を隠した。
「よーし、誰にも見られなかったな。しめしめ」
「だめだよ、地下区画なんて！　忍び込んだのがバレたら、先生に怒られちゃうよ！」
「へっ、アンリの弱虫！　平気だよ平気！」
活発そうな男の子リュウは、鼻の下を指でこすった。
「せっかく入口を見つけたんだぜ！　探検してきたら、みんなに自慢できるだろ？」
彼は、オブジェの下にあるマンホールの蓋を指さした。
その蓋は、わずかに外れ、地下へ続く頑丈そうな梯子が見えている。
だがアンリと呼ばれた子は、小声で必死に抗議した。
「だめだって！　それに地下区画は、危ないから封鎖されてるんだよ！」

「危ない？　そんなのただのウワサだろ？」
「ウワサじゃないよ！　街の地下には、アレが出るって父さんが……」
アンリは、その名を口にするのも恐ろしい様子である。
しかしリュウは胸を張って、笑ってみせた。
「いくら地下でも、こんな街中にアレがいるワケねーじゃん。だってこんなににぎやかなんだぜ？　ほらっ！」
リュウは、彼らの街……クロスベル市をあらためて見渡した。
地面こそ、昔ながらの石畳だが、街灯も整備されたおかげで、街は夜でも明るかった。
歓楽街にはネオンが煌めき、街を行き交う導力車のサーチライトも道を照らしている。
そう、導力がこのクロスベル市を一変させた。
導力化推進を目的とするエプスタイン財団は、七耀石から引き出したエネルギー……地、水、火、風、時、空、幻の力を用いた導力器を世界に普及させた。
そしてこの街には、エプスタイン財団肝いりの、導力ネットワーク計画が試験導入され始めているのだ。
リュウは、マンホールの隙間から梯子を降り始めた。

「大丈夫、大丈夫。アレが出てきたら、逃げればいいんだよ」
「ちょっ……リュウ！　置いてかないでよー！」
子供たちは、長い長い縦穴を下り、やがてこの街の別の顔にたどり着いた。
「うわあ……ここが……」

地下区画。
石畳の下に広がっていたのは、金属で覆われた地下通路であった。
ひんやりした空気に、リュウは一瞬、身震いした。
「ひ、広いなあ……それに暗いや」
「ねえ、リュウ、もう帰ろうよ。ここに来ただけでもう十分だよ」
「なに言ってんだ！　探検は、まだまだこれからだぜ！」
「だって向こうが全然見えないよ！　暗すぎるって！」
「ほら、これを点ければ暗くっても……」
そう言ってリュウがサーチライトを灯した時だった。
「あ……あ……あ……」
突然、アンリが照らされた場所を指さす。
リュウは、震えるアンリを不思議そうに見つめた。
「なんだよ？　あ、あ、あ、じゃ分かんねえよ？」

「あ……あ……アレ……！」
ようやくリュウも気づいた。
サーチライトに照らし出された天井にへばりつくアレに。
しかもびっしりと。何十匹も。
二人の生き血を求めて、にたにたと笑う醜悪な笑顔に……

キキキキキ……
キキキキキ……

無数の叫びが、二人を包むようにこだまする。
天井には、けたたましい声で鳴くコウモリの群れがいた。
だがその身体は、子供たちと変わらぬほど大きい。
左右の牙は短剣ほどもあり、ひと噛みで人間を殺せるほどの長さだった。
決して、通常のコウモリではない。つまり……
リュウとアンリは、抱き合って悲鳴を上げた。
「ま……ま……魔獣だあっっ！」

グレイプバット。
この世界に巣くう、凶暴かつ獰猛な魔獣のひとつ。
人里離れた墓地などに生息し、時折、人間を襲うことで知られている。
だが決して、このような街中に現れる存在ではない。

しかし二人の頭上には、何十匹ものグレイプバットがひしめいていた。
血走った眼に見下ろされ、二人は立ちすくむだけである。
「だ、だれか……」
「助け……て……」
もはや声すらかすれ、救いを求める叫びさえ出ない。
その二人に向かって、グレイプバットたちは一斉にはばたき、降下した。
子供たちの身体から、一滴残らず、血液を吸い出すために。
しかし二人が、絶望しかけた瞬間……
「伏せろ！　リュウ！　アンリ！」
鋭い声が、闇を切り裂いた。
同時に閃光。凄まじい電光が、グレイプバットたちを叩き落とす。
それを為した人物を見て、子供たちも、ようやく声を取り戻した。

「ロイド!」
「よかった! 来てくれたんだね!」
名前を呼ばれ、ロイド・バニングスは力強くうなずいた。
栗色の髪に、誠実そうな瞳。
身にまとうのは、白と青の防弾ジャケット。
逆手に握るのは衝撃警棒の一種、ハードブレイカー。
打撃と同時に強力なエネルギーを流し込み、相手を気絶させる武器。
ロイドはそれを左右の手にひとつずつ握り、二人を守るように立った。
「すぐに片づける!」
叫んだロイドめがけ、グレイプバットたちが躍りかかる。
四方八方から、まるで訓練されたような連携攻撃。
しかしロイドは、瞬時に間合いを見切り、左右の武器を振り回した。
「せいっ! はあっ!」
ロイドは、無数の連撃で魔獣たちを迎え撃つ。
それはアクセルラッシュと呼ばれる、警棒術の必殺技。
ロイドは、グレイプバットを吹き飛ばし、子供たちを背中にかばった。
「今のうちだ! 早く逃げろ!」
「う、うん、でも……」

「あ、あっちにも……」
ロイドは、背後に目をやり、驚愕した。
真っ暗な通路の奥から、のそのそと不気味な巨体が這い進んでくる。
それは、ぼってりと肥満した、見上げるほど大きなコウモリ。
だがその翼は退化し、短い手足をばたつかせて前進している。
肥大化した魔獣メガロバットが、横に伸びた口から涎をしたたらせ、ロイドたちめがけて飛びかかったのだ。
「走れっ!」
ロイドの叫喚と共に、子供たちは元来た道へ駆け出した。
だがメガロバットも、巨体に似合わぬ俊敏さで、三人の頭上に跳躍する。
「まずい!」
ロイドは間一髪、身体をひねって回避する。
メガロバットが臀部から着地すると、頑丈な床がひしゃげ、強烈な震動が広がった。
一撃を外したメガロバットは、手足をもがいて切歯する。
その周囲には、ばたばたと新手のグレイプバットたちも集まっていた。
ロイドは、その様子にハードブレイカーを構えた。
「くそっ、いつの間にこんなに棲みついたんだ……」
「ロイド!」

子供たちが、彼の腰にしがみつく。
しかしロイドは、二人に向かって、強い声を発した。
「よし……俺が防ぐ間に、お前たちは梯子を昇って逃げろ」
「だけどロイドは……」
子供たちにも、これが絶望的な戦いだと分かっているらしい。
それでもロイドは、毅然として言いきった。
「気にするな。市民を守るのが俺の任務なんだ」
言ったロイドの肩には、クロスベル自治州警察のマークがある。
そして胸元には、特務支援課のマークも。
この街……クロスベル市の治安を守る一員、ロイド・バニングス捜査官は、再び魔獣たちとの間合いを測った。
「さあ早く！　来るぞ！」
甲高い声と共に、グレイブバットたちが殺到する。
ロイドは、身を挺して子供たちをかばい、警棒を振るった。
魔獣を叩き落とし、吹き飛ばし、打ち倒す。
だがロイドの身体を、魔獣たちの牙が引き裂き、石畳に鮮血が飛び散った。
「ロイド！」
「大丈夫？」

ロイドは、まとわりつく魔獣を必死に振りほどいた。
だが動くうち、失血が、彼の意識を失わせつつあったのだ。
「ぐっ……この程度で……！」
ロイドの視界が、ぐにゃりと歪んでいく。
正面からは、メガロバットがにたにた笑いながら近寄ってきた。
しかしロイドは、もはや接近する敵との間合いすら測れない。
ただ、喉を食いちぎられ、血液を吸われるのを待つだけ……のはずだった。

しかしロイドが気絶する寸前……
乾いた銃声と共に、青白い光球が上空で輝く。
その光球から、優しい光がロイドに降り注ぐと、彼の傷は急速に癒えていった。
「ロイド！　大丈夫？」
聞こえてきたのは、可憐な女声。
声を放った人物は、導力銃プリムローズを連射し、魔獣たちを射貫いていく。
駆けつけたのは、青灰色の髪をなびかせた少女。
ロイドは、青白い光球を放ったのも彼女だと悟っていた。
「ありがとう、エリィ！」
「二人で戦うなんて、あいかわらず無茶ね！」

ロイドとは同い年の十八歳。
エリィ・マクダエルは、射撃テスト満点で警察入りした特務支援課随一の射手である。
その銃撃は、導力魔法を込めた弾丸によって味方をも回復してくれる。
先ほどの回復技ホーリーバレットも、そのひとつ。
そしてもう一人……
「今さら言うなよ、お嬢。無茶はロイドの十八番だぜ？」
快活な声が、戦場に飛び込んできた。
「今度は俺の番だ！　行くぜ、フレアバタフライ！」
叫喚と共に、火の属性の導力魔法が顕現する。
炎に呑まれたグレイブバットたちは、ぱたぱたと墜落していった。
ロイドは、それを放った赤毛の青年に声を飛ばした。
「ランディ、すまない！」
応じて、にやりと笑ったのは、特務支援課、ランディ・オルランド。二十一歳。
対魔獣用の斧槍、ソリッドショッカーをぶんっ！　と一閃してみせる。
「パトロールの帰りが遅いと思えば、この有様だ。探しに来て良かったぜ」
ランディは、背も高く、斧槍を軽々と扱う身体もたくましい。
しかしその表情に、ロイドのような生真面目さは無く、むしろ脱力系。

どこかだらしなさを醸し出しつつ、ランディは腰から小さな金属具を取りだした。
「あのな、俺たちにはこういう便利なモノがあるんだ。危険な目に遭ったら、さっさと連絡しろっての」
手にしたのは、折り畳み式の導力器。
表面には、ランディに似合いのビキニ姿の女性が描かれているが、エプスタイン財団開発の、歴とした最新型である。
その名も、第五世代戦術オーブメント、エニグマ。
内部に結晶回路を装着・組み替えることで、七耀石のエネルギーを導力魔法として顕現させ、持ち主の力を強化する。
ランディは、唸るメガロバットを前に、平然とその通信機能を使い始めた。
「あ、もしもし？　ティオすけか？　ああ、ロイドなら見つけたぜ。今、地下A区画の外れだ。ちょいと面白いことになってる。急いで来てくれ」
言うとランディは、エニグマをしまい、再び魔獣たちに向き直った。
「じゃ、続きを始めようぜ？」
そしてソリッドショッカーを一閃。
ランディに薙ぎ払われ、グレイブバットは両断される。
ロイドも、子供たちを物陰へ隠すと、一気に前に出た。
「雑魚はどけっ！」

衝撃警棒から放たれる電撃が、次々に魔獣を麻痺させた。
エリィも後方から、導力銃で援護する。
遂に小物は消え、配下を失ったメガロバットは、決然と跳躍した。
「来たぞっ！」
ロイドとランディが左右に散ると、その中央にメガロバットが着地する。
同時に激震。射撃するエリィの狙いも、大きく外れた。
「意外に素早いっ！」
ロイドは、迫る牙を俊敏に避け、ハードブレイカーを叩きこむ。
しかしメガロバットは、一撃を受けても動じない。
ロイドのすぐ横を走る金属製パイプに食らいつき、小枝のように呆気なく噛みちぎる。
なおも魔獣は、執拗にロイドを追い、噛みつきを繰り返した。
ロイドは、避け、伏せ、連撃をかわすが、次第に壁際へ追い詰められた。
「くそっ、しつこい奴だ！」
「援護するわ、ロイド！」
エリィは、メガロバットの丸まった背中へ銃弾を連射する。
だが分厚い皮に阻まれてか、魔獣は着弾と同時にわずかに震えるだけだ。
ランディも今一度、斧槍を振りかざした。
「これでどうだ……っとおっ！」

しかしランディの動きを読んだように、魔獣が巨い腕を一振りする。

ランディは、凄まじい膂力に翻弄され、後ろへ大きくはねとばされた。

「ぐおっ！」

「ランディ！」

だが魔獣は、今度こそロイドに狙いを絞り、両腕を掲げた。

ランディをはねとばした腕力である。

ロイドとて、ひとたまりもないに違いない。

しかし逃げ場もない以上、ロイドは腰を落とし、衝撃に耐える覚悟をした。

「くっ……受けるしかないのか！」

メガロバットも、非力な獲物を前に、喜色を表す。

しかし突然。通路の向こうから。

冷静にして清らかな女声が、戦場に駆けつけた。

「間に合いましたね、よかった」

その声に、ロイドたちが視線を向ける。

姿を現したのは、杖を握った少女。

青みがかった髪をなびかせ、超然とした瞳を魔獣に向けた。

「容赦はしません。手加減無しでいきましょう」

そして少女は、手にした杖の先端を魔獣に向ける。

あくまで粛々と、一切の躊躇いもなく、少女は言った。

「砲撃様式、起動。導力駆動、最大出力」

言うなり、彼女の魔導杖リリカルケインが淡く輝き、先端が砲口状に開いていく。

少女は、目玉を剝く魔獣めがけ、ようやく声に力を込めた。

「行きます、エーテルバスター！」

瞬間、閃光が弾けた。

魔導杖から、導力魔法が青白い閃光の奔流となって、魔獣を呑み込む。

さらに一撃は、魔獣を彼方まで押しやり、壁面に叩きつけた。

それでもメガロバットは、身体中を焼かれながら、最期のあがきを見せている。

ロイドは、両腕に力を込め、一気にその胸元へ飛び込んだ。

「これで決める！」

ロイドの警棒が、怒濤の如く、魔獣を打ち据えた。

すると絶叫を発して、メガロバットは爆砕する。

後には屍すら残らず、ただ黒い染みが残るだけであった。

「片づいたか……」

ロイドが、安堵の息を吐くと、物陰から子供たちが駆け寄ってきた。

「やったあ、ロイド！」
「ありがとう！　どうなることかと思ったよ！」
リュウとアンリも、ようやく笑顔を取り戻している。
だがロイドは、二人の頭をきつめにぐりぐりと撫でた。
「あのなあ！　ここは立入禁止区域だぞ。勝手に入りこんじゃ危ないじゃないか！」
「ご、ごめん……面白そうだったからつい……」
「反省してます……」
二人は、しゅんと縮こまっている。
そこへ歩み寄った魔導杖の少女は、短いため息を吐いた。
「まったく……またあなたたちでしたか。ほんとうに懲りない二人ですね」
ティオ・プラトー。十四歳。
彼女が握る魔導杖は、エプスタイン財団開発の最新型である。
そして彼女自身、その実践テストを兼ねて、特務支援課に配属されたという。
ティオは、無愛想にも見える表情でロイドを見つめた。
「それからロイドさん、地下パトロールで何かあった時は連絡してください」
「ごめん。連絡する暇も無くって……」
「……少し、心配しました」
ティオは、小さく言って顔を伏せる。

その時だけ少女の表情に、人間味が浮かんだように思えた。
そこへランディも近づき、斧槍を肩に担いだ。
「遅かったな、ティオすけ。しかしタイミングよく現れるとは感心、感心」
「ランディさんも、召集する時はもう少し正確な位置を教えてください。ちょっと迷ってしまいました」
「へえへえ」
エリィも、疲れたように微笑んだ。
「とにかく無事で良かったわ。早く二人を地上に送り届けないと……」
だが、不意に。
上層から、重々しい衝撃が伝わってきた。
真っ先に気づいたのは、ティオとランディ。
二人は、天井を見上げ、武器を構え直した。
「いけません！　強い属性反応っ……」
「まずい！　来たぞ！」
ランディが叫んだ瞬間、轟音が鳴り響いた。
天井をぶち抜き、巨大な生物が落下してくる。
まるまると肥え太った身体は床に着地し、重々しくバウンドした。

長い牙。退化した翼。ききききっ、という笑い声。
一見、先ほどのメガロバットに見えた。
しかしその身体は、何倍も大きく、その毛並みは赤みがかっている。
ロイドは、すぐにそれが何なのか悟った。
「女王メガロバット……！」
魔獣の眷属の、頂点に君臨する存在。
恐らく先ほどのグレイプバットもみな、この女王個体が生み出したのだろう。
でっぷりとした腹を揺らし、女王メガロバットは甲高くわめき散らす。
と同時に、その両眼が赤光を放った。
閃光に打たれた途端、ロイドたちの視界も真っ白に変わる。
「しまった！」
目くらましを受けたロイドは、思わず怯んだ。
そこへ女王メガロバットが肉薄。
ロイドたちめがけて、短い腕を振り抜いた。
「逃げろっ！」
ロイドは、子供たちをかばったが、一撃は避けられない。
壁面まで殴り飛ばされ、床に倒れ、口中から血を吐いた。
「がはっ……！」

「ロイドー！」
「しっかりしろ！」
エリィとランディが、駆け寄る気配がする。
しかしロイドはよろよろと立ち上がって、それを制した。
「だめだ！　こっちに来るな！」
「なに言ってるの、だって……」
「こいつは、俺たちが勝てる相手じゃない！　子供たちを連れて逃げろ！」
ロイドは、受けた打撃から直感して叫んだ。
それを裏付けるように、ティオが表情をこわばらせる。
「女王メガロバットの強度は三二……通常個体の八倍の戦闘力を有しています。たしかに
ちでは歯が立たない……」
「そんなっ……！」
エリィは、魔獣めがけて導力銃を連射した。
しかしいくら撃ち込んでも、銃弾は分厚い脂肪にめりこみ、肉には達しない。
ランディも斧槍を振るったが、女王メガロバットはびくとも動じなかった。
「なんて奴だ！　俺の一撃が効かない……」
「だから行け！　早く！」
ロイドは、ぼやける視界に抗って叫んだ。

「ここは俺がくいとめる！　その隙に地上へ戻れ！」
「犠牲になるつもりなの、ロイド！」
「この状況じゃ、それしか方法はない！」
エリィの声を遮って、ロイドは得物を構えた。
意識は遠のき、視力は回復していないが、殿はまっとうするつもりだった。
ランディも事態を悟って、子供たちの背を押した。
「くそっ……それしかねえか。おい、二人とも早く行け！」
「だけど、ロイドが……」
「置き去りにはできないよ！」
エリィとティオも、苦渋を浮かべて硬直している。
誰もが、絶望しかけていた。
しかし希望が突然、彼らの背後から呼びかけたのだ。

「……やれやれ。自己犠牲も結構だが少々、短絡的すぎるな」
低い声音が、地下区画に反響した。
ロイドたちは、一斉にそちらへ目をやった。彼らの視界には……
「あ、あなたは……！」
男が一人、上層へ続く踊り場に立っていた。

長身。黒い長髪。赤いロングコートをなびかせ、超然とたたずんでいる。
手には、一振りの長刀。
左頬に走る傷は、彼が歴戦の強者である証だった。
男は、さして気負いもせず、踊り場から跳躍した。
「…………斬っ！」
気合と共に、男の姿が加速する。
空中を電光の如く飛翔し、女王メガロバットと交差する。
そして魔獣とすれ違い、床に着地すると、静かに長刀を鞘に収めた。
わずかにそれだけ。
しかしその動きが終わった刹那、女王メガロバットががくがくと震え出し……
「……あっ……！」
ロイドたちは、呆然と魔獣を見上げた。
あれほど、攻撃を意に介さなかった女王メガロバットが、肩から斜めに切断され、真っ二つに割れていく。
魔獣は絶叫すら発せず、両断されるや爆砕し、黒い染みとなった。
呆然としたロイドたちが声を発したのは、数秒後のことである。
「……なんて速さだ」
「……なにも見えなかったわ……」

「ああ、太刀筋はまったく……」
「……人間業とは思えません……」
だが立ちすくむロイドたちとは違って……
リュウとアンリは、歓声を上げ、男に向かって駆け出した。
「すげーっ！　すごすぎるよ、アリオスさんっ！」
「うっわ〜っー　いいもん見ちゃったなああ！」
アリオス。
そう呼ばれた男は、子供たちの頭を静かに撫でた。
無論、ロイドたちも、彼を知っている。
いや、この街に暮らす者で、アリオスの名を知らぬ者はいないのだ。
大陸の平和と、民間人保護を旨とする遊撃士協会。
その協会の中でも、屈指の戦闘力を誇るA級遊撃士の一人が、彼、アリオス・マクレインである。
この街の守護者と呼ばれ、市民からの信頼は絶大。
卓抜した抜刀技術から付いた二つ名は、《風の剣聖》。
まさに疾風にふさわしい、一撃であった。
アリオスは、厳しく、それでいて優しげな瞳で、子供たちを見つめた。
「こんな所に遊びに来てはいかんな。もしものことがあったらどうする？」

「……悪かったよ、アリオスさん」
「……ごめんなさい」
「ふっ……まあ、無事ならそれでいい。さあ、うちに帰ろうか」
そう言ってアリオスは、子供たちに梯子を昇らせる。
そしてふと、ロイドたちにも目を留めた。
「どうした？　お前たちは戻らないのか？」
「え、ああ……」
ロイドは、あまりの急展開に呆然とする自分を鎮めた。
「……そうですね。一緒に戻らせてもらいます」
「なら、ぐずぐずするな。先程のようなこともある。こういった場所では、最後まで気を抜かないことだ」
そう言ってアリオスも、地上への梯子を伝っていく。
しかしロイドたちは、まだ呆然と、互いを見つめ合うだけだった。
「なんていうか……」
「あたしたち……」
「また、あのおっさんに……」
「……持って行かれましたね、全部……」
つぶやいて四人は、はふっとため息を合奏した。

そう、クロスベル警察特務支援課は、創設されてまだ数週間。
ロイドたち自身も、まだまだ駆け出しである。
事件を解決しようとしても、横から遊撃士協会に手柄を奪われることも度々だった。

それでもロイドは、気持ちを切り替え、微笑した。
「まあ、いいよ。街の平和は守られたんだ。誰が守ったかは、気にしても仕方ない」
そしてロイドは、仲間たちを見渡した。
「けどいつか、俺たちの手で事件を解決できるように強くなろう……四人で一緒に……」
そんなロイドの言葉を聞いて。
エリィが、ランディが、ティオが、思いを重ねてうなずき合う。
彼ら特務支援課の思いは、ひとつ。
いつか、このクロスベル市にそびえる壁を越えてみせる。
それまでずっと力を合わせて戦い抜くと。
だが彼ら四人を待ち受けていたのは……

第一章　特務支援課

クロスベル自治州。首都クロスベル市。
ゼムリア大陸西部に位置するこの地域が生まれたのは、まだ七十年前のことだ。
自ら独立したのではなく、対立する大国……エレボニア帝国とカルバード共和国の緩衝地帯として創設されたのだ。
現在では、大国間で不戦条約が成立し、両国の緊張も緩和されている。
しかしそれは表向きのこと。
大陸交易の中心地でもあるクロスベル市は、かねてから争奪の的となっていた。
クロスベルの市議会議員も、帝国派、共和国派に二分され、いずれどちらかの大国に併呑されるのではないか……という噂すらある。
それでもクロスベル市民は、表面上の平和を享受していたのだが……

「馬鹿者ーっっ！」
ヒステリックな怒声に、ロイドたち四人は畏縮した。

クロスベル警察本部、副局長室。

その部屋の主、ピエール副局長は、額に血管を浮かせて激怒している。

彼が四人に突きつけたのは、この街の有力新聞、クロスベルタイムズの朝刊だった。

『市のずさんな管理により、地下区画に魔獣出現！』
『遊撃士《風の剣聖》アリオス・マクレインの活躍により、男児二名を救出！』
『クロスベル警察・特務支援課、力及ばず、遊撃士の後塵を拝する』

ピエール副局長は、わなわなと新聞紙を握りしめた。

「お前たち、事もあろうに、あのアリオス・マクレインに手柄を持っていかれるとはどういうことだ！　しかもそれをクロスベルタイムズにすっぱ抜かれるとは！」

髪をオールバックに撫でつけた副局長は、怒りに任せて、新聞を握り潰す。

「こんなことでは、クロスベル警察の威信が地に墜ちるばかりだ！　恥を知れ！　お前たちで解決できない事件には、最初から首をつっこむな！」

しかしロイドも、毅然として背筋を伸ばした。

「お叱りは、肝に銘じます。ですが、市民の保護に首をつっこむなという指示には、従えません」

「なんだと！」

「俺たち特務支援課は、そのために発足したはずです。違うでしょうか？」

「な、生意気な口をききおって……」

しかし反抗的に見えて、ロイドは警察学校を最優秀の成績で卒業している。

しかも在学中に捜査官の資格を得たという、将来を嘱望された優等生なのだ。

本来なら、精鋭の捜査一課に配属されてもおかしくない逸材である。

そしてエリィも、ぐいと副局長に詰め寄った。

「ロイドの言うとおりです。私たちは、自発的に地下区画をパトロールしていました。だか
こそ、子供たちの危機に気づいたんです」

「ぬ、ぬうっ……」

「これまでクロスベル警察は、地下区画の保全を半ば放置してきました。しかし今回の件で
民も、警察が積極的に活動し始めたと認めてくれたのではありませんか？」

理詰めの言葉に、ピエールも押し黙る。

そもそもエリィは、クロスベル市長、ヘンリー・マクダエルの孫娘である。

各国を渡り歩くように留学し、国際教養を身につけた才女。

一年前、クロスベルに帰ってきた際は、誰もがマクダエル市長の仕事を手伝い、ゆくゆく
政界入りする……と思っていた。

だがエリィが選んだ道も、警察、しかも特務支援課だった。

政治を志すと思われた彼女がなぜ、このような泥臭い仕事に就いたのか？
ロイドもまだ、詳しくは知らなかったが……

ランディも、怒号で痛んだ耳の穴をほじり始めた。

「俺たちが首をつっこまなかったら、あの子たち、魔獣に食われてましたぜ」

そして疲れた顔で、ピエールが握り潰した新聞を指さしてみせる。

「最後は全部持って行かれましたが、遊撃士より先に現場に着いたのも事実です。その新聞だって案外、好意的だったし」

たしかに記事には、『クロスベル警察の未来を背負う特務支援課』と書いてある。

読む者が読めば、市民の期待を感じさせる文面だった。

それでもピエールは、ぎらりとランディを睨んだ。

「こんなお情けの文章を頼りにするな！　自分の失態を棚に上げるな！」

「やれやれ、否定ばっかりだな、このおっさん……」

「何か言ったか！」

「いえいえ、なーんにも」

ランディは、わざとらしい作り笑いで叱責をかわす。

だがこう見えて彼は、元クロスベル警備隊員という経歴を持っていた。

クロスベル自治州は、大国の緩衝地域であるため、軍事力を保有しないことが義務づけられている。

だが国境警備のため、装甲車などを持つクロスベル警備隊が存在している。

ランディは、その警備隊から、どういうワケか、特務支援課に引き抜かれたのだ。

接近戦なら、特務支援課随一の腕前だし、恐らくその腕を買われたのだろう……

と、ロイドは思っている。

そして特務支援課、最年少の少女も口を開いた。

「たしかに。結果は残せませんでしたが、私たちの行動に間違いはありません」

妙に大人びた声で、ティオは諭すように言う。

「それにここ数週間の活動で、魔獣との戦闘にも慣れてきました。私たちが討伐した魔獣デ
タは、すべて警察本部にお送りしています。それを見れば、次第に高位の魔獣にも対処して
るのが分かるはずです」

「そ、それはそうだが……」

「討伐した魔獣の残滓からは、七耀石の欠片……セピスも多数、回収しています。これを基
エニグマに組み込む結晶回路を制作すれば、私たちの戦闘力も飛躍的に強化されるはずです」

「むむうっ……」

「さらに支援要請を解決した報酬によって、戦闘装備の向上も見込めます。今すぐ《風の剣
聖》に追いつくとは言いませんが、その見込みを無視されては困ります」

ティオは、すらすらと事実を列挙した。
しかし彼女はまだ、十四歳の少女でもある。
ティオは、とある事情によって三年前からエプスタイン財団に引き取られ、その研究施設で暮らしてきたと言う。
しかしなぜ財団に引き取られたかは、ロイドたちも詳しく知らない。
特務支援課に来たのも、新型魔導杖の実践テスト……とだけ聞いている。
だが人一倍、感応力が高く、導力にも精通したティオは、頼れる仲間の一人だった。

だが、四人の言葉を聞くや、ピエールもさらに怒気を強めた。
「……き、き、貴様ら、一人前に言い訳なんぞしおって！」
ピエールは、立派なデスクをどん！　と叩く。
「揃いも揃って、私に意見するとは何事だ！　いかにも、あの忌々しいセルゲイが集めた人材だな、お前たちは！」
副局長は、ロイドたちの直接の上司の名を出して吼えた。
「まったく！　だから私は、新部署設立など反対だったのだ！　ヒヨっ子ばかりを集めても、警察全体の足を引っ張るだけではないか！」
「そんな、俺たちは……」
ロイドは、釘を刺されたにもかかわらず、前に進み出た。
「……自分の任務に誇りを感じてます。未熟ですが、今までとは違うやり方で市民の安全を守ってみせます」

そもそも、これまでのクロスベル市警は、あまりにも民意を無視していた。
市警の任務は、治安維持。
市民の保護など遊撃士協会に任せておけばいい、という風潮だった。

遊撃士協会は、民間人の安全と、地域の平和を守る民間団体である。
大陸全土に支部を持ち、このクロスベルでも平和活動を行っている。
故にこのクロスベルでは、市警の人気は低く、遊撃士こそ英雄として扱われていた。

それに対抗するように、特務支援課は設立された。
市民からの支援要請に応え、迅速に対応する捜査班として。
そして自発的に、積極的に、市民の保護に動く警察として。
無論、口さがない者は『遊撃士協会のパクリ』と揶揄している。
しかしたとえ遊撃士の真似であろうと、ロイドたちは真摯に任務にあたった。
だが、いかんせん、ロイドたちと遊撃士の実力には、大きな隔たりがあったのだ。

ピエールも、憤然として椅子に座り、こつこつと机を指で叩いた。

「ええい、このままではクロスベル警察の威信に関わる……しかし新部署設立には市長もご同意されているし、予算も下りている以上、簡単に潰すわけには……」

「あの、副局長、さっきから何をぶつぶつと……？」

ロイドが怪訝そうに訊くと、不意にピエールは椅子から立ち上がった。

「そうだ！」

「な、なんですかっ！」

「君たち、悪いことは言わんよ」

急に口調を変えて、ピエールはにこやかに笑いかけた。

「一両日中に、特務支援課からの転属願いを出したまえ」

「はいい？」

「そんな！」

「どういうことっすか？」

「……意味不明です」

ロイドたちが、それぞれの反応を見せると、ピエールは嬉しげに胸を張った。

「どうもこうも、言った通りの意味だ。このままでは特務支援課は、遊撃士協会の噛ませ犬として扱われるだけだ。市民の信頼も得られんし、出世の役にも立たん。それどころか、職務経歴に汚点が残る可能性もある。バカバカしいとは思わんかね？」

ピエールは、背後の棚から人事ファイルを取り出した。

「ふむ……君たちの中では、ロイド君だけが正式な捜査官だったな」

「は、はい……」

「しかもロイド君は、最優秀の成績で警察学校を卒業している。在学中に正式な捜査官資格を得るとは、なかなかの逸材じゃないかね」

ピエールは、ロイドの顔を興味深げに覗き込んだ。

「ならばロイド君は、どこかの捜査課に配属してあげよう。その方が君のためだよ」

「しかし俺は……」

「他の者も、それぞれ適性に合った新しい配属先を用意しておく。それで万事、まるく収まるということだ」

しかしエリィたちも、副局長の魂胆には気づいていた。

捜査員がすべていなくなれば、特務支援課は潰せる。

それを狙っての、配属替えなのだ。

しかしピエールは、さも良策が浮かんだとばかりに、うきうきと言った。

「なあに、悪いようにはせんよ。明日までにじっくり考えてみたまえ。では解散！　転属願いを楽しみに待っておるよ！」

「…………」

ロイドは、仲間たちと顔を見あわせ、嘆息する。
しかしこれが彼ら、特務支援課の現状なのだ。

「やれやれ……何か妙なことになったなあ」
ロイドは、警察本部を出ると天を仰いだ。
見渡せば、クロスベル市の行政区は、まだ昼間。
空には青空が広がっているが、ロイドの心には雲がかかっていた。
「それにしてもピエール副局長、ずいぶん遊撃士協会を気にしていたな」
「ええ。どうやら警察と遊撃士協会には、確執があるみたい」
「まあ、あれだけ《風の剣聖》に見せ場をさらわれたら、面白くないだろうけど……」
ロイドが言うと、エリィが心配そうに顔を覗き込んだ。
「どうしたの？　転属願いを出せって言われたこと、そんなにショックだった？」
「ああ、いや……うん。何だか思ってた場所と、ずいぶん違っていたからさ……」
その言葉に、仲間たちはきょとんとしている。
だがロイドの、警察に対する思いは格別だった。
いや、警察と言うより、そこに属していたある人物に憧れていたのだ。
しかしその人物は、もうこの世にはいない。
だからこそ、ロイドも捜査官となり、彼のように生きたかったのだが……

するとと突然、立て続けにフラッシュが四人に向かって焚かれた。
けれどロイドは驚きもせず、ため息を吐いてみせた。
「またですか、グレイスさん。写真は勘弁してください」
「いいじゃないの、カタいこと言わなくてもさ！」
そう言って、街角から現れたのは、ショートカットの女性。
ゴーグルを頭に載せ、嬉しげにカメラのシャッターを切っている。
クロスベル通信社の記者、グレイス・リンは、ぐいぐいロイドに近づいてきた。
「どうしたのよ、シケた面しちゃって？　なんか難しい事件？」
「ええ、事件と言えば事件ですよ。グレイスさんの書いた記事で大目玉をくらいました」
「あーら、あたしの書いた素敵な記事で、どうしてあなたたちが怒られるのよ？」
だがエリィもランディも、彼女の言葉に眉をひそめた。
「素敵な記事？　いつの話ですそれ？」
「正直、あんたに記事を書かれると、特務支援課の株が下がるんだよなあ……遊撃士のパクリって言いだしたのも、あんただしよ」
ティオも、じとーっとした視線で凝視している。
だがグレイスは気にもせず、丸めた朝刊を振り回してみせた。
「なに言ってるの。今朝の新聞でも、あなたたちの活躍を書いておいたわよ、ほら！」

「だからそれが大目玉の原因ですってば！」
ロイドはがっくり肩を落とすが、グレイスはさして気にもしていない。
「いいじゃない。これだってあなたたちの宣伝になってるのよ。そのうち遊撃士に追いつける日だって来るわよ～」
「……まあ、努力はします」
「それに市民だって、あなたたちには期待してるんだから」
グレイスは、ぽんぽんと紙面を叩いてみせた。
「クロスベル警察がどう思われてるか、あなたたちだって知ってるでしょ？」
「ええ、まあ……」
「それが少しだけ改革されるかもしれない……あなたたちは、そういう期待を担ってるのよ。まあ、今のところ失望の方が多いけど」
「……その失望は、別のことで取り返すしかないですね」
「達観ね、さすが捜査官」
「おだてないでください」
しかしグレイスは、ぽんとロイドの肩を叩いた。
「おだては言わないわよ、あたし」
「グレイスさん……」
「あなたたちのこと、これから先も見届けさせてもらうわ。じゃあね」

言い残して、グレイスは去っていく。
ロイドは、その言葉をしばし噛みしめ、仲間たちに向きなおった。
「戻ろう。新しい支援要請が来ているかもしれない」
「そうしましょう」
「あいよ。腹も減ったしな」
「それがいいと思います」
ロイドたち四人は、たしかな足取りで歩き始めた。

クロスベル市、中央広場。
色彩豊かなタイルが敷き詰められ、カフェレストランや百貨店が面している。
広場の真ん中には、クロスベルを象徴する金色の鐘のオブジェが据えられ、常に多くの人が行き交う、まさに市の中心部だ。

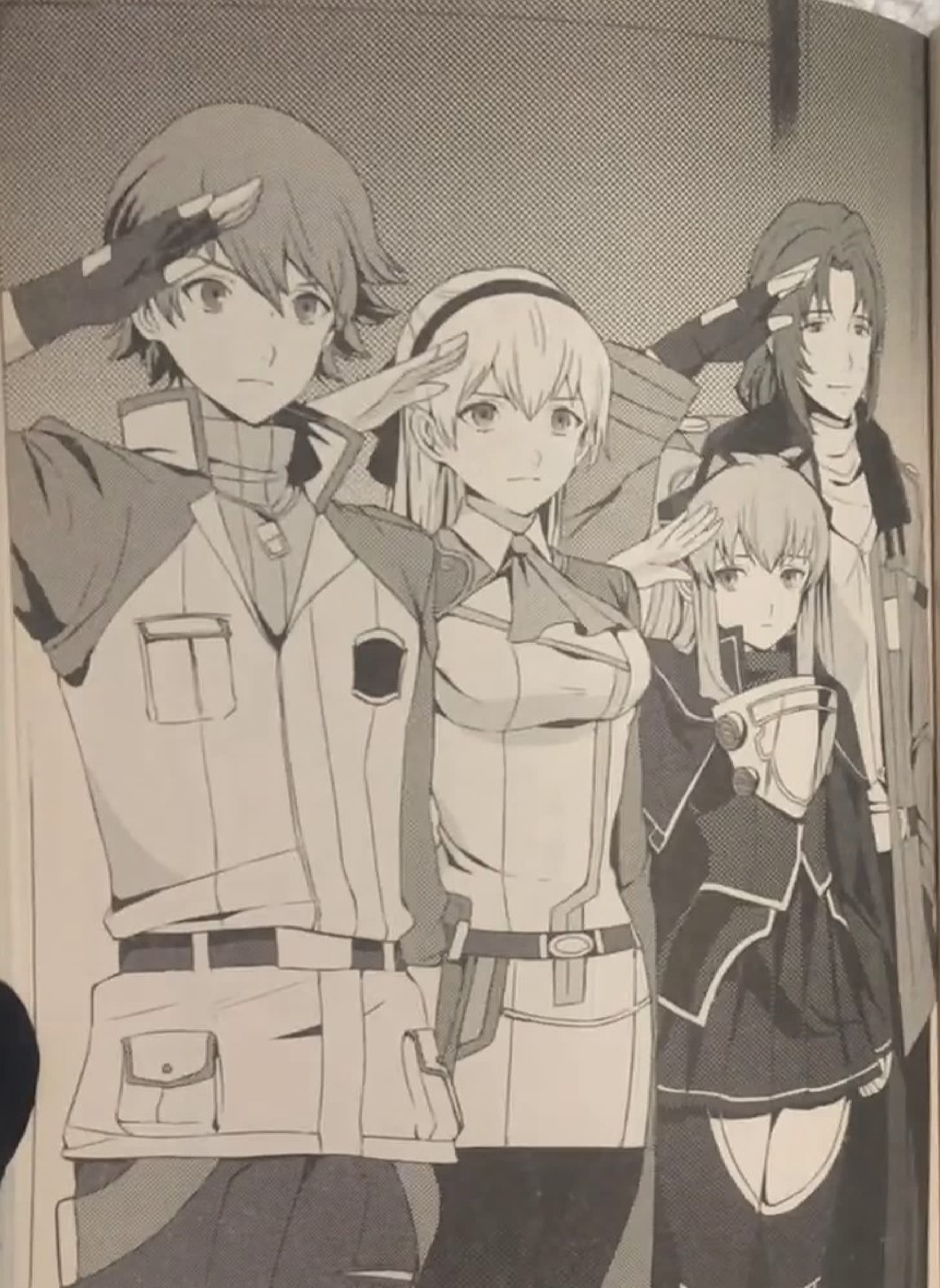
だがその広場から続く狭い階段を下りていくと。
まるですり鉢の底のような場所に、古びたビルが建っていた。
一見、おんぼろアパートメントにしか見えないその建物こそ、クロスベル市警、特務支援課の本拠地であった。
本来なら彼らも警察本部に勤務するはずだが、なにしろ新設された部署である。

警察本部に余分な部屋はなく、出張所としてこの建物を使うことになった。
いずれにしろ、その建物がロイドたちの家であった。

「支援要請が来た。まあ座れ」
言ったのは、煙草をくわえた無精髭の中年男。
セルゲイ・ロウ。三十八歳。
常に執務室に陣取り、ロイドたちの指揮や警察本部との連絡に徹している。
しかし安楽椅子捜査官、というわけでもない。
かつては市警きっての精鋭チームを率いていた実績があるという。
いやそれより、自由無頼に振る舞うアウトロー捜査官だったと、もっぱらの評判だ。
それが原因で、杓子定規なピエール副局長とはソリが合わなかったらしい。
しかし彼こそ、この特務支援課を設立した人物なのだ。
セルゲイは、目にしていた報告書をロイドに渡した。
「ここんとこクロスベル市周辺で、魔獣の被害が多発しているそうだ。お前たちにそれを調
してもらいたい……という要請が来ている」
「市周辺ですか……」
ロイドは、報告書をめくりつつ、疑問に感じた。

そもそもクロスベル警察は、クロスベル市内の治安維持を主任務としている。
周辺部……つまりクロスベル自治州全体には、あまり関与していないのだ。
無論、それには理由がある。
自治州全体の平和維持は、クロスベル警備隊が担っているのだ。

だがセルゲイも、ロイドの疑念を見透かしてうなずいた。
「腑に落ちんかもしれんが、この支援要請は、クロスベル警備隊から来ている」
「警備隊から、ですか？」
ロイドが首を傾げると、ランディも肩をすくめた。
「どういう風の吹き回しだ？　向こうにも縄張り意識はある。警察に任務を譲るとは思え
けどなあ」
警備隊出身らしい、言葉である。
しかしセルゲイはにたりと笑って、煙草をふかした。
「だったら、どんな理由か、直接聞いてみればいいじゃねえか」
「えっ、それはどういう意味……」
問うたロイドは、気配を感じて振り返った。
かつかつと小気味よい靴音が近づき、ドアがノックされる。
執務室に入ってきたのは、ダークトーンの制服に身を包んだ理知的な女性だった。



だがその姿を見た途端、ランディが大きくのけぞった。

「げげっ……あなたは！」

後ずさるランディに、女性は眼光を光らせる。

「あら、ご挨拶ね、ランディ・オルランド。なにが「げげっ」なのかしら？」

「い、いや～……まさかお出ましになるとは……」

ロイドたちも、その制服の意味を知っていた。

まさにクロスベル警備隊。

しかも、背後にはもう一人、若い女性隊員が付き従っている。

セルゲイは、煙草を揉み消して彼女を指した。

「紹介しよう。クロスベル警備隊副司令、ソーニャ二佐だ」

「警備隊の副司令……！」

「し、失礼しました」

ロイドとエリィは、あわてて敬礼し、ティオも見よう見まねで頭に手をやる。

ランディも、何やら困った顔でみなに倣う。

どうやら、警備隊時代に面識があるらしい。

そんな四人を眺めて、ソーニャは納得したように微笑んだ。

「なるほど……あのランディ・オルランドを引き取った部署だから興味はあったけど、なかなか個性的なメンツが揃っているようね」

「は、はあ……」
「あなたが唯一の正式な捜査官、ロイド・バニングスね……あなたが特務支援課のリーダーと
いう認識でよいのかしら？」
問われて、ロイドは仲間たちを見渡した。
実は、誰がリーダーであるかは、明確に決まっていない。
たしかに正式な捜査官はロイドだけだが、年長のランディもいる。
しかしこくこくとうなずく仲間たちに、ロイドも覚悟を決めた。
「……一応、そうです」
「分かったわ。ではこちらからの支援要請を説明しましょう」
「魔獣の被害だと、課長からは聞いています。しかしなぜ俺たちに……」
話しながら、ロイドたちはソファにつく。
ソーニャは、エリィが淹れたコーヒーを口にして、話を続けた。
「ここ一月あまり、自治州各地で特定の魔獣被害が相次いでいるの。その調査を、あなたた
にお願いしたくてね」
「それはかまいませんが……」
ロイドは、口ごもりつつ問いかけた。
「市内での調査ならともかく、市外での魔獣被害の調査ですか？　警備隊の方でも既に調査
なさってるんですよね？」

「ええ、まあ」
「なのに、わざわざ俺たちに依頼するということは……特別な事情があるんですね？」
ロイドの推測を耳にすると、ソーニャは満足げに笑った。
「ご名答。さすが期待の特務支援課ねえ」
「お、おだてないでくださいよ」
「ふふふっ……でも、あなたの言う通りよ。普通の魔獣被害というには、どうも不可解な
が多すぎてね。こちらの調査だけでは手詰まりになってきているの。そこで……別の視点
れようと思って」
エリィも、コーヒーを配り終えて席についた。
「別の視点……ですか」
「そう、あなたたち警察のような、捜査のプロの視点をね。そういった意味では、別にあ
たち特務支援課でなくてもいいんだけど」
なるほど、とティオも静かに言った。
「たとえば精鋭、捜査一課、ですね？」
「まあね。けど、あちらは市内での犯罪捜査に専任しているそうだから、特務支援課を指名
せてもらったの。迷惑だったかしら？」
「いえ、そんなことは……」
ロイドは、コーヒーを一口含んで、気持ちを整えた。

「そういう事情でしたら、喜んで引き受けさせていただきます」
「ありがとう。では早速、資料を……ノエル曹長？」
「はっ！」
今までずっと控えていた女性隊員が、報告書の束を差し出す。
ソーニャは、それをロイドに渡すと、ゆったりソファにもたれた。
「こちらの調査で判明したことは、すべてまとめてあるわ。でも、そこから導き出した私たちの推測は、お伝えせずにおきましょう」
「つまり俺たちの推測だけで捜査しろ……ってことですね」
「ふふっ……本当に勘が働くわね。この事件を預けたのは、正解だったかもしれないわ」
言うとソーニャは、おもむろに立ち上がった。
「では今後は、導力通信を使って、あなたたちと直接やり取りするから、なにか判ったら報告をちょうだい」
「了解しました」
ロイドたちも席を立って敬礼する。
だがソーニャは、さっきからずっと黙っている赤毛の男に近づいた。
「あなたもどうやら、馴染めてるみたいね、ここに？」
「ええ、まあ……」
ランディは、こわばった表情で答えている。

「国境警備や演習よりは、楽しくやらせてもらってますよ」
「それは結構……私も紹介した甲斐があったわ。ノエル曹長、行くわよ」
「はっ！」
二人の女性は、また靴音を鳴らして、特務支援課を出て行く。
彼女たちの姿が見えなくなると、ランディが疲れたようにソファに沈み込んだ。
「はあ～、やれやれだぜ。まさかこっちに来てまで、あの人と関わるとはな」
「だけど珍しいな、ランディが女性を煙たがるなんて」
ロイドは、机の下からグラビア雑誌を取り出してみせた。
いつもランディが読んでいるそれには、水着姿の女優やアイドルの写真がこれでもかと載っている。
しかしランディは、それを引ったくって、顔をしかめた。
「これに載ってるような女の子とは違うんだよ、あの人は」
「ひょっとして、警備隊での上官だったのか？」
「直接の上官じゃないけどな。訓練や軍事演習で指導を受けたことはある」
そうだったの、とエリィも驚き、そして笑った。
「だけど結構、美人じゃない？　それとも、よっぽど厳しい指導を受けたのね？」
「厳しいなんてもんじゃねえよ。怒らせるとメチャクチャ恐いし……まあ指導力じゃあ、警備隊司令を上回ってるな、確実に」

ティオも、グラビア雑誌を不穏な目つきで見つめた。
「怒られたのは、ランディさんの生活態度に問題があったのでは？」
「い、いや俺は決して……」
「どーだか。怪しいもんだわ」
エリィもじとーっとした目でランディを眺めたが、ロイドだけは生真面目に、手元の報告書に視線を戻した。
「とにかくこれに目を通した上で、捜査方針を決めよう。どうやら普通の魔獣被害じゃなさそうだし……課長、捜査には明日から入ります」
「ああ、好きにしろ。そうと決まったら、行った行った」
セルゲイは、うるさい虫でも追い払うように手を打ち振る。
だがロイドは、上司の横顔を見て、ふと思い出した。

『一両日中に、特務支援課からの転属願いを出したまえ』

ピエール副局長の言葉が、脳裏をよぎる。
するとセルゲイも何かに気づいたようで、ふと視線を上げた。
「どうした、まだ何かあるのか？」
「いいえ、別に……失礼します！」

だがロイドが振り向けば、仲間たちも彼の顔を凝視している。
四人の心には、やはりこびりついていたのだ。
副局長の、思惑に満ちた言葉が……

夜も更けた特務支援課。
二階に並んだ部屋は、ひとつずつ、捜査員の私室になっていた。
つまりロイド、エリィ、ランディ、ティオが、ここで寝起きしているのだ。

だがその夜のロイドは自室ではなく、一階の広間で報告書を読んでいた。
しかも夕食を終えてなお、である。
それに気づいて、ランディがコーヒーを手に歩み寄ってきた。
「どうした、ロイド？　魔獣の事件、そんなに難しそうか？」
「……あ……ああ、ランディか。いや、あの……」
「分かってるよ。昼間、副局長に言われた話だろ？」
ランディは、見透かしたように笑っている。
ロイドも観念して、報告書を放り出した。
「……まあ、そうなんだ。ランディは、もう結論を出したみたいだな？」
「ああ、俺はここに残るよ。気楽に動けそうだし、職場と住む場所が一緒なのも気に入って

このまま厄介になるつもりだぜ」
「そうか……」
「お前さんは、迷ってるみたいだな？　まあ、せっかく取った捜査官の資格を無駄にしたくはねえよな？」
「違うんだ、そういう意味じゃない」
ロイドは、大きく首を横に振った。
「出世なんか気にしちゃいないよ。それより、目指している目標から遠ざかっていきそうな気がして……」
「目指している目標……？」
「理想の警察像……みたいなもんかな」
と言ってはみたものの、ロイドの中でそれはまだ確固としていない。
ただピエールがこだわる体裁や、縄張り意識が好きになれなかったのだ。
すると二階から、エリィも静かに下りてきた。
「迷うのも、無理もないと思うわ」
「エリィ……」
「だってこの特務支援課……正直、無理がありすぎるもの」
その言葉に、ランディも眉を寄せた。
「どういう意味だ、それは？」

「そうね……理想は分かるのよ。遊撃士協会のように、市民に寄り添う警察を作りたいっていう理想は。でもそれを任されたのが、駆け出しの私たちでしょ？」
「まあね……」
「正直、遊撃士と肩を並べるには、まだまだ時間がかかる。でも結果を出さなかったら、予算の都合で、本当に部署ごと無くなるかもしれないわ」
エリィは、心配げに睫を伏せる。
その端整な横顔に、ロイドは静かに問いかけた。
「……じゃあ、エリィはどうするんだい？」
「残るわ。配属替えなんてまっぴらだもの」
「そこまで判っているのに？　何か理由でもあるのかい？」
「そうね……」
ロイドの問いに、エリィはしばし沈思して答えた。
「……この街の歪みを観察するには、良さそうな場所だから……かな」
「なるほどね……」
「うまいこと言うな」
ロイドとランディは、顔を見あわせて微笑む。
エリィも少し気恥ずかしそうに、肩をすくめた。
「ふふっ、なんてね。でも私も出世には興味ないし、あの副局長の言いなりになるのも癪に障

るのよね」
「市長の孫娘にしては、硬派だなあ」
「やめてよ、ここでは同僚でしょ？」
「ああ、分かってる」
ロイドは、頼もしげにエリィを見つめた。
しかし彼女の経歴から見れば、特務支援課は回り道どころか、まったく違う道である。
そこに残るという強い意志の裏には、何かエリィなりの事情があるのだろう。
と思った時、ティオも広間に姿を見せた。
「……私も、ここに残ります」
「ティオ、君は……」
「はい。勿論、私はエプスタイン財団から派遣されています。この魔導杖の実践テストのために……」
ティオは、肌身離さず持ち歩くそれを軽く掲げた。
「……ですが、決して命令されて来たわけではありません。むしろ今回の出向は、私がわがままを言わせてもらった結果です」
「そ、そうなのか……？」
「初めて聞いたわ」
「俺も初耳だぜ、ティオすけ」

仲間たちに言われ、ティオはわずかに視線を逸らした。
「……ですから、配属替えは申請しません。それだけはお伝えしておきます」
「分かった……ありがとう、ティオ」
「でも……ロイドさんは、どうなのですか？　一番迷っているように見えますが？」
その言葉で、エリィとランディも視線を向ける。
だがロイドは、笑って否定の色を示した。
「いや、迷ってはいないよ。俺もここに残る」
「そう、よかったわ……」
「ただ……」
「ただ？」
ロイドは一呼吸おいて、エリィに視線を向けた。
「ああいう副局長みたいな人に出くわした時、俺の目標とする人ならどうしたかな……って考えただけなんだ」
「その人が、ロイドの理想像なの？」
「ああ。無鉄砲で……でも気のいい人だった」
ロイドが過去形で言ったことに、仲間たちも気づく。
だがロイド本人は、無意識のまま、彼を思い出して言った。
「俺は、その人みたいになりたくて警察に入ったんだ。だけどいざとなると、あの人みた

捜査官になれるのかな……って思ってさ」

　仲間たちは、しばし押し黙る。

　すると不意に、特務支援課の入口がノックされた。

　しかも小さく、やけに低い位置で。

「誰かしら、こんな時間に……」

　不審に思って、エリィがドアを開け放した。

　すると扉の向こうには、にこにこ笑った子供が二人立っていたのだ。

「あなたたちは……」

「こ、こんばんは……」

「いやー、探しちゃったぜ」

　訪ねてきたのは、リュウとアンリだった。

　声を聞いて、ロイドたちも入口に集まってきた。

「どうしたんだ、二人とも。こんな夜更けに……」

「い、いやさ……その、ちゃんとお礼を言ってなかったと思って」

「ロイドさんたちがいなかったら、たぶん、ボクたち二人とも、魔獣に食べられてたと思います。だからもう一度、お礼を言おうって」

　リュウもアンリも、礼儀正しく背筋を伸ばしている。

　ロイドは、二人の頭をそっと撫でてやった。

「……そうか……二人とも、わざわざ来てくれて、ありがとう」

「まあ、アリオスさんと比べたら頼りなかったけど、これからがんばればいいじゃん」

「ちょ、ちょっと、リュウ。お礼を言いにきたのに、エラそうだよ～」

「ははっ……」

　ロイドは、思わず笑ってしまった。

　リュウの屈託のない言葉は、真実を含んでいたからだ。

　それを教えてくれた少年に、ロイドは優しく訊ねた。

「来てくれてうれしいよ。だけどもうこんな時間だ。家まで送って行くよ」

「ああ、へーきへーき。西通りだからすぐ近くだしさ」

「えっと、ボクは住宅街の方だけど平気です。じゃあ！」

　二人は、そう言って駆け出していく。

　それでもロイドは、心配して走り出した。

「あ、ちょっと！　待てってば！　送って行くって！」

「ロイド、私も行くっ！」

「おいおい、みんなで行く気か？」

「そういうランディさんも、走り出していますが？」

　結局、ロイドたちは、子供たちを囲んで夜の街に出ていった。

　中央広場はもう静かで、星だけが夜空に輝いている。

それを見上げて、ロイドはつぶやいた。
「今、できないからって、諦める必要はないんだよな……」
そして仲間たちに視線を戻す。
「ずっと走り続ければいいんだ。理想に近づけるまで……あの星よりは、きっと近くにあるはずだよ……」
仲間たちも、黙って彼に笑みを向けている。
そしてロイドの胸には、あの人の言葉が甦っていた。

『いいか、ロイド』
『男だったら、目の前のモノに体当たりでぶつかってみろ』
『お前の心で、お前だけの真実をつかみとるんだよ』
『そうすれば、お前が何をしたいか、見えてくるはずだ』
ロイドたちが、転属を拒否したのは、翌朝のことであった。
烈火の如く怒る副局長を尻目に、彼らは捜査へと動き出した。
そして運命は、徐々に彼らを大渦へと巻き込んでいったのだ。

第二章　再会

「狼に似た魔獣……ですか？」
ロイドは、それを聞いて、蜂蜜ジュースを口にした。
蜂蜜はこの村……クロスベル市の北東に位置するアルモリカ村の特産品である。
養蜂業が盛んなだけあって、村の周囲には色とりどりの花畑もあった。

そのアルモリカ村を束ねる村長の家で、ロイドたちは聞き込みを行っていた。
ソーニャ副司令に依頼された魔獣の被害を……

「あれは三週間前、ちょうど新月の晩のことじゃった」
アルモリカ村を束ねるトルタ村長は、居間に座って話し始めた。
「この村に魔獣の群れが忍び込み、農作物などを荒らしていったんじゃ。それで困って、警隊に相談したんじゃが、魔獣の行方が皆目分からなくてのお」
年老いた村長は、温厚そうな声で言う。
ロイドは、並んで座る仲間たちに視線をやった。

「どう思う、ランディ？」
「まあ、警備隊じゃあ魔獣の足取りを追うのは無理だろうな。あちらは軍隊みたいなもんで、猟師じゃあない」
ランディが告げると、エリィも興味深げに口を開いた。
「村長さん、目撃者は居なかったんですか？」
「うむ、街と違って、この村の夜は早いからのう。朝早くの農作業もあるし、ほとんどの村人は眠っておった。朝起きて、ようやく被害に気づいたんじゃよ」
ティオも、こくこくと蜂蜜ジュースを味わってから問うた。
「それで、なぜ狼型の魔獣だと分かったのですか？」
「足跡じゃ。犬よりも大きかったが、間違いない。それから今日まで、被害は起きてないんじゃが……まさか他の場所でも被害が起きていたとはのう」
「ええ……」
ロイドも、手元の報告書に視線を落とした。
警備隊が調べた結果では、被害はクロスベル市周辺に点在していた。
このアルモリカ村をはじめ、南の聖ウルスラ医科大学、北のマインツ鉱山。
一見、同じ魔獣の仕業とは思えぬほど広範囲だ。
だがいずれの場所でも、『狼型の魔獣』の存在が報告されている。
その不可解さこそ、ソーニャ副司令を悩ませ、ロイドたち特務支援課に調査を依頼した理由

なのだろう。
ロイドはもう一度、蜂蜜ジュースを口にした。
「実際、村の被害額はどのくらいですか？　農業に深刻な影響があるとか……」
「いや、そうでもないんじゃ。総被害額にして五万ミラといったところじゃな」
「でも、被害は被害ですよね」
「うむ……しかし今のクロスベルの状況を考えれば、農作物を食われた程度の被害は、むしろ軽いかもしれんのお……」
トルタ村長は、鷹揚に言って、ソファにもたれる。
その言葉が気になり、ロイドはわずかに腰を浮かせた。
「あの……それはどういう意味でしょうか？」
「おっと……これは余計な事を言ったかの。いやいや、忘れてくれ」
「いえ、どんなことでも、お聞かせください」
「そんな言い方をされたら、余計に気になるっすよ」
村長は笑うが、エリィたちも身を乗り出した。
「……お願いします」
するとトルタ村長は、微笑んだまま、蜂蜜ジュースを手にした。
「それもそうじゃな。しかしこれは年寄りの世迷言と思って聞いてくださらんか？」
村長は、急に声を低めた。

「お前さんたち、『神狼』という言葉を聞いたことはあるかね？」
「神狼……？」
ロイドが首をかしげると、ティオがエニグマを取りだした。
彼女のそれは、導力ネットワークでエプスタイン財団のデータベースと繋がっている。
だが検索をかけたティオは、首を横に振った。
「……財団のデータベースにも、そんな言葉はありません。いったいどういうものなんでし
うか？」
それを聞くと、村長は妙に寂しげな表情を浮かべた。
「ふむ……そうなるとクロスベルの街に、この話はもう伝わっておらんのじゃなあ」
「昔の話ですか？」
「うむ。神狼とはな、ずいぶん昔に、このクロスベルの地に棲んでいたという魔獣たちのこ
じゃ。真っ白な毛並みを持つ狼の姿をしておったという」
ロイドたちは、一斉に目を丸くした。
「村長さん、それはまさしく……」
「確証はない。しかし、神狼であっても不思議はなかろう」
村長は、次第に笑みを消して先を続けた。
「古い言い伝えによれば、神狼とはただの魔獣ではなく、女神が遣わした聖獣じゃったら
古より、戦乱に巻き込まれてきたクロスベルの人々を見守り、時には人々に助言を授け

「そういえば……」
ロイドは、ふと幼い頃の記憶を思い出した。
「子供の頃、白い狼が出てくる絵本を読んだなあ……図書館に置いてあった気がする……」
「ふむ、おそらくその絵本は、伝承を下敷きにしとるのだろう。しかし、この数十年でク
ベルはすっかり変わってしまった」
そう言って村長は、ソファから立ち上がり、窓辺に向かった。
「ほれ、どうじゃな、この村の様子は？　お前さんたちが住むクロスベル市とは、ずい
うじゃろう？」
ロイドも、のどかな農村風景に目をやった。
緑の丘と、青空が広がる光景は、どこか心が安らぐ気がする。
村長の家も、昔ながらの木造建築で、木の香りに満ちていた。
だが村長は、ため息を交えてつぶやいた。
「あんたたちには新鮮じゃろうが、これがクロスベルの本来の姿じゃった。しかしクロ
市は、貿易都市として発展するうち、こういった元々の姿を忘れてしまった」
「…………」
「そして過去の伝承も風化し、神狼たちもいつしか姿を消したという。それがもし戻っ
のなら……何かの警鐘を鳴らしに現れたのかもしれん……と思ってな」

「警鐘……ですか」
ロイドが言うと、村長は再びソファに腰を下ろした。
「こう言っては何じゃが、今のクロスベル市の発展は、あまりに急すぎる。時折、バスで街に出ると、あまりの変わりように愕然とするくらいじゃ」
その嘆きに、エリィがすまなそうに一礼した。
「……たしかに市街地の開発を急ぐあまり、周辺部を置き去りにしたかもしれません」
それは、市長の孫娘としての言葉でもあった。
ティオも超然としつつも、木の温もりに満ちた家をゆっくりと眺めた。
「この村にも導力ネットワークが引かれているようですが、すべてをクロスベルのように変える必要もなさそうですね」
二人が神妙な顔をすると、村長は照れたように破顔した。
「説教するつもりはなかったんじゃ。これは年寄りの世迷言。本気に捉えんでくだされ」
「いえ……色々と参考になりました」
ロイドたちは礼を言って、村長の家を辞した。
その後も、村人たちに聞き取りを行ったが、目新しい情報は皆無である。
結局、ロイドたちがクロスベル市へ戻るバス停に立ったのは、もう夕暮れの頃だった。
「手がかりは、意外に少なかったなあ」

ロイドは、バス停の傍でつぶやいた。
すでに空は暗くなり、星も瞬き始めている。
エリィも、時刻表を確かめつつ、うなずいた。
「そうね……警備隊が放り出した理由が分かった気がするわ」
「ああ、たしかに」
ランディも、大あくびをして農村風景を眺めた。
「目撃情報もないし、襲われたのは一回だけなんだからなあ」
するとティオが、魔導杖を握って、ぴくんっと何かに反応した。
「どうした、ティオ？」
ロイドが問うと、ティオはしきりに周囲を警戒した。
「いえ……何か、遠くで聞こえた気がして」
「いったいなにが……」
「……センサーを最大にしてみます」
言うと、ティオの髪飾りが赤光を放った。
それはクロスベル警察から支給された装備ではなく、どうやらエプスタイン財団製の、個人装備らしい。
センサーは何度も点滅を繰り返したが、やがて発光を停止した。
「……すみません。どうやら私の気のせいだったようです」

「いや、それは別にいいけど……最初に聞こえたのは、どんな音だったんだ？」
「ええと……何かの、遠吠えだったような気が……」
ティオの言葉に、ロイドたちは顔を見あわせた。
「なんだって、それじゃあ……！」
「例の狼型魔獣じゃないの？」
「この近くにいるってことかよ！　あ、だけど……」
ロイドたちは、村長の証言を思い出した。
狼の遠吠えを聞いた者は、誰一人いないのだ。
あるいは魔獣ではなく、本物の狼という可能性もある。
しかし警戒するロイドたちに、ティオはあわてて手をふった。
「いえ、ただの聞き間違いかもしれません。センサーの誤作動かもしれませんし」
だがロイドは、衝撃警棒を装着し、周囲を見渡した。
「ティオ、そのセンサーの感知範囲はどれくらいなんだ？」
「ええと、半径約五〇セルジュです」
「そ、そんなに……！」
ロイドが驚くのも無理はない。
一セルジュは、一〇〇アージュ。
半径約五〇セルジュとなれば、人間が徒歩一時間で到達できる範囲である。

エリィも、諦めたように腰に手を当てた。
「そんなに広い範囲じゃ、どこから聞こえたか、見当がつかないわね」
「日も落ちたし、今から探すのも一苦労だしなあ」
ランディも、斧槍を両肩に担いで呻いた。
しかし当のティオは……
「……あ、あの……」
「ん？　どうした、ティオ？」
「私が……聞き間違ったって思わないんですか？」
ロイドたちは、その反問にまた顔を見あわせた。
「いやだってさ……」
「実際、聞こえたんでしょう、ティオちゃん？」
「だったら、なあ……？」
けれどティオは、それが腑に落ちぬように眉間に皺を寄せた。
「はい、たしかに……でも、普通の人に聞こえない音が、私にだけ聞こえた……そう言われたら、気のせいだと考えるものではないのですか？」
だがロイドは、ぽんとティオの肩を叩いた。
「疑うわけないだろ、ティオのことを」
「えっ？」

「まだ短い付き合いだけど、いつも正しいことを言うってことは分かってるよ」
「……あ、ありがとうございます……」
恐縮するティオに、エリィも微笑みかけた。
「あなたが凄い子だってことも、みんな分かってるのよ」
「そうそう」
ランディも笑って、斧槍の先で地平線を指した。
「ティオすけが言うなら、きっとどこかで吼えてるんだろ。きっと魔獣がさ」
「……は、はあ……」
ティオは、今さら、仲間たちの特異さに気づいたようだった。
そして気恥ずかしそうな声で、けれどいつもの表情を保って、唇を動かす。
「あの、忘れてください……今のこと……私……みなさんを……」
そこへ、街道の向こうからバスが現れ、四人はそれへ乗り込んだ。
だがクロスベル市に戻る車内では、ティオはさして口を開かなかった。
しかし、車窓を見つめるティオの横顔はどこか……

翌日。
クロスベル市から南に延びるウルスラ街道。
それをエルム湖沿いに下れば、湖畔に建つ大きな施設に行き当たる。

聖ウルスラ医科大学病院。
大陸有数の総合病院であり、最先端の近代治療が受けられる医療機関である。
周辺国からも患者を受け入れているため、病棟も広大な広さを誇っていた。
その正門をくぐった途端……

「お！　ナース服のお姉ちゃん！　あっちにもこっちにも！　いやあ、眼福、眼福～」
ランディは、浮き浮きしながら顔をにやつかせた。
たしかに広い敷地内には、ピンク色の制服を着た女性看護師たちが行き交っている。
しかしエリィとティオは、じとーっとした目でランディを睨んでいた。
「ランディ、私たち、仕事で来てるのよ？」
「ランディさんらしいと言えば、らしいですね……」
だがつぶやいて、ティオは少し表情をこわばらせた。
いつもより顔が青いことに、エリィが気づく。
「どうしたの、ティオちゃん？　ここに来るバスで酔った？」
「あ……いえ。少々、病院が苦手なだけで……消毒液の匂いとか注射が……」
「そう……なら、いいけど」
しかしロイドも、心配そうにティオを見つめた。

「具合が悪いなら、少し休んだ方がいいよ。ここは病院なんだし」
「いいえ、本当に……それに長く待たされたら困ります」
「うん。まあ、そうだな……でも、無理しないで言ってくれよ。もしなんだったら……知り合いに言って、早く看てもらえるようにするから」
ロイドが言うと、エリィが意外そうな顔をした。
「あら、ここに知り合いがいるの、ロイド？」
「ああ。本当なら、警察学校を卒業してすぐ訪ねるつもりだったんだけど、特務支援課に来てから、忙しかったからなあ……」
「……初耳ですね」
ティオも、興味深げに近づいてくる。
ランディは、にやにやしたまま、問うてきた。
「勧めてるってことは、医者か？　俺としては、美人看護師を期待してるんだが」
「もうっ、ランディったら……」
「そう都合よくはいきませんよ」
エリィとティオは、ないないとばかりに手を打ち振る。
しかしロイドは、申し訳なさそうに口を開いた。
「いやそれが……本当に女性の看護師なんだ」
「なにいっ！」

「若手のまとめ役みたいで、毎日忙しいみたいだよ」
瞬間、ランディがロイドに急接近した。
「そ、そのお姉さん、年は幾つだっ？」
「ええと、俺より五歳上だから……二十三歳になったかな？」
「美人かっ？」
「う、うーん……まあ、綺麗な人だとは思うけど」
それを聞いたランディは、天に向かって拳を突き上げた。
「年上のお姉さん！　しかもナース服！　ストライクだ！　ど真ん中にストライクだ！」
そして戸惑うロイドの肩をがばっと抱きしめる。
「いや～、俺は幸せだなあ～。お前みたいな親友と巡り合えて！」
「あ、あの、ランディ？」
「というわけで、紹介よろしくっ！」
その横では、エリィとティオが、さらにじと目を強めていた。
「はぁ……男子ってこれだから」
「まったくです……そんなにナース服が好きですか、ロイドさん？」
「ちょっ！　一緒にしないでくれよ！」
ロイドは困惑しつつも、その人のことを思い出した。
「まあ、いいか……魔獣被害の話もしやすそうだし……受付で呼び出してもらおう」

「そうだ、呼び出せ！　すぐ呼び出せ！　全力で呼び出せ！」
「あのなあ……」
だがロイドとしても、久しぶりに会っておきたかった。
かつて、兄を愛してくれた人に……
病院の受付には、大勢の外来患者たちが出入りしていた。
医師や看護師も、忙しそうに立ち働いている。
ロイドたちは、その間を縫って受付にたどり着いた。
「クロスベル警察、特務支援課のロイド・バニングス捜査官です」
ロイドは、受付の女性に胸のマークを示した。
「捜査任務のために伺わせていただきました。その、魔獣被害について……」
すると女性は、ああとばかりに納得した。
「先日は警備隊の方がいらっしゃいましたが、今度は警察の方が？」
「ええ、その警備隊から要請がありまして。事件の概要をひととおり、お聞かせくだされば
……それで、こちらに……」
ロイドが、その人の名を告げようとした時だった。
「……ロイド……？」
呼ばれた途端、ロイドに、懐かしい思いがこみ上げた。

立っていたのは、ピンク色の制服をまとった女性看護師。
栗色の長い髪をゆるく巻き、穏やかな笑みでロイドを見つめている。
ロイドも、三年ぶりに会う、その女性の名を呼んだ。
「セシル姉、久しぶ……」
「…………！」
だが言いかけた時。
女性は、ロイドの元に駆け寄った。
そして豊かな胸に、ロイドを強く、強く、抱きしめる。
「ちょ、セシル姉……!?」
ロイドは、思わずその腕から逃れようとする。
だが女性は、かまわずロイドに力を込めた。
「やっと……やっと会えたわね……」
「セシル姉……」
「お帰りなさい……本当に久しぶりね、ロイド……」
セシルと呼ばれた女性は、ようやく力を緩める。
その優しげな表情と、豊満な胸元に、仲間たちもそれぞれの反応を見せた。
「きれいな人ね……」
「しかし、なんとも……！」

「……ぐらまーです……」
しかしそんな反応をよそに、ロイドも懐かしい顔を凝視した。
「すぐに会いに来なくてごめん。ずっと忙しくてさ……」
「仕方ないわ。あなたももう捜査官だものね」
「う、うん、まあ……それより、さすがに恥ずかしすぎるよ……」
「ふふふっ……いいからこのまま、お姉ちゃんに抱きしめられてなさい」
優しげな声は、悪戯っぽく笑ってロイドの頭を撫でた。
「こんなに大きくなって……警察学校に入る時は、私と同じくらいだったのに」
「そ、そりゃあ、育ち盛りだし……」
そこでようやく、エリィがわざとらしく咳払いをした。
「えーっ、ごほんっ！　ごほんっ！」
「あ……ごめん、みんな。紹介するよ。セシル・ノイエスさんだ」
ロイドが告げると、その女性、セシルは三人にも穏やかな笑みを向けた。
「はじめまして……みなさん、ロイドと同じ警察の方？」
「は、はい……エリィ・マクダエルと申します」
「ランディ・オルランドっす！　以後、お見知りおきを！」
「……ティオ・プラトーです」
挨拶をすると、セシルは、エリィとティオを見比べた。

「よろしくね。でも一瞬、ロイドが彼女を連れて来たかと思っちゃったわ」
「……っ！」
「…………」
エリィとティオは、それぞれ異なる驚きを発する。
あわててロイドは、セシルの前に割って入った。
「な、何、言い出すんだよ！　いきなり彼女なんて連れて来るワケが……」
「だって三年ぶりでしょ？　てっきり紹介してくれるのかな～って。それとも本当に付き合ってるけど、まだみんなには隠しているとか？」
「あ、あのねえ……」
ロイドは、すっかりセシルのペースにはまっていた。
だが傍で見ているエリィたちも、彼女の天真爛漫な雰囲気に魅了されている。
それでもロイドは、しゃきっと背筋を伸ばして、意識をあらためた。
「それよりセシル姉、俺たちは魔獣騒ぎで来たんだ」
「ああ、あのこと……」
「実際に目撃した人とか、被害に遭われた人はいるの？」
「ええ、うちの研修医の先生が襲われて怪我をしたのよ……直接、話を聞く？」
「できれば、そうさせてもらいたいな」
「分かったわ。じゃあついて来て。病室へ案内するわ」

セシルはそう言って、ロイドたちを病院の奥へと案内した。
ロイドにとっては、三年ぶりに見る後ろ姿であった。

聖ウルスラ医科大学の病棟は広く、幾つもの病室が連なっていた。
ロイドたちは、迷路のような通路をセシルに案内され、奥へと進む。
そしてようやくたどり着いた一室で……

「あれは一週間前、研修レポートを書き上げた夜のことだったなあ」
ベッドに座っているのは、リットンという名の研修医である。
彼は、頭や腕に巻かれた包帯をさすりながら、話し始めた。
「僕は疲れていたので、眠る前に夜風に当たろうと、屋上庭園に出たんだ。そこで魔獣に襲われたんだ」
ロイドは、窓の外からその場所を見た。
寮棟と病棟を繋いでいるのが、患者の散歩用に造られた屋上庭園である。
木々も植えられた広い場所だが、一番低いところでも、地上三階ほどの高さがある。
いくら魔獣でも、簡単に侵入できる場所ではない。
しかしリットンは、真面目な顔で説明を続けた。
「いきなり暗がりから、真っ黒な狼みたいな魔獣が三匹も飛び出して、僕に襲いかかってきた

んだ。僕は逃げようとしたけど意識を失って……」

「三匹もですか……」

「うん。でも記憶があるのは、そこまでなんだ。翌朝、病院の職員に発見されて、そのまま入院ってわけだよ」

そこへセシルが、カルテと共に傷痕の写真を差し出した。

リットンの肩には、たしかに鋭利な爪で引っ掻いたような傷がある。

しかしロイドは、リットンの話に違和感を覚えていた。

「それにしても変ですね。意識を失ったのに、魔獣はあなたをそのままにして立ち去った……ということですよね？」

「そうなんだよ。本来なら食い殺されてもおかしくないのに……」

ロイドも、顎に手をやって考え込んだ。

リットンという獲物を放置した理由はなんなのか？

あるいは、最初から食い殺すのが目的ではなかったのか……

「ありがとうございました、リットンさん。また何か思い出したら、ご連絡ください」

ロイドたちはそう言って病室を辞し、通路に集まった。

「セシル姉、俺たちは現場を調べてくるよ。屋上庭園はあっち？」

「ええ、そうよ。一緒についていきたいけど、私も仕事があるから……」

「いいんだよ、ありがとう」

ロイドは、礼を言って屋上に向かおうとした。

しかしセシルの瞳が、なぜか儚げに揺れている。

ロイドは立ち止まって、彼女に向きなおった。

「どうしたんだよ、セシル姉、いったい……」

「ううん、なんだかね……いろいろ思い出しちゃって……」

セシルは、微笑を維持しながら、声だけを震わせた。

「今のロイドを見てたら、ああ、捜査官になったんだなあって……そうしたら……」

「セシル姉……」

彼女が、何を思い出したか、ロイドにも分かっている。

けれど分かっていても、どうすることもできないものだった。

セシルもあわてて顔を伏せ、ロイドたちを促した。

「ほら、もう行って……任務があるんでしょ？」

「うん……帰る時、また挨拶に行くよ」

「分かったわ、じゃあ……」

背を向けたセシルは、急ぎ足で通路を曲がっていく。

エリィたちも心配げに、しかし何も言わず、彼女を見送っている。

誰の目にも、嗚咽を堪えているのは明らかだった……

その後、ロイドたちは屋上庭園の現場検証に取りかかった。
リットンが襲われてから、すでに一週間。
もはや物証は、何も残されていないかに思われた。
しかし屋上に積まれた木箱の上には、確かに犬に似た足跡が記されていた。
しかも複数。リットンの証言を裏付けるものである。
だがそれ以上、ロイドたちが得たモノはない。
リットンがなぜ、放置されたのかも……

「とにかく魔獣は出たんだ。しかもこの病院内に」
ロイドは、屋上から棟内に戻る階段を下った。
「恐らく手すりを跳び越えて、病院内に忍び込んだと見るべきだな」
「病院の人にも伝えた方がいいわね」
エリィも、しきりにメモを取りながら言う。
「屋上に鉄柵を増設すれば、侵入が防げると思うわ」
「うん、第二の被害者を出さないためにもね。それもセシル姉に伝えないとな……」
言ううちに、ロイドたちは、ナースステーションに近づく。
だが忙しく立ち働く看護師たちの姿に、ランディが色めき立った。
「待て、ロイド、ここは俺に任せておけ」

「な、なにをぅ」
「いいから、いいから」
ランディは、ロイドを押し退け、若い看護師にウィンクをかました。
「ねえ、そこの君っー」
「は、はい？」
まだ新人らしい看護師の胸には、フィリアと書かれた名札がある。
ランディは、あくまで爽やかに笑いかけた。
「いきなりごめんよ。俺の名前はランディ。クロスベル警察の者だ」
「あ……ああ、魔獣の調査にいらした……」
「そうなんだ。けどもう調査は終わってね。これからクロスベル市に戻るんだけど、もし良かったら、街で食事でもと思ってさ」
するとフィリアは、困りながらも、嬉しそうに笑って見せた。
「すみません、私、これから夜勤なんですよ～」
「それは残念。じゃあ休みの日に、みんなで合コンでもどう？　クロスベルに最近、おしゃれな居酒屋ができてさぁ」
「わあ～、行ってみたいですぅ」
「だろう？　他にも君みたいにかわいい子がいたら是非……」
その会話を聞き、ロイドたちはどんよりした表情に変わった。

「なにが任せておけだよ、ランディ……」
「よくまあ、勤務中にナンパなんてできるわね」
「しかし相手の女性にも問題があるような……」
だがランディは、仲間たちの冷たい視線にも気づかず、しゃべり続けている。
「いや～、しかし光栄だな。君みたいにかわいい子とお近づきになれるなんて」
「やだあ～、ランディさんってば。お世辞が上手ですね」
「お世辞じゃないよ、ここにいる子はみんな美人だけど、特に君は……」
と、そこまで言いかけた時。
不意にナースステーションの奥から、貫禄のある声が聞こえてきた。
「おや、みんな美人だなんて照れちまうねえ」
「そうそう、みんな美人……って、ええっ！」
ランディは、現れた看護師を見つめて、我に返った。
どっしりとした体型の中年看護師は、ぎろりとランディを睨んでいる。
その眼光に、フィリアの笑顔も凍り付いた。
「あ、あはは、マーサ師長……」
「あはは、じゃないよ、フィリア！　午後の検温はどうしたんだい？　あんたの担当だろう
さっさとお行きっ！」
「はい――っ！」

フィリアは、怯えた子リスのように走り去っていく。
マーサと呼ばれた看護師長は、ドスの利いた顔でランディを睨み付けた。
「困るね、いくら警察の人でも、うちでナンパなんかされちゃあ！」
「こ、これは失礼……」
「それともあたしも居酒屋に連れてってくれるかい？　なにしろみんな美人って言うく
からねえ。あんた相当、守備範囲が広いんだろ？」
「い、いえ、さすがにそこまでは……」
身を縮めるランディに、エリィはくすくすと笑い出す。
代わって、ロイドが前に出た。
「すみません。ロイド・バニングスと申します」
「ロイド？　ああ、セシルの知り合いの捜査官ってあんたかい？」
「ええ。そろそろ街に戻りますので、セシル姉に挨拶だけしようと思いまして……」
すると看護師長は、壁に貼られた勤務時間表を確認した。
「ええと、この時間、セシルは……三階の一番奥の病室にいるはずだよ」
「行ってもかまいませんか？」
「少しならね。患者さんもいるから、長居は勘弁して……」
と言いながら、看護師長は、ふとロイドの背後を覗き込んだ。
「あれ……あんた……」

マーサの視線の先には、ティオがいる。
ティオは、少しうつむいていたが、看護師長はすぐに声を上げた。
「やっぱりそうだ！　あんた、ティオちゃん！　ティオちゃんだろ？」
マーサは、ナースステーションから飛び出し、ティオに駆け寄る。
ティオは、困惑しつつも、ぺこりと頭を下げた。
「……お久しぶりです」
「やっぱりそうだ！　大きくなったねえ！　こんなにかわいくなって！　だけどどうしてあ[illegible]た、警察の人たちと……？」
ロイドたちも、きょとんとしてその会話を目撃している。
しかしティオも、はぐらかすように、ぎごちない笑みを浮かべた。
「いろいろ事情があって……今は、特務支援課に勤めているんです」
「そうだったのかい……立派になったねえ」
「いえ、そんな……また近いうちに挨拶に来ます」
そう言うとティオは、先に立って病棟へ向かう。
あわてて追いかけたロイドは、彼女の背中に問いかけた。
「ティオ……もしかして以前、この病院に……？」
「……はい。五年ほど前のことです。黙っているつもりはなかったんですけど……」
その声が消え入りそうなことに、ロイドは気づいた。

ランティも察したようで一瞬躊躇いながら声をかける。
「そうだったのか……それは……別に、気にするなよ。誰にだって言いにくいことは、[illegible]だしさ……」
「……はい。ですが……」
言いさして、ティオは歩みを止める。
ロイドも今頃、悟った。
病院に入る前、ティオが見せた変調、あれは……
「少々、病院が苦手なだけで……消毒液の匂いとか注射が……」
あれは、過去の記憶が甦ったせいなのか。
しかしそれに触れることは、ロイドも気が咎めた。
と言って、ティオにかける言葉も……
そう戸惑っていると、急にエリィが進み出た。
そして細い腕で、ティオを後ろから抱きすくめる。
「ほらっ」
「エ、エリィさん……？」
驚くティオに、エリィはにこやかに微笑んでみせた。
「そんな顔しないで。せっかくのかわいい顔が台無しよ？」
「…………」

「私たち、まだ出会って一ヶ月よ。まだ、すべて打ち明けなくてもいいわ」
「エリィさん……」
「心に秘めておきたいことがあるなら、そのままでいいの。私たちに後ろめたく思う必要なんてないんだからね」
その言葉を聞いて、ようやくティオも表情を緩めた。
「……そうですね。少し、気にしすぎていたかもしれません」
そしてロイドとランディに振り返った。
「……セシルさんの所に行きましょう。調査結果を報告しませんと」
歩き出すティオの横顔は、いつもの大人びたものだった。
しかしロイドたちも、ようやく理解したのだ。
ティオも十四歳の女の子で、彼女なりの過去を有していると……

病棟の、奥へ、奥へ。
ロイドたちは、真っ白な通路を進んでいく。
やがてセシルの姿が見えると、ロイドはその背中に声をかけようとした。
「セシル姉、俺たちそろそろ……」
だがロイドは、自ら声を途切れさせた。
セシルがいる病室には、大きなベッドが据えられている。

その上には、十歳ぐらいの少女が身を起こしていたのだ。
きちんと揃えられた黒髪。
穏やかな表情で、セシルと談笑しているかに見える。
しかしロイドは、何か違和感を覚えていた。
話しかけてはいけない雰囲気……だが気づいたセシルが振り返った。
「あら、ロイド？　調査はもう終わったの？」
「……ああ。そうなんだ。そろそろ街に戻ろうと思って」
「そう、ご苦労様。どうぞ、入ったら？」
「いや、だけど、仕事の邪魔しちゃ……」
「ふふっ、大丈夫よ」
そう言ってセシルは、ベッドの少女に視線を戻した。
「シズクちゃん、今、話していたお兄さんたちよ。警察に勤めてる、正義の味方なの」
「せ、正義の味方って……」
ロイドが戸惑うと、少女はくすくすと小さな笑い声を立てた。
「はじめまして。私はシズク……シズク・マクレインっていいます」
年齢の割には、しっかりした挨拶である。
だがロイドたちも、ようやく気がついた。
シズクは、さっきからずっと瞼を閉じているのだ。

今の挨拶も、ロイドたちの声を聞いて、その方向へ顔を向けている。
事情を承知して、ロイドたちも病室に足を踏み入れた。
「こちらこそ、はじめまして。俺はロイド・バニングス」
「私は、エリィ・マクダエルよ。シズクちゃん」
「俺は、ランディ・オルランド。そこにいるセシルさんの恋……ぐほっ！」
「（杖でランディを突っつき）私は、ティオ・プラトーです」
するとシズクは、嬉しげに顔をほころばせた。
「わあ、皆さん、とっても優しそう……それに特務支援課の人が来てくれるなんて……」
「俺たちのこと、知ってるの？」
「はい。父から、新聞を読み聞かせてもらって……」
「へえ、優しいお父さんだね」
と言ってロイドは、あることに気がついた。
「待てよ。シズク・マクレイン……マクレインって……」
「どこかで聞いたことがあるような……」
ランディも首をひねると、セシルが思わず笑い出した。
「ふふ、まだ分からないの？　シズクちゃんのお父さんは、アリオス・マクレインさん……
撃士、《風の剣聖》よ」
「えっ！」

「アリオスさんの！」
「あのおっさん、子供がいたのか！」
「……意外です」
ロイドたちが、それぞれの反応を見せると、シズクも顔を傾げた。
「あの……皆さん、お父さんとはお知り合いですか？」
「まあ、知り合いというか……危ないところを助けてもらったんだ」
「そうでしたか……うちのお父さん、無愛想だから、お気を悪くされませんでしたか
案じる声も、やけに大人びている。
ロイドは、シズクに近づくと、優しく声をかけた。
「そんなことはないよ。むしろ良い手本を見せてもらったと思ってるし」
エリィも、懸念を解くように語りかける。
「ええ。頼りになりそうな方だったわ。本当に、素敵なお父様で羨ましいわね」
「え、えへへ……ありがとうございます」
父を褒められたシズクは、やっと子供らしく笑った。
するとセシルが、シズクの肩にそっと手を置いた。
「ねえ、シズクちゃん、あの夜のこと、ロイドたちに話してあげて」
「あの夜……ああ、リットン先生が怪我をした夜ですね」
その言葉に、ロイドも捜査官の顔に戻った。

「えっ……じゃあ、シズクちゃんも魔獣に気づいたのかい？」
「はい……いえ、私が感じたのは、音だけですけど……」
そう言ってシズクは、ベッドの傍に手を伸ばした。
どうやら身の回りのモノの位置は分かっているようで、一冊の本を引き寄せる。
「あの夜は眠れなかったから、この点字の本を読んでいたんです。そうしたら、悲鳴が聞こえてきて……」
「リットンさんの声ね？」
エリィが訊ねると、シズクはこくんとうなずいた。
「たぶん……それで気になって、窓を開けたら……動物の息づかいみたいな音が聞こえて……しばらくしたら何匹もの足音が遠ざかっていって……」
それを聞くと、ティオがロイドに視線を移した。
「リットンさんの証言と一致しますね。やはり魔獣は複数のようです」
「ああ……ありがとう、シズクちゃん。参考になったよ」
ロイドは、そう言って少女の頭を撫でる。
するとシズクは、おずおずと切りだした。
「そ、それから……私の空耳かもしれませんけど……」
「空耳？　他にも何か聞こえたのかい？」
「はい。なにか……ピーッっていう、甲高い音が聞こえたような気がしたんです」

「ピーッと、甲高い音……？」
ロイドたちは、互いの顔を見あわせた。
「どう思う、みんな？」
「魔獣の鳴き声かしら？」
「けど狼型の魔獣には、似つかわしくねえよな」
「魔獣の声紋データを検索してみましょう。何か分かるかもしれません」
ティオは、新たな手がかりを得て、表情を引き締めている。
ロイドはあらためて、シズクの手を握りしめた。
「シズクちゃん、教えてくれてありがとう。何か分かったら、報告させてもらうよ」
「はい。ロイドさんたちも、調査、がんばってくださいね」
エリィも、ランディも、ティオも。
小さな少女に触れ、それぞれのぬくもりを伝えていく。

そしてセシルと共に病室を出ると、ロイドはおもむろに切りだした。
「セシル姉。シズクちゃんは……」
「うん……数年前の事故でね、目の光を……」
さっきまでにこやかだったセシルの表情にも陰が射している。
だが彼女は、看護師らしい健気な笑顔をすぐに取り戻した。

「でも、回復の見込みはあるのよ。治療を受けながら、ここで療養生活をしているの」

「そうだったのか……」

「お父様がとても忙しくて……滅多に会えないから寂しい思いもしているわ。でもあの子は、わざと明るく振る舞って……」

セシルの言葉に、ロイドは力強く応えた。

「シズクちゃんや、他にも大勢、患者さんがいるんだ。魔獣騒ぎも、できるだけ早く解決してみせるよ」

「ふふっ、頼もしいこと言うのね」

「俺だってもう子供じゃないよ、セシル姉」

「そうね。でもあなたたちだったら、いずれアリオスさんにも負けないくらい、いい仕事ができると思うわ」

その激励を聞くと、エリィたちも表情を緩ませた。

「ありがとうございます、セシルさん。励みになります」

「か、感激っす！」

「……力を尽くして、捜査に当たります」

そしてセシルは、もう一度、ロイドの顔を見つめた。

「ロイド、お互い休みが取れたら……お墓参りに行きましょう」

「……ああ、そうだね」

不意の台詞に、仲間たちが硬直する。

だがセシルは気にもせず、ロイドの手を握りしめた。

「約束よ、お願い」

「分かってる。俺だって……」

ロイドも言いかけたが、それ以上の言葉は浮かばない。

そっとセシルの手をふりほどき、敬礼するだけで精一杯だった。

「じゃあ、セシル姉……また、そのうちに……」

「約束、忘れたら承知しないわよ」

その笑顔に、エリィたちも悟った。

明るく振る舞っているのは、シズクだけではなかったのだ……

第三章　神狼の山

ロイドたちが、聖ウルスラ医科大学から戻った翌朝。

特務支援課を、再びソーニャ副司令が訪れた。

だが彼女から告げられたのは、意外な変転であった。

「警戒を解くんですか？」

ロイドは、思わずソファから身を乗り出した。

だが対面するソーニャは、出されたコーヒーをそそとして口にする。

「ええ。警備隊では、マインツ鉱山町を巡回していたんだけど、今朝をもって中止することになったの」

その報告に、エリィが捜査手帳をめくった。

「時期尚早ではありませんか？　鉱山町に魔獣が現れたのは、三日前ですよね？」

「そうなのよ。今のところ、一番新しい目撃情報が得られているのはマインツ鉱山町だし……最も警戒すべき場所だと思っていたわ。けど警備隊司令からの命令でね。これ以上、本来の任務から外れたことはするなって」

「ちっ……あのオヤジか」

ランディが憎々しげにつぶやくと、ロイドもそれが気になった。

「どういう人物なんだ、警備隊司令ってのは？」

「一応、警備隊を束ねちゃいるが、帝国派議員と深い繋がりがあるらしくてな。ロクに仕事もしないで、接待ばかりやってるみたいだぜ」

ランディは、目の前に副司令がいるにもかかわらず、言い放った。

しかしソーニャも、それを黙って聞き流している。

不審に思ったのか、ティオもおもむろに口を開いた。

「しかしなぜですか？　魔獣の被害を放置するなんて問題では？」

「もちろんよ。けれど司令が言うには……三週間にも亘って魔獣の正体が突き止められなかったし、実際の被害がそれほど深刻ではなかったから……だと」

「そうは言っても……」

ロイドとしても、絶句するしかない。

そして実感した。怠惰なのは、クロスベル警察だけではない。

警備隊もまた、市民の安全には尽力してくれないのだ。

道理で遊撃士協会が、もてはやされるはずである。

それでもソーニャは、ロイドたちがまとめた報告書に感嘆してくれた。

「でも、あなたたちに調査を頼んで良かったわ。神狼の言い伝えに、病院屋上の足跡……

やはり本職の捜査官は、目の付け所が違うわね」
「しかし、調査はまだこれからですよ」
「ええ、あなたたちには引き続き、鉱山町の調査もお願いするわ。この調子でいけば、思いも寄らない新事実が見えてくるかもしれない」
そう言われて、ロイドも疑問を感じた。
「それはかまいませんが、そちらの司令からの命令を無視することになりませんか？」
「おかまいなく。あなたたちへの支援要請まで取り下げろとは言われなかったもの」
ロイドは、少しほっとして仲間たちと視線を合わせた。
「そういうことでしたら、俺たちも引き続き、調査を行います。今日は、マインツ鉱山町へ行ってみるつもりですよ」
「お願い。また何か分かったら、知らせてちょうだい」
そう言ってソーニャは、ソファから立ち上がる。
そして、さっきからずっと黙っている特務支援課のボスを一瞥した。
「それじゃ、セルゲイ。例の話は、また後日」
「ああ、了解だ」
二人は、短い言葉を交わすだけ。
ソーニャが特務支援課から去っていくと、セルゲイ・ロウは煙草に火を点けた。
「あいつもあいかわらず、無能な上司に振り回されてるようだな……副司令とは聞こえがいいが、実際には貧乏クジだな、ありゃあ」

セルゲイは、同情するように言って、紫煙を吐く。
ロイドとランディは、その様子に興味を引かれた。
「課長と副司令って、以前からのお知り合いなんですか？」
「俺を、ここに推薦してくれたのも副司令だったし……一体どういう関係なんすか？」
だがセルゲイは、にやりと笑って報告書を手にした。
「ま、昔馴染みってやつだ。それよりほれ、さっさとマインツ鉱山へ行け。無駄話してるヒマはねえぞ」
「は、はい……」
「警備隊もあてにできなくなったんだ。魔獣を捕まえられるのはお前たちだけ……それを忘れるなよ」
「はっ！」
ロイドは、その言葉を肝に銘じて敬礼する。
しかし、なんとなく感じていた。
セルゲイも、ソーニャ副司令も、どこか相通ずるものがある。
それは恐らく、組織のはみ出し者、という意味で。
きっとその行動力が、二人を結びつけたのだろう。
うらやましい、関係に思えた。

マインツ鉱山。
クロスベル市の北に位置する、七耀石の宝庫である。
かつてはその資源を巡って大国が衝突したこともあるが、今では他国でも七耀石の鉱山が発見され、その価値は低まっている。
それでも、ここで採掘された多量の七耀石が、クロスベル市の近代化、導力ネットワーク化にも一役買っているのは、周知の事実だ。
山の麓には、鉱員たちが暮らすマインツ鉱山町がある。
ロイドたちは、その町へ向かうため、定期バスに乗り込んだ。
魔獣が出現したのは、三日前。
もし魔獣が潜んでいるとすれば、最も可能性の高い地域である。
しかしバスを下りた彼らの前に広がっていたのは、緑豊かな山々が連なる、美しいパノラマであった……

「絶景だな……」
ロイドは、遠くに霞む山々を眺めてつぶやいた。
クロスベル生まれの彼も、このような山地まで来たのは初めてだ。
同じクロスベル出身のエリィも、澄んだ空気を胸一杯に吸いこんでいる。

「……ほんとね。クロスベル自治州にも、こんなきれいなところがあったなんて」
「こういう時、自分が都会っ子だったって思うよ」
ロイドは、エリィと顔を見あわせて笑う。
ランディも、斧槍の先で、辺りを指し示した。
「しかし、クロスベル市から離れると、こんなに自然が広がってるんだな。なんつーか、変った自治州だよな」
「ああ。クロスベルは、たしかにちぐはぐかもしれないな」
ロイドの言葉に、エリィも大きくうなずいた。
「そうね、私も留学とかであちこちの国を回ったけど……どこも伝統と自然を大事にしてい国ばかりだったわ。クロスベルは、急進的すぎるかも」
するとティオが、自らの魔導杖を見上げて言った。
「でも、私はクロスベルが決して嫌いではありません。このような自然にも、導力を採りたところにも、惹き付けられています」
「よく考えれば、俺たち自身もそういうチームだよ」
ロイドは、仲間たちを見渡して言った。
「生まれた国も、所属していた場所も不揃いだけど、このクロスベルのために働いているそれも面白いと思うな」
「ええ、ほんとに」

「言えてるな」
「同感です……」
四人は笑い合って、鉱山町に向かって山道を上り始めた。
だが数歩と歩かぬうちに、ティオがぴくんっ！　と耳をそばだてる。
その反応に、ロイドたちも見覚えがあった。
「ティオ、どうした？」
「もしかして……また、何か聞こえたの？」
「例の、声か？」
「はい、センサーの感度を上げて、スピーカーから増幅します！」
ティオの髪飾りが、また赤光を放った。
五秒……十秒……しばし沈黙が続く。
しかし唐突に、髪飾りに仕込まれたスピーカーから、かすかな音が聞こえた。

……ウオオォォォォォォ……シンンン…………

それは長く余韻を引きずる、何かの遠吠えであった。
ロイドたちもそれを聞き取り、確信を得た。
「たしかに、狼の遠吠えに似ているな」

「ええ、間違いないわ」
「しかしいったいどこで吼えてるんだ？」
ランディは、斧槍を構えて周囲を警戒する。
するとティオが、魔導杖で道の前方を指し示した。
「北北西に二〇セルジュくらいでしょうか。まだずいぶん遠いようです」
「ちょっと待ってくれ……ということは、山道の途中か」
ロイドは、地図を広げて確認する。
だがティオは、まだ声の聞こえてきた方角を見据えていた。
「けれど今の遠吠え……何かを語りかけてくるような感じがしました……」
「語りかけてくる？」
「どういう意味なの、ティオちゃん？」
「威嚇してる……って感じか？」
ロイドたちが矢継ぎ早に問うと、ティオもわずかに首を傾げた。
「いえ……もっとはっきりとした……意思のようなものを感じて……すみません、上手く言葉にできないんですが……」
ティオは、探るように目を凝らしている。
ロイドは、勇気づけるようにティオの背中を押した。
「とにかく声のする方へ行ってみよう。近づけば、ティオが感じたものも、もっと明確になる

かもしれない」

「そ、そうですね……」

ロイドたちは、ひたすらに山道を登っていった。

先頭にはティオが立ち、遠吠えの聞こえた方角を探っている。

やがて山道は分岐点にさしかかり、ティオは一方を杖で示した。

「……こっちです、間違いありません」

「ふむ……」

ロイドも、道の先を見据えた。

ティオが示した先は、トンネルになっている。

どうやら七耀石の運搬のために掘られた搬出路らしい。

するとトンネルの奥から、また遠吠えが聞こえてきた。

……ウオオオオォォォ……ンンンン………

今度はロイドたちにも聞こえるほど、近い。

トンネル内に反響しているが、その存在を感じられるほどの声量だった。

しかしその遠吠えが……

……ウォオオオォォ……ンンンン………

……ウォオオオオオオ……ンンンン………

徐々に近づきつつある。

すでにエリィは、導力銃をホルスターから抜いている。

ランディも、ぶんぶんと斧槍を振り回した。

「準備はいいわよ、ロイド」

「やれやれ、山道を歩かされたあげくに魔獣とご対面か。だがここで片づければ、この事

解決だな」

ロイドもうなずいて、衝撃警棒を握り直した。

「魔獣は複数いる可能性もある。油断せずに行こう」

しかしティオは、まだ怪訝な顔をしていた。

「……そうですね。たしかに病院で見つけた足跡は複数……」

四人は、隊列を組み替え、戦闘態勢に入った。

だがその彼らの前に、闇の中から現れたのは……

「！」

狼、と呼ぶにはあまりに神秘的な魔獣だった。

白と青灰色の毛に覆われたそれは、ゆっくりこちらに歩み寄ってくる。
四人を見つめる眼光も、まるで彼らを吟味するかのよう。
ロイドは、アルモリカ村の村長の言葉を思い出した。
「こいつが言い伝えの……」
「ええ、たぶん、神狼よ」
エリィも、その迫力に気圧されて数歩下がった。
逆にランディは、挑むように間合いを詰めていく。
「向こうから現れるとは好都合だな。よしっ、先手を打って……」
だが彼が一撃をくらわそうとした寸前。
ティオが手を掲げて、仲間たちを制した。
「……待ってください。その子から、敵意は感じません」
「えっ？」
「たしかなの、ティオちゃん？」
「相手は魔獣だぜ、油断するなよ？」
だがロイドたちが訝しんでも、ティオは確信したように首を横に振った。
「……大丈夫です。ここは私に任せてください」
「あ、おい、ティオ！」
ロイドが止める声も聞かず、ティオは魔獣に近づいていく。

だが魔獣も襲いかかりはせず、ティオに向かって鼻先をつきつけた。
やがてティオは、魔獣のすぐ傍に立ち、その背を撫でる。
それでも魔獣は微動だにせず、ただうっとりと、瞼を閉じるだけであった。
「……ふふ、やっと会えたね」
ティオが親しげにささやくと、魔獣は喉を鳴らす。
するとティオは、その唸り声に耳を近づけた。
「私たちに会いに来てくれたみたいだけど、何か伝えたいことでもあるの？」
再び、魔獣が呻く。
ティオは、納得したように顔を上げた。
「……そう……やっぱり」
「な、なにがやっぱりなんだよ、ティオ！」
「まさか、ティオちゃん、あなた……」
「そいつの言葉が、分かるのか？」
ロイドたちは、焦り、困惑しながらティオと神狼の交信を見守っている。
しかしティオは、穏やかな声で告げた。
「いえ、言葉ではなく……意思が分かる程度です」
「ほ、ほんとか？」
「何て言ってるの、その魔獣？」

「騙されてるんじゃないだろうな？」
その時、魔獣が、短く吼えた。
同時にティオも、何かを悟って顔色を変えた。
「えっ、それはどういう意味……」
しかし魔獣は、急にティオから離れて、トンネルへ駆け戻った。
そしてそのまま闇の奥へと消えていく。
ロイドは、しばし放心した後、ティオに歩み寄った。
「ティオ……あいつは、何を思ってたんだ？」
「それが……最後の瞬間だけ、明確な言葉が伝わってきたんです」
「明確な言葉？」
はい、と言ってティオは、仲間たちに向き直った。
「『最後の欠片はこの先に……後は、お前たち次第だ』……だそうです」
「最後の欠片？」
ロイドも、助けを求めるように視線を動かす。
だがエリィもランディも、心当たりがないようで、肩をすくめている。
ティオは、受け止めた言葉を反芻するように目を伏せた。
「たしかに、そう聞こえたんです。しかしいったいどういう意味でしょうか？」
問われて、ロイドも熟考した。

「そう言えば村長さんは、神狼は人間に助言を与える……って言ってたな」
「ええ、たしかに……まさかっ！」
エリィもようやく悟る。
しかしすでにロイドは、それが真実だと思い至っていた。
「今の魔獣が本当に神狼なら……ティオが受け取ったのは、その助言だよ。そして今、俺たちが欲しい助言と言えば……」
「魔獣事件の手がかり……ってことかよ？」
ランディは、まだ信じられぬ様子で首を振っている。
それでも不思議なことに、ロイドはその説を信じる気になっていたのだ。
「たぶん、あの神狼は、真実を知っている。最後の欠片とは、俺たちが知らない事件の真相なんじゃないかな」
「ちょっと待って、ロイド。それっておかしな話よ」
エリィは、窘めるように言いさした。
「だって事件を起こしたのは、あの魔獣なんでしょ？　だったら真相もなにも……」
「そうだぜ。なにせ神の狼って言うぐらいだ」
ランディも、否定の色を露わにした。
「俺たち人間を騙すぐらい楽勝だろう。自分が引き起こした事件を、さも別の真相があるように見せかけたんじゃないか？」

しかしロイドも、すでに論理的な推理を組み立てつつあったのだ。
「いや……今の魔獣は、各地に出没した狼型魔獣とは別物だと思う」
「えっ……？」
「ど、どうしてだよ？　何を根拠に……」
問い詰めるランディに、ロイドは冷静な声で応じた。
「アルモリカ村で、遠吠えを聞いた者はいない。それに、病院で襲われたリットンさんが見たのは、真っ黒な狼だったと聞いている」
「あ……そうか」
「それにリットンさんは、三匹の魔獣を見たと言っていた。俺たちが発見した足跡も複数だ。今の魔獣とは、イコールにならないんだよ」
ティオも、こくんとうなずいている。
どうやら彼女も、白い毛並みの魔獣を信じているようだ。
しかしロイドは、慎重に推理を続けた。
「けど、だからといって、今の魔獣が犯人じゃないとは言い切れない。他にも仲間の黒い狼がいるかもしれないしね」
「そうよ。狼は、群れで暮らすって言うじゃない」
エリィの意見も、ロイドは頭の中で吟味した。
「ああ、たしかに。あるいは別の群れという可能性もある。つまり今の魔獣とは別の、黒い魔

獣が存在している……って可能性もな」

　そこへ珍しくティオが、強い口調で割り込んできた。

「私もロイドさんの意見に賛成です。さっきの子に、悪意は感じられませんでした。それでさっきのメッセージですが……」

「ああ、やはり助言だと思う」

　ロイドは、道の先を指し示した。

「『最後の欠片はこの先に』……つまり答えは鉱山町にあるってことだろう」

　しかしランディは、まだ頭をひねっていた。

「けどよ、『後はお前たち次第だ』だろ？　なんか妙に偉そうな物言いだよな」

「たしかにね。その辺りが、神と呼ばれる所以かもしれない。人間よりずっと女神に近い存在なのかもなあ」

　ロイドが冗談めかすと、ティオが真面目に首を縦に振った。

「実際、そうだと思います。今もなんて言うか、その……たぶん、私たち、舐められていたんじゃないかと」

「や、やっぱりそうか……」

「まあ、神狼って言うくらいだものねえ」

「やれやれ。人間風情の迷いや悩みはお見通しかよ」

　ロイドたちは、まいったとでも言うように肩を落とし、首を掻く。

だが見下されても仕方ないほど、威厳に満ちた魔獣であった……

　マインツ鉱山町は、赤茶けた山肌にへばりついていた。

あちこちに採掘用のトンネルが口を開け、その周囲には金属の足場が組まれている。

無数の換気口から、坑内の澱んだ空気が吐き出され、風景は霞むほど。

ロイドたちは、その埃っぽい通りを、町長の家に向かって歩き出していた。

しかし目当ての家にたどり着くと中から……

「では町長、よろしくご検討ください」

「また明日、あらためて伺います」

町長の家から現れたのは、黒いスーツにサングラスをかけた男たちだった。

何も知らない者が見れば、何かのセールスマン……と思ったかもしれない。

だがロイドたちは、彼らの姿を認めると、すぐ物陰に隠れた。

「あいつら……！」

黒ずくめの男たちは、通りを横切り、一台の導力車へ向かう。

やはり黒塗りの、帝国ラインフォルト社製の大型バンである。

後部には、真四角な運搬台があるが、中身は見えない。

しかしロイドは、その車のナンバーと、手元の捜査手帳のメモを見比べた。

「間違いない……あいつら、ルバーチェ商会の連中だ」

ルバーチェ商会。

それは、クロスベル市民なら知らぬ者はいない豪商である。

五代目会長マルコーニを筆頭として、手広い商業活動で儲けている。

市議会の有力派閥……いわゆる帝国派議員とのパイプも太く、クロスベル政財界にも強い影響力を持った企業グループである。

しかし、それはあくまで表向きの姿。

実際には、武器の不法取引などで財を成した犯罪組織なのだ。

クロスベル警察は勿論、ロイドたちも何度も、彼らの犯罪を検挙していた。

しかし彼らの跳梁は止まず、むしろ力を増す一方の組織である。

・

ロイドは、今までの苦渋を思い出して、衝撃警棒を握った。

「しかしあいつら、どうしてこんな所で……」

「待って、何か話してるわ」

エリィがさえぎると、ランディも眉をひそめた。

「ここからじゃ話してる内容は聞こえないな……ティオすけ？」

「……お任せください」

ティオの髪飾りが、赤く瞬く。

やがて彼女の唇が、黒ずくめの男たちの会話を再現した。

「……あとひと押しだな……ああ、これでボーナスが手に入りそうだ……」

「ボーナス？」

ロイドが首を傾げるうち、男たちは車に乗って町から去っていく。

それを見送ると、ロイドは物陰から通りへと戻った。

「いったい何の話だ？　奴らが鉱山町に来るなんて珍しいな」

「ええ、彼らの縄張りはクロスベル市内だものね」

エリィも、迷惑そうに走り去る車を見つめる。

「それとも七耀石の採掘に関して、なにか儲け話でも考えついたのかしら？」

「かもしれないな。奴らは、金の匂いには敏感だから……とにかく……」

ロイドは再び、町長の家に視線を向けた。

「話を聞いてみよう。妙なことになってなきゃいいが……」

だがロイドたちが訪問するや、家主は迷惑そうな声を上げた。

「また来たのかね！」

「えっ？」

「すぐには決められないと言っただろう？　今日のところはお引取り……」

と、そこまで言って。
温厚そうな老人と、その妻らしき女性はロイドたちに気づく。
あわてて二人は、笑顔を取り繕ってみせた。
「お、おっと、これは失礼……」
「あなた、先ほどの方たちじゃありませんよ」
ロイドも、努めて笑顔で挨拶をした。
「失礼します。クロスベル警察、特務支援課、ロイド・バニングス捜査官と申します。マインツ鉱山町の町長さんでいらっしゃいますか？」
いかにも、と言って老人は微笑んだ。
「私は町長のピクセン。こちらは妻のアンナです。しかし……」
「クロスベル警察がいったいどんな御用で……」
町長夫妻は、ロイドたちの訪問に面食らっている。
無理もない。これまでの警察なら、クロスベル市内の事件のみを追い、このような周辺地域まで出てくることは滅多になかったのだから。
だがそんな事情を説明するより、ロイドは外を指さした。
「こちらで起きた魔獣被害の調査に伺ったのです。聞かせていただけませんか、たった今来た、黒ずくめの連中の話も含めて……」

ロイドたちは、ピクセン町長宅の居間に通された。
町長夫人が淹れてくれたコーヒーが届き、しばし雑談が続く。
やがて町長の口から、事件の詳細が語られ始めた……
「これまでに三度、魔獣に襲われた者がおる。いずれも深夜……軽傷だったのが幸いじゃが、町のみなも怯えておるのじゃよ」
ピクセンは、机に広げた町の地図に三カ所、×を付けた。
それが魔獣に襲われた場所だと言う。
ロイドたちは、ソファに座ったまま、その地図を覗き込んだ。
「いったい、どんな魔獣かは分かっているんですか？」
「いやそれが……襲われた者はみな動転していてな。犬のような、狼のような魔獣としか記憶していないんじゃ」
ティオも、ぐいと町長に顔を近づけた。
「その狼の毛並み、白でしたか？　黒でしたか？」
「さあ……なにしろ夜じゃからな。はっきりと覚えている者は誰も……」
「そうですか……」
ティオは、やや意気消沈している。
どうやら彼女は、白い魔獣の嫌疑を晴らそうとしているらしい。

しかしロイドとしては、まだそこまで白い魔獣に肩入れするわけにはいかなかった。
先入観を捨て、まずは事実を拾い集めなければならない。
「しかし姿を見せないとは、なかなか賢い魔獣のようですね？」
「そうなんじゃ！　奴ら、警備隊がパトロールに来ている間は、まったく現れなかったんじゃよ」
「ですが警備隊は、今朝をもってパトロールも止めたと……」
「困ったものじゃよ。事件は何も解決しておらんのに、我々を見捨てるとは……！」
ビクセンは、呆れたように嘆いている。
そこでランディが、ある事実に気づいた。
「だったら遊撃士協会を頼ればいいじゃないですか？　あちらさんなら、うちや警備隊よりずっと親切ですぜ？」
「おいおい、ランディ……」
「いいじゃねえか、本当のことなんだから」
制すロイドに、ランディは悪戯っぽく笑って言う。
町長も、その物言いが気に入ったようで、微笑みを取り戻した。
「いや、まったく……実は、警備隊が来る前に遊撃士協会にも打診してみたんじゃ。しかし、彼らも忙しいようでね。警備を始めるには時間がかかると……」
それを聞くとエリィも、わずかに顔をほころばせた。

「さすが遊撃士協会ね。依頼が殺到しているみたい」
「ああ。頭数は、向こうの方が少ないからなあ」
ロイドも、同情するようにつぶやく。
しかし警備隊と遊撃士に断られては、不安になるのも当然だろう。
ビクセン町長も再び、顔に緊張をみなぎらせた。
「そこにさっきの連中が訪ねてきたんじゃよ」
「ルバーチェ商会の者ですね？」
「なんじゃ、知っておったのかね？」
「ええ、まあ。知り合うつもりはなくても、仕事柄、仕方なく」
ロイドの言葉に、町長も顔をしかめてみせた。
「わしも、彼らの噂は知っておる。あまり好ましい連中ではないと」
「正直に申し上げると、彼らは犯罪組織ですからね」
「しかし彼らは、撤収した警備隊に代わって町の警護をしてくれると言うんじゃ。魔獣が出なくなるまで、ずっと……」
一見、親切な申し出にも聞こえる。
しかしロイドは、すぐにその真意を悟っていた。
「勿論、タダではありませんね？」
「ああ。見返りとして、七耀石の取引を独占させて欲しいそうだ」

「なんですって？」
ロイドが呟くと、すぐにエリィが割って入った。
「待ってください。確か鉱山の採掘権は、自治州政府が持っているはずですよね？　それをどうして……」
「いや、それは少し違うんじゃよ、お嬢さん。たしかに自治州政府は、毎年の採掘量を決定したり、採掘量を抑制する権限を持っておる。国際相場を睨んでの調整も、政府が決める。しかしじゃな……」
ビクセン町長は、コーヒーを一口すすって続けた。
「……採掘した七耀石を、どこの国に売るかは、この町の裁量に任されておるんじゃよ。奴らが欲しがっているのは、その権利じゃ」
「なるほど……」
エリィが納得すると、横からアンナ夫人がため息を漏らした。
「そうは言っても、今までお世話になった商人さんたちも大勢いらっしゃいますし……どうたものかと困っていたところなんですよ」
「やれやれ、面倒な時に、面倒な連中が来たもんだな」
ランディは、慰めるように笑ってみせる。
だがロイドは、その言葉に何かを感じていた。
「なるほど……面倒な時に、面倒な連中か……」

「……町長、できればこの件、自分たちに任せてもらえませんか？」
「任せると言うと、仲介役でも買ってでてくれるのかね？」
「いいえ。ひょっとしたら、魔獣の件も含めて、解決できるかもと思って」
そう告げると、仲間たちは一斉にロイドの顔を見た。
「どういうことなの、ロイド？」
「何か糸口がつかめたのか？」
「魔獣の件も含めて……というのが気になります」
彼らもまだ、ロイドの真意がつかめていない。
しかしビクセン町長は、ロイドの目に灯った強い意志に気づいていた。
「そこまで言うなら、お任せしよう。しかし具体的にはどうするつもりだね？」
「まだ推測の域を出ませんが、恐らくこの事件は……」
それからロイドが語ったことに、仲間たちと町長はじっと耳を傾けた。
やがて日が暮れ、マインツ鉱山町にも夜の帳が下りると……

月が、鉱山町を照らし始めた。
鉱山の作業灯は消え、代わりに家々に明かりが灯る。
飲食店街には、仕事を終えた鉱員たちがあふれ、歓声が夜更けまで続いていた。

そんな一軒の酒場から、よろよろと二人連れの鉱員が歩み出てきた。
「マルロ！　もう一軒、行くぞー　うぃ〜」
「もう帰ろうぜ、ガンツ〜、みんな夜は気をつけろって言ってただろ？」
「なーに、言ってやがる！」
ガンツと呼ばれた男は、転がっていた石を勢いよく蹴り飛ばした。
「例の魔獣の話だろ？　気にすんなって！　こちとらクロスベルに行くのを我慢してんだぜ？
せめて酒くらい好きなように呑ませろってんだ！　うぃ〜」
「いい加減、クロスベルに遊びに行くのはやめとけよ〜」
相棒のマルロは、ガンツの腕をぐいぐい引っ張った。
「どうせ街に行ったって、カジノで全部スッてくるじゃねえか。無駄、無駄ぁ〜」
「う、うるせえ！　次は大当たりを出して、今までの分を取り戻してやるからな！」
そう言ってガンツは、今度は空き缶を蹴り飛ばす。
するとその缶が、ぽーん、ぽーんと地面をはねて。
やがて路地裏の暗がりに吸い込まれていく。
しかしその暗闇に……ぎらりと赤光が閃いたのだ。
「なんだ？」
「ああん？」
ガンツとマルロは、眠たそうな目で暗がりを覗き込む。

と、急に二人の目の前に、黒い影がにゅう、とやってきた。
いずれも漆黒の、狼を思わせる獣。
鮮血のように赤い眼球を光らせ、鋭利な牙から涎をしたたらせている。
まるで煉獄から現れたかのような狼に、ガンツとマルロは悲鳴を上げた。
「ま……ま……魔獣だっー！」
二人は、逃げだそうとするが、魔犬の眼光に射すくめられ、硬直している。
その間に魔犬は、低く唸りながら、じりじりと包囲を狭めていった。
「く、来るなあっー！」
「だ、誰か助けて……ああっ、女神様！」
すでに魔犬は、二人の目前。
しかし遂に飛びかかるかと思われた瞬間、酒場の屋根から声がした。
「あんたら、手で口と鼻を塞ぎな！」
「えっ！」
ガンツとマルロが見上げた先には、赤い髪の男が立っている。
ランディ・オルランドは、手にした爆弾を魔犬の前に投げ落とした。
瞬間、爆発と共に黄色い煙が辺りに拡散する。
「なんだっ！」
「いいからガンツ、早く手で……！」

二人は、あわてて口と鼻を手のひらで覆う。
魔犬たちはその黄色い煙に包まれた途端、甲高い悲鳴を上げた。
ガンツたちも呼吸は塞いだものの、目には強い痛みが突き刺さっていた。
「な、なんだこりゃ……！」
「もしかして……胡椒と辛子？」
その様子を屋根の上から見下ろしながら、ランディは斧槍を構えた。
「大当たり。制圧用のマスタード手榴弾だ。時間を稼ぐにはもってこいだぜ？」
そこへ物陰から、疾風の如くロイドが駆けてくる。
ロイドは、二人の鉱員の腕を引っ張り、かばうように前に出た。
「今のうちに早く！　安全な場所まで逃げてください！」
「あ、あんたたちはいったい……」
「いいから早く！」
ロイドに背中を押されて、ガンツとマルロは駆け去っていく。
さらにエリィとティオも姿を現し、攻撃を開始した。
「逃がさないっ！」
エリィの導力銃プリムローズが火を噴き、銃弾が魔犬たちを撃ち抜く。
ティオも魔導杖リリカルケインを大きく横に薙いだ。
「行きます、ビームザンバー！」

[illegible]、魔犬たちをしたたかに叩き、吹き飛ばす。
ランディも屋根から飛び降り、斧槍グラムチョッパーを構えた。
「行くぜ、これでとどめ……」
だが魔犬たちは、踵を返して逃走を始めた。
ロイドたちも、あわてて後を追いかける。
「追おう！　町の外へ出る気だ！　たぶんその先に……」
ロイドは、推理を口にしつつ、夜道を走った。
やがて魔犬たちは、町外れに達し、小さな木立の中に駆け入っていく。
するとその陰には、昼間見た黒塗りの導力車が停車しているではないか。
無論、傍に立っているのも、ルバーチェ商会の男たちである。
「ど、どうした……！」
「おい、なんでこんな早く戻ってくるんだ？」
黒ずくめの男たちは、魔犬を見て動揺している。
だが魔犬が彼らの足もとに逃げ戻ったのを確かめ、ロイドは声を上げた。
「動くな！　クロスベル警察、特務支援課だ！」
「なんだと！」
「クロスベル警察がどうしてここに……」
戸惑う黒ずくめたちに、エリィが銃口を突きつけた。

「器物損壊、および傷害の容疑で、あなた方を拘束させてもらいます」
「それに『犬』の放し飼いも良くないな」
ランディは言って、ちらっとロイドに視線をやった。
「おい、お前の推理、当たってたな。あの犬どもは魔獣じゃない」
「ああ、高度に訓練された軍用犬……ってとこだろう」
ロイドも、看破して言いきった。
「しかもあの男たちに操られている。今回の事件のからくり、読めたな」
「……観念してください。あなた方の目論見は、もうお見通しです」
ティオも、魔導杖を掲げるように構えた。
ティオは幼いながらも、容赦のない視線を突き刺す。
だが黒ずくめの男たちに、降伏する気配はなかった。
「くそっ……ガキどもが出しゃばりやがって……」
「落ち着け！　ここであいつらを片づければ、俺たちの株も上がる！　行け！」
黒ずくめの男が、何かを口にくわえて吹き鳴らした。
それは小さな犬笛。
ピーッという甲高い音を発するや、魔犬……いや軍用犬たちが再び飛びかかってきた。
だがロイドとランディは、前衛に立って、互いの武器を振り抜いた。
「気をつけろ、ランディ！」

「言われるまでもねえよ！　おおらっ！」
ランディの斧槍が、軍用犬を正面から殴り飛ばし、大木に叩きつける。
ロイドは、左右の衝撃警棒ハードブレイカーで、二頭の軍用犬を麻痺させた。
そこへエリィとティオが、間髪入れず、とどめを撃ち込んだ。
瞬く間に三頭を倒し、ロイドたちは間合いを詰めた。
「これ以上の抵抗は無駄だ、武器を捨てろ」
「ぐっ……こいつら……」
「抵抗すれば公務執行妨害もつくぞ、それでもいいのか？」
しかし黒ずくめの男は、手元の遠隔スイッチを押し込んだ。
同時に導力車の荷台が開き、中の様子が明らかとなる。
四角い荷台の中は、鉄格子によって仕切られた檻になっていた。
その中から、十数頭の軍用犬が我先に飛び出してきたのだ。
「なっ……！」
予想外の数に、ロイドたちも思わず絶句する。
だが軍用犬たちは、その間隙を衝くように、ロイドたちを包囲した。
しかも先ほどの三頭より、みな大きく、屈強な体格をしている。
黒ずくめの男たちも、胸元から導力銃を引き抜いた。
「さあ、今度はこっちの番だぜ。これ以上の抵抗は無駄だ、武器を捨てな」

「殺しはしねえよ。ただ俺たちを見逃してくれればいいのさ」

「く、くそっ……」

それでもロイドは、警棒を握ったままだった。

ルバーチェ商会を見逃す。黙認する。

それだけは、警察として、いやクロスベル市民として許せぬ行動だったからだ。

黙認こそ、クロスベル市に蔓延した悪癖である。

クロスベルにおけるルバーチェ商会の影響力は、非常に大きい。

公権力も、市民も、ルバーチェ商会の利益を享受する者が多く、彼らの行動に目をつぶってしまっているのだ。

警察にすら、彼らに与する捜査官がいると言う。だがロイドは……

「特務支援課は、お前たちには与しない」

「なにっ……！」

「威されて屈する奴なんて、特務支援課にはいないんだ！」

するとランディも、こんな状況だというのに軽く微笑した。

「やれやれ、あいかわらず熱い奴だぜ。まあ、言ってることに間違いはねえが」

「ええ、ロイドの言う通りよ」

エリィも、導力銃を構えたまま言った。

「私たちは、クロスベル警察の信頼を取り戻さなきゃいけない。私たちにそれができるか分か

らないけど、妥協はしないわ」

ティオも、周囲の軍用犬との間合いを測りつつうなずく。

「……戦うなら始めましょう。あなたたちとの交渉はありえません」

ロイドは、仲間たちの言葉を受けて、一歩間合いを詰めた。

「そういうことだ。俺たちは、他とは違う。甘く見るな」

「言いやがる……だが威勢がいいのもそこまでだ」

「俺たちに刃向かったことを後悔させてやる……行けっ！」

黒ずくめが、再び犬笛を吹こうとした、その寸前。

どこからか、聞こえてきたのだ。

闇を震わせ、大地に轟く咆吼が。

ウオオオオォォォォォ…………ンンンンン！

軍用犬の叫びにも似ていた。

それがいくつも重なって、あたりに反響し始めた。

ウオオオオォォォォォ…………ンンンンン！

ウオオオオォォォォォ…………ンンンンン！

咆吼は、峻烈で、神々しさすら感じる。

そしてルバーチェ商会の男たちも気がついた。

いつの間にか周囲の断崖に、十数頭の巨犬が立っていることに。

いや、犬ではない。全身を白と青の毛で覆われた狼。

しかもその中心にいるのは、ひときわ大きな個体であった。

群れを束ねる長らしきそれは、裁きを下す者のように黒ずくめたちを見据え、眼光を瞬かせている。

その姿に、ティオが思わず声を上げた。

「あなたは昼間の……！」

ロイドたちも、確信した。

間違いなく、ロイドたちにメッセージを授けてくれた狼だ。

その狼は、ロイドたちにも、ふんっと鼻を鳴らしてみせた。

まるで『こんな奴らに手こずるとは、お前たちも頼りにならん』とでも言うように。

そして彼らの声を聞いた途端、軍用犬が一頭残らず、ひれ伏すように萎縮したのだ。

「どうしたんだ、おい！」

「お、お前ら……なに怯えてやがる！」

黒ずくめの男たちは、軍用犬を必死に叱咤した。

しかし獰猛かつ命令に忠実な軍用犬たちも、文字通り尻尾を巻いて震えるだけだ。

ロイドは、断崖に立つ白い狼たちを指し示した。

「あいつらも迷惑してるんだよ、お前たちの陰謀に」

「そうね、私たちも危うく彼らが犯人だと勘違いするところだったわ」

エリィは導力銃を、そしてランディは斧槍を黒ずくめたちに突きつけた。

「さて、もう一度言うぜ。器物損壊と傷害容疑、および公務執行妨害であんたたちを逮捕

文句は本部で聞いてやるよ」

「ぐ……ぬうっ……」

黒ずくめの男たちも、遂に導力銃を地に落とす。

ティオは、ほっと杖から力を抜いて、断崖を見上げた。

「ありがとう……あなたのおかげです」

その言葉を、白い狼はじっと見下ろしたまま聞いている。

神狼の名にふさわしい、偉容であった。

＊＊＊＊

「……正直、驚かされたわ」

クロスベル市の東に位置するタングラム門。

カルバード共和国との往来を管理する要所で、ソーニャ副司令はつぶや
「まさか、あなたたちだけで解決するとはね。もっとも戦闘に陥る前に、私たちにも声をかけて欲しかったけど……」
応接室のソファには、ロイドたちが座っていた。
マインツ鉱山町で捕らえたルバーチェ商会の男たちは、すでにソーニャ率いる警備隊に引き渡している。
夜通しの移動で疲れてはいたものの、ロイドは背筋を伸ばして一礼した。
「すみません。警備隊の司令殿から、ルバーチェ商会に情報が漏れては困りますので」
「たしかにね……それはこちらとしても返す言葉がないわ」
「それに警備隊を待っている間に、ルバーチェ商会が軍用犬をけしかけ、鉱山町に脅しをかけることも明白でしたので……」
ロイドが言うと、ソーニャは面白そうに微笑を浮かべた。
「それにしても、よく事件のからくりを見抜いたわね？　いったいどうやって答えを見つけた
のか、教えてくれるかしら？」
問われて、ロイドは咳払いをひとつした。
「最初に違和感を覚えたのは、聖ウルスラ医科大学での聞き込みでした。魔獣なら、食い殺
ために人を襲います。しかしリットンさんは、そのまま放置されていた……」
「なるほど」

「だから思ったんです。この事件を引き起こしたのは魔獣ではなく、何か別の目的を持った
の生き物じゃないかって」
ロイドは、出されたコーヒーを一口含んだ。
「それに事件が起きる直前、甲高い音が聞こえたとの情報も得ました」
「ああ、報告書にあった……《風の剣聖》の娘さんね？」
「そうです。シズクちゃんは、目が不自由ですが、その代わりに聴覚が人よりも優れてい
その彼女が聞いたのは、もしや犬笛ではないかと……」
眠気を堪えて、ロイドは続けた。
「もしや誰かが、狼のような生物を操って事件を起こしているのではないか……そう思っ
先、マインツ鉱山町でルバーチェ商会と遭遇したんです」
「そして、推理を組み立てるパーツが揃ったわけね」
「はい。警備隊が不自然な形で引き揚げた直後、ルバーチェ商会が現れた。警備隊司令も
ーチェも、帝国派議員と昵懇です。つまり……」
「うちの司令をも巻き込んだ組織的犯罪……」
ソーニャは言って、疲れたようにこめかみを揉んだ。
「まったく……身内ながら呆れるわね。それで？　私たち警備隊を遠ざけておいて、ルバ
ェ商会は何をするつもりだったの？」
「軍用犬の実践テストだと言っています。ルバーチェは、武器の密輸入で私腹を肥やして

すから、新製品として売り出すつもりだったようですね」

「七耀石の利権うんぬんは？」

「テストをするうち、思いついたようですよ。軍用犬で脅せば用心棒代も稼げると……」

ロイドは、推理を吐き出して深く息を吐いた。

「とにかく、支援を要請されたのはそちらです。ルバーチェの連中の取り調べ、よろしくお願いします」

「分かったわ。本当にご苦労様……けれどあなたたち、その神狼とやらに助けてもらわなかったら、どうするつもりだったの？」

「それは……」

口ごもって、ロイドは仲間たちと視線を合わせる。

結果的には事件を解決できたから良かったようなものの、一歩間違えば、危うく軍用犬に包囲されて噛み殺されるところだったのだ。

それを見抜いて、ソーニャも眼鏡の奥を光らせた。

「事件のからくりを見抜いたことは、称賛に値します。しかし自分たちだけで解決できると錯覚したのは、思い上がりというものよ」

「……仰るとおりです」

「……返す言葉もありません」

「……だけど結果オーライって話も！」

「……ランディさん……」

ロイドたちは、射すくめられたように縮こまった。

だがソーニャも、すぐに表情を緩めてロイドたちを見渡した。

「ま、お小言はここまでよ。私たちの代わりに、事件を解決してくれて感謝します」

「あ、ありがとうございます」

「ただし、神狼については経過を見守りたいわ」

副司令は、テーブルの上の地図を指し示した。

「それほど強力な魔獣……いいえ神獣が、今なおこの地に群れを成しているなんて、警備隊としては見過ごせない事実だし」

「……あの子なら、大丈夫です」

そう告げたのは、ティオである。

彼女は、強い意志を瞳に込めて、副司令に断言した。

「決して人間を襲うような生き物ではありません。恐らく導力化の進む市街地を嫌って、山の奥へ奥へと移り住んでいくのでしょう」

「神狼にとって、クロスベルは住みにくい土地になったと？」

「恐らく……あるいは人間に愛想を尽かしたのかもしれません」

それを聞いて、副司令もため息を漏らす。

「かもしれないわね。まさか魔獣に見せかけて、軍用犬の実践テストをするなんて……ルバー

チェ商会も、いくら議員たちの後ろ盾があるからといって、まったく……」
ソーニャの言葉に、ロイドは俄然、身を乗り出した。
「しかし今度の事件をきっかけに、ルバーチェ商会の非合法な武器取引を根絶できるかもしれません。逮捕した者たちを追及すれば……」
と、言いかけると……ソーニャが黙って、首を横に振った。
同時にエリィも、沈鬱な表情を見せる。
その雰囲気を察して、ロイドは二人を見比べた。
「え……まさか……今度も保釈ですか？」
「……ええ、恐らくね」
「……私も、そう思うわ」
ロイドは、脱力してソファに沈み込んだ。
今まで何度も、武器密売のかどでルバーチェ商会を摘発してきた。
だがその都度、帝国派議員から圧力がかかって、すぐに保釈されてしまったのだ。
しかも適当な名目をつけられて、密輸品まで返還したこともある。
ランディとティオも、それを思い出して肩を落とした。
「やれやれ、またそんなオチか……」
「今度こそ、と思っていたのですが……」
ロイドも、思わず言葉を失っていた。

いくらあがいても、目の前にそびえる高い壁に阻まれるようだ。
だがソーニャは、努めて明るく言い放った。
「でも、腐ってばかりもいられないわ。そうでしょ？」
「はい……俺たちは諦めません」
ロイドは、おもむろにソファから立ち上がった。
「もし絶望したら、俺たち特務支援課が創設された意味がない……そう思ってます」
「その信念、維持するのは辛いかもね」
「ええ、俺一人だったら無理だと思います……でも俺には……」
言うと、仲間たちも身を起こした。
「大丈夫よ、私もついていく」
「それより特務支援課に帰ろうぜ。きっとまた別の事件が待ってる」
「……そうですね。高い壁は、クロスベルにそびえたままですから」
ロイドもうなずいて、窓から射す光に手をかざす。
彼らの前途を照らすような、眩しい朝陽であった。
「ふわあああぁ～～」
ロイドは、両腕を伸ばして大あくびをした。
クロスベル中央広場に戻ってきたのは、もう昼前である。

買い物客や、通勤人が行き交う道を、特務支援課の四人は寝ぼけ眼で歩いていた。
「さすがに眠いわね……」
「結局、徹夜に近いもんなぁ……」
エリィとランディも、ふらふらしながら通りを横切っている。
そのエリィの肩には、ティオが力無くもたれていた。
「……私も……もう限界です……ぐぅ……」
「がんばって、ティオちゃん。特務支援課まであと少しよ」
励ますエリィを、ロイドは眠そうな顔で見つめた。
「と、とにかく帰ったら、みんなひと眠りしよう。課長への報告はそれからだ」
だがロイドたちが、特務支援課へ通じる階段を下りていくと……
「よお、お疲れさん」
セルゲイ・ロウが、特務支援課の前で煙草をふかしていた。
いつもは執務室に籠もりきりの上司である。
それが眩しい陽光を浴びる姿に、ロイドたちは妙な雰囲気を感じていた。
「課長、どうしたんですか？」
「こんな昼間っから、お珍しいですね」
「まさか俺たちを出迎えてくれたとか？」
「……ただ今、戻りました……ぐぅ……」

するとセルゲイは、嫌悪を露わにして煙草を噛んだ。
「出迎えなんてするか、気色悪い。事件の顛末は、ソーニャからの通信で聞いたがな」
「あ……一応、支援要請は解決ということで」
「それはいいが、あんなもんが来るなんて聞いてねえぞ」
「あんなもん？」
ロイドが反問すると、セルゲイは室内を指さした。
「ああ、あんなのに居座られちゃあ、おちおち煙草も吸えやしねえ。お前たちの客じゃねえのか？　妙にふてぶてしい奴だぜ？」
ロイドたちは、そーっと特務支援課のドアを開けた。
すると広間に、真っ白な神狼が寝そべっているではないか。
無論、ロイドたちに助言を授けてくれた、あの狼である。
「な……！」
「え……！」
「はあっ？」
「あなた、どうして……」
ティオは、すぐに目をぱっちり開き、神狼に駆け寄る。
神狼もティオの声に気づくや、むくりと起き上がり、喉を鳴らした。
「え……うん……うん……」

ティオは、神狼の唸りに何やら反応している。
ロイドも、恐る恐る近づいていった。
「……テ、ティオ、そいつは何て言ってるんだ？」
「……それが……『私の名前は、ツァイトだ』って言ってます」
「ツァイト……」
エリィもランディも、あらためて神狼を凝視する。
ティオは、その毛並みを撫でながら、神狼の言葉を通訳した。
「……『我々への濡れ衣を晴らしたこと、ご苦労だった』……」
「あ、ああ、どうも……」
ロイドが返事をすると、さらに神狼の言葉は続く。
「……『アルモリカ村の農作物を荒らしたことは、すまなかった』……」
「じゃあ、あれはやっぱりお前たちの群れが……！」
「……『我々の群れも、食糧に餓えていたのだ』……」
「な、なるほど」
「……『そのお詫びも兼ねて、私はここに来た』……」
「えっ、それはどういう意味……」
「……『お前たちは若く、どうにも頼りない』……」
「へっ！」

「……『仕方ないので、しばらく私が力を貸してやろう』……」
「なにいっ！」
「……『気が向いた時に助けてやる。それまでずっとここに世話になる』……って、ほんとなの、ツァイト？」
ティオが問いかけると、神狼はまた喉を鳴らす。
「……『心配はいらない。群れは部下に任せたから安心するがいい』……」
「いや、そんなことを、心配してるんじゃなくてさ……！」
だがロイドが動揺を口にしても、神狼ツァイトは『言うべきことはすべて伝えた』とでも言うように、再び床に寝そべったのだ。
そこへようやくセルゲイも現れ、妙な笑いを噛み殺した。
「くくっ……伝説の神狼とはな……お前ら、妙なのに見込まれたじゃねえか？」
「課長ー！」
「とりあえず警察本部には、警察犬で申請しておいてやる。今後、どう付き合っていくかは、お前らが決めるんだな」
そう言い残して、セルゲイは執務室に消えていく。
後に残されたロイドは、怖々とツァイトの背に手を伸ばした。
「やれやれ……とりあえず、どこかで首輪でも買ってくるか……」
しかし、つぶやいた途端、神狼がぎらりとロイドを睨みつける。

あわててロイドは飛び退き、ぎごちなく笑ってみせた。
「いや、ごめん。そんなことしないって！」
そしてティオは、なおもツァイトの毛並みを触っていた。
「……私は嬉しいです。頼りになってくれそうですし……何よりこの、まふまふした毛並みは魅力的かと……」
エリィも、そっと神狼に触れてみる。
「う、うん……たしかに気持ちいいかも」
そしてランディも、ロイドに笑みを振り向けた。
「ま、頼りになる助っ人が増えたと思えばいいのかね？」
「ああ、そうだな……よろしく頼むよ、ツァイト？」
その呼びかけに、神狼は一声だけ短く吼える。
不揃い特務支援課に、またひとつ、新たな力が加わった朝であった。

第四章　そびえる壁たち

クロスベル市の裏通り。
飲食店が並ぶこの一角だけは、夜更けになっても人通りが絶えなかった。
ジャズバーからは音楽が流れ、酔客たちの歌声も通りに響いている。
そんな裏通りから、路地を入ったさらに奥に、彼らはいた。
このクロスベル市の闇を牛耳る、ルバーチェ商会が……
「てめえら、どの面下げて帰ってきやがった！」
巨漢が、雷鳴の如き怒号を響かせた。
その前で硬直するのは、黒ずくめの男二人。
マインツ鉱山町を、軍用犬で威そうとした犯人たちである。
その二人を前に巨漢……ガルシア・ロッシは不機嫌そうに鼻を鳴らした。
「てめえらを保釈させるのに、どれだけの金を使ったか……帝国派議員に送るワイロも結構な金額に膨れあがってる」

「も、申し訳ありません、若頭……」
「まさか鉱山町までクロスベル警察が出張るとは……」
その言い訳に、ガルシアの顔はさらに不機嫌さを増していった。
ルバーチェ商会営業本部長という肩書きの、ナンバー2。
だがその分厚い胸板や、鋼材の如き四肢を見れば分かるとおり、単なる腹心ではない。
ガルシアは、かつて《キリングベア》と呼ばれた猟兵……つまり精鋭傭兵として名を馳せた、歴戦の戦闘指揮官である。
そのガルシアが、ぎりぎりと悔しげに奥歯を軋ませた。
「くそったれが……特務支援課とか言ったな、その連中……聞けば女子供ばかりの新米チームだそうじゃねえか。そんなガキ共に後れを取って、恥ずかしくねえのか！」
叱責され、保釈されたばかりの男たちも拳を握りしめた。
「この仕返しは、俺たちにやらせてください！」
「お許しさえいただければ、すぐにでも殴りこみを……！」
だがガルシアは、先ほどを上回る音量の怒号を炸裂させた。
「馬鹿野郎！」
「ひっ……！」
ガルシアは、怯えた男たちの胸ぐらをつかんだ。
「警察のガキなんぞ、いざとなりゃあどうとでもなる！　俺たちが潰さなきゃならねえ相手は

別にいるだろうが？」
「は、はい……」
「《黒月》……あの忌々しい、東方人の組織を潰すのが先決だ。警察に関わってるヒマなんざねえんだよ！」
叫んで、ガルシアが二人を突き飛ばすと、壁面に叩きつけられた男たちは、あまりの衝撃に意識を失いかけた。
「がっ……！」「ぐはあっ！」
そこでようやく、彼らの首魁が口を開いた。
「その辺にしておけ、ガルシア。あまりいきり立つな」
「会長……」
巨漢は、ソファに座す禿頭の男に背筋を正した。
葉巻から紫煙を吐く、その男こそ、ルバーチェ商会会長、マルコーニ。
仕立ての良い紫のスーツに身を包んでいるが、狡猾そうな表情に気品はない。
しかしさすがに、先代の会長を謀略で追い落とした男である。
五十歳を越えてなお、その眼光は脂ぎった野心に満ちていた。
「確かにその、特務支援課のせいで、軍用犬売買には遅延が生じた。だが、我々の背後には、閣下がついている。このクロスベルにおいて、我々の優位は圧倒的だ」
マルコーニは、ゆったりと紫煙を吐いた。

「それに《黒月》とて、まだこの地に根を張ったばかり。我々のような人脈は築いておらぬ。じっくり責め殺せばいいのだ」
だがガルシアは、マルコーニ会長にぐいとにじり寄った。
「ですが会長……あいつだけは危険です。あの男だけは……」
「ふむ……お前を翻弄したという、例の刺客か」
「はい……」
「ツァオ・リーもさぞ大枚を叩いたことだろうな、くくくっ……」
「会長……！」
それでもマルコーニは、鷹揚に手を振り、若頭を宥めた。
「まあ、そう心配せずとも《黒月》への対応に抜かりはない。それより問題は……来月に迫った『競売会』だ」
「……承知しています」
その一言で、室内の空気が入れ替わる。
辺りには、また違った種類の緊張が生まれ、ガルシアも冷静さを取り戻した。
「『競売会』は、我々にとっては晴れ舞台だ。《黒月》に妨害されるようなことがあっては、絶対にならん。もし手出しをするようなら……」
「殲滅します、一人残らず。骨も残らぬように」
ガルシアは言って、わずかに笑みをちらつかせる。

人食い熊の、微笑に思えた。

＊＊＊＊＊

「ただいま～」
「やっと終わったぜ～」
ロイドとランディは、特務支援課のドアを開いた。
すでに昼時。広間では、エリィが昼食のパスタを盛りつけていた。
「あら、お帰りなさい、早かったのね？」
ティオも、キッチンから色鮮やかなサラダを運んできた。
「交通課のお手伝い、終わったのですか？」
「ああ、どうにかね。しっかし疲れたよ！」
ロイドとランディは、どっかと椅子に腰かけて言った。
「違法駐車してる導力車を力ずくで移動させるんだけど……」
「まあ、多いのなんのって……特に歓楽街がひどかったな。ちょうど新作の公演前だから、チケット買いに来る奴が多いんだろうけど」
そう言ってランディは、サラダのミニトマトをひとつ、つまみ食いする。
本来、駐車違反を取り締まるのは、交通課の仕事である。

だがクロスベル警察は、基本的に人手不足。
そのため、ロイドたち特務支援課は、あちこちの応援に回ることも多かった。
エリィは、ロイドたちの皿にも、器用にパスタを取り分けた。
「そういえば、いよいよ来月だったわね。劇団《アルカンシェル》の新公演って」
「ああ。歓楽街は、大賑わいだよ。まだまだ公演は先だっていうのに」
ロイドが、パスタを食べ始めると、ランディが眉を寄せた。
「そうなんだよな〜。俺もチケット取りたかったけど、完売でよ〜。再来月の公演のB席が、やっと取れたくらいだぜ」
嘆くランディを見て、ティオが意外そうな顔をした。
「……ランディさんに、お芝居を観る趣味があったなんて意外です」
「あのな、俺は美を愛でる男だぜ？　《アルカンシェル》の看板女優、イリア・プラティエこそ、この世に舞い降りた美の女神！　見ないワケにはいかんだろう？」

《アルカンシェル》。
クロスベル歓楽街に専用劇場を持つ、演劇集団である。
その人気は周辺国にも広がり、新たな演目を発表するたび、チケットを求めて大陸中からファンが押し寄せることでも有名である。
中でも、《炎の舞姫》の異名を持つ劇団のトップスター、イリア・プラティエの人気は凄ま

じく、彼女主演の新作が封切られるとあって、歓楽街は沸きに沸いていたのだ。
ロイドも、パスタを呑み下しつつ、ふと思い出した。
「そういや俺も、《アルカンシェル》の演目は見たことがあるけど、イリア・プラティエの舞台は見たことがないんだよな」
するとランディが、同情するような視線をロイドに向けた。
「やれやれ、不憫な奴。いいか、この世には二種類の人間がいるんだ。イリア・プラティ
舞台を見た者と、そうでない者だ」
「へえーっ、それ誰の名言？」
「俺様、ランディ・オルランド」
「な、なんだそりゃ……」
だが呆れるロイドの横で、エリィも納得するように微笑んだ。
「ふふふっ……でもたしかに凄いわよ。一度、彼女の演技を目にしたら、魂をつかまれて
う気がするの」
「エリィも観たこと、あるのかい？」
「ええ、この世に天才がいるとすれば、彼女は間違いなくその一人でしょうね」
しかしティオだけは、さほど興味がない様子でサラダをつっついていた。
「……なるほど。道理で最近、歓楽街での支援要請が多いと思いました。それでは公演が

るまで、この忙しさは続きそうですね」

言いかけて、ロイドは水を飲み、先を続けた。

「……《アルカンシェル》の新作のお披露目と、クロスベルの創立記念祭が重なってるもんなあ。ヒマになるわけがないよ」

そう、クロスベル市は来月、創立七十周年記念祭を控えていた。

毎年、行われるこの創立記念祭は五日間にわたり、市内各地で記念イベントが催され、保養施設ミシュラムのテーマパークは人であふれかえる。

さらに《アルカンシェル》の新作披露となれば、クロスベル警察の業務が激増することは目に見えていた。

それでもロイドは、努めて笑顔を保とうとした。

「まあ、なんとか頑張ろう。頼りになる助っ人も増えたことだしね」

ロイドの視線は、広間の床に寝そべる神狼を見つめていた。

ツァイトは、一日のほとんどをそうやって安穏に過ごしている。

だが決して、寝ているばかりでもない。

先日も、広間で眠っていると思ったら、突然はね起きて、外へ駆け出していった。

そして導力車の前に飛び出した子供を間一髪、助け出したのだ。

以来、ツァイトは特務支援課のマスコットとして知られ、街をパトロールすれば、子供たちが寄ってくるほどである。

勿論、ツァイトの人気に頼るわけにもいかないが、少なくとも特務支援課が認知され始めたのは事実だった。

後は、遊撃士協会のパクリという評判をいかにして……

そう、ロイドが考えを巡らせた時、不意にツァイトが首をもたげた。

同時にドアの呼び鈴が鳴り、来客の訪問を告げる。

「あら、誰かしら、いったい……」

食事を済ませたエリィが対応に出ると、表には一人の女性が待っていた。

「あ……あの……」

「はい？」

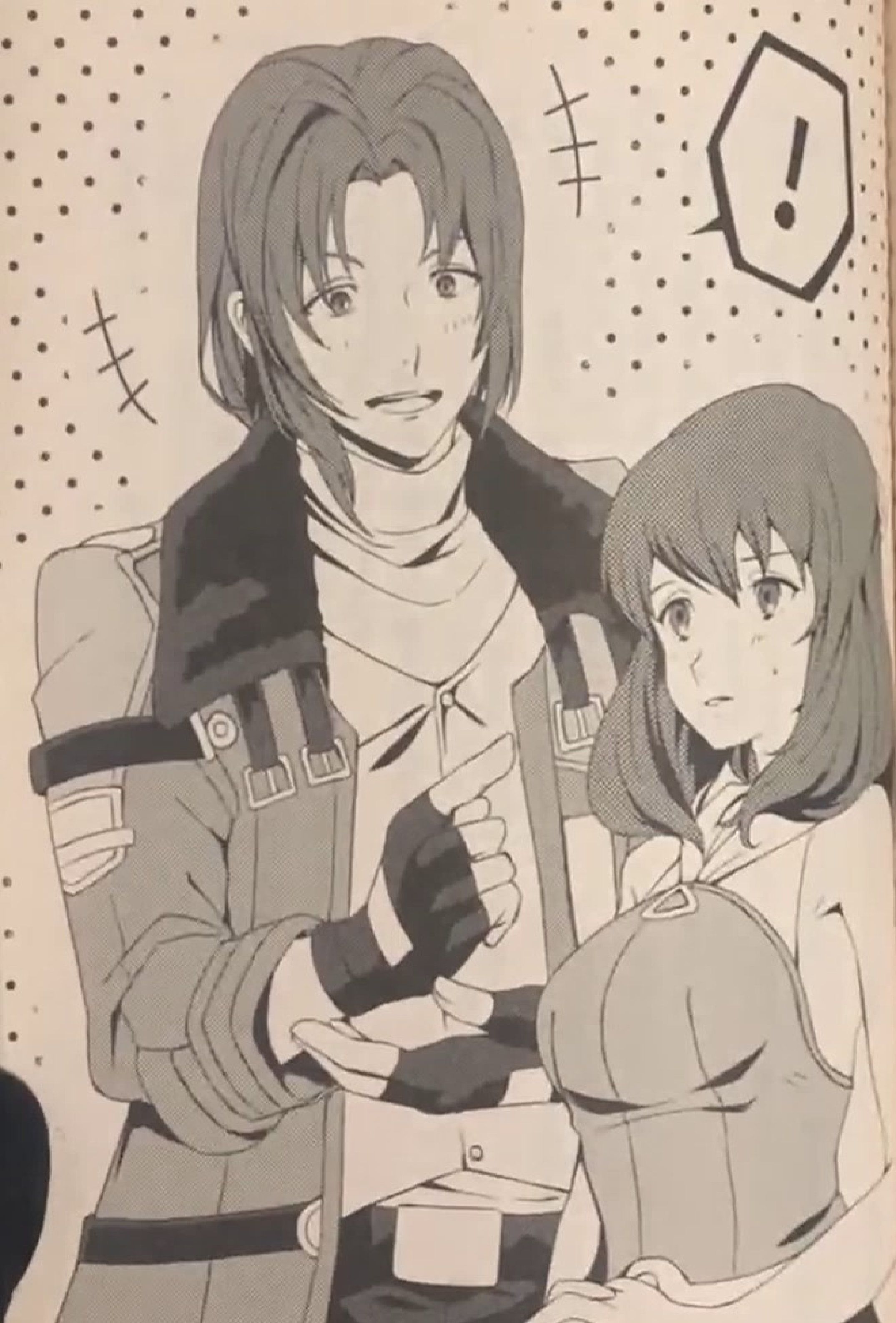
「……こちらが特務支援課でよろしいでしょうか？　警察本部で聞いたら、ここだと教えてくれたもので……」

立っていたのは、紫がかった髪の少女。

上半身をぴったりと包むタンクトップを着て、おへそは露わに。

その服のおかげで、豊かな胸元がより大きく強調されていた。

すると広間から、しゅたーっ！　とランディが割り込んできた。



「ああ、そうだよ、ここが特務支援課さ」

「ちょっ、ランディってば！」

「何か困ったことがあるなら、俺が優しく相談に乗るよ」

だがそんな軟派ぶりにもかかわらず、少女はほっと安堵を吐いた。

「よかった……私は、リーシャ・マオと申します。劇団《アルカンシェル》に在籍してるのですが……」

「へえ！　君、女優さん？」

「い、一応……まだ駆け出しですけど……」

「駆け出し？　新人さん？　んんんっ？」

ランディは首を傾げ、やがてぽん！　と手を打った。

「思い出したぜ！　君、今度の新公演の準主役だろ！　たしかイリア・プラティエが大抜擢した大型新人って！」

「えっ、そうなの？」

エリィも、まじまじとリーシャを見つめると、彼女はすまなさそうに縮こまった。

「そ、そんな……私なんてまだまだで……足を引っ張ってばかりなんです。本当は準主役な
て早いと思ってるんですけど……」

「いやあ、道理で魅力的だと思ったよ。俺の目にはまるで君にピンスポットが……」

と言いかけるランディを押し退けて、ロイドが前に立った。

「とにかく、中へどうぞ。しかし《アルカンシェル》の方がどんな用事で？」
「それが……」
リーシャは、後ろ手にドアを閉めると、思いつめた表情を見せた。
「……脅迫状が届いたんです。《アルカンシェル》の看板女優、イリア・プラティエさんの元に……」
ロイドたちは、思わず顔を見あわせる。
あまりに意外で、唐突すぎる事件の始まりであった。
「一週間前、イリアさんの元に差出人不明の手紙が届いたんです」
リーシャは、広間のソファに座って話し始める。
「イリアさん本人は、気にするなって言ってますけど……ちょっと不気味な文面で……私や劇団長には、ただの悪戯には思えなかったんです。それで……」
「クロスベル警察に行かれたんですね？」
ロイドは、リーシャの真向かいに腰を下ろした。
「それで、脅迫状はどちらに？　まずはそれを見せてもらう必要がありますね」
「脅迫状は、イリアさんがまだ持ってます。すぐに捨てようとしていたんですけど、何かの証拠になるかもって私たちが止めて……」
「なるほど……しかしお話を伺う限り、イリアさん御本人は、この調査について、あまり乗り

気ではないようですね？」
するとリーシャは、困ったように顔を伏せた。
「はい……今は新公演に集中したいって言って……たとえ捜査のためでも、劇場に警察なんか呼びたくないと……」
ロイドとランディも、視線を合わせ、思わず苦笑いを浮かべた。
「……ってことは、俺たちが捜査をしても、迷惑じゃないのか？」
「ああ……せっかくイリア・プラティエがらみの事件でテンション上がってたのになあ」
その様子に呆れつつ、エリィが口を開いた。
「警察がだめでしたら、遊撃士協会に相談してはいかがですか？　あちらも護衛はしてくれると思いますが？」
「それも考えました。でも遊撃士は、クロスベルでとても人気があるみたいですし……そんな人たちが出入りしたら、すぐ噂になってしまいそうで……」
「その点、皆さんならそこまで話題にはならないかと思って……」
「たしかにそうでしょうね」
「ええっ？」
エリィも、がっくりと肩を落とす答えだった。
だがロイドは、頭を掻きつつ、リーシャにうなずいた。
「分かりました。この一件、お引き受けしましょう」

「本当ですか！　よかった……」
「ただし、まずはその脅迫状を確認し、イリアさんに護衛の許可をいただかなくてはなりません。できる限り、早く……」
するとリーシャは、力強く首を縦に振った。
「もちろんです！　よければ今から、イリアさんと劇団長にご紹介しますよ？」
「そうしていただけると助かります」
ロイドは、いつも通り淡々と聞き取りを終えた。
だがランディは、すでにソファから躍り上がるように喜んでいた。
「いや～、しかし役得！　まさか生イリアに会えるなんてよ！　俺、特務支援課に入って良かった！」
エリィは、その興奮を肘でつっついた。
「喜ぶのはまだ早いわよ。追い返されるかもしれないんだし……でも、あのイリア・プラティエから直接話を聞けると思うと、緊張しちゃうわね」
「……私も、ちょっと楽しみです」
ティオも言って、傍で眠るツァイトの背中を撫でた。
神狼は、さほど興味がないようで、ただ午睡をむさぼるだけであった。

劇団《アルカンシェル》専用劇場。
歓楽街にそびえるその建物は、天使像とステンドグラス窓が印象的な、宮殿の如き威容を誇っていた。
その正面入口には、新公演の巨大ポスターが掲示されている。
タイトルは『金の太陽、銀の月』。
主役である太陽の姫を演じるのは勿論、イリア・プラティエ。
相手役、月の姫を演じるのが、調査を依頼したリーシャ・マオである。
その劇場の入口で……

「よくおいでくださいました。私が支配人のバルサモです」
劇場を統轄する初老の男は、ロイドたちを慇懃に迎え入れてくれた。
「なにしろ手前どもも、このような事態は初めてでして……いったいどうすればよいかと思案していたのですが……」
「ええ、心配されるお気持ちは分かります」
ロイドが、瀟洒な造りの劇場にそわそわしていると、リーシャが周囲を見渡した。
「バルサモさん、今、イリアさんはどちらですか？　例の脅迫状を、皆さんに見ていただこうと思って……」
「ああ、イリアさんならリハーサル中だよ。ホールにご案内しましょう」
「いいんですか？　ご迷惑では……」

ロイドが躊躇すると、支配人は気さくそうに笑った。
「いえいえ、そのようなことを、気にされる人ではありませんよ。むしろお客様がいらした方が本番に近い、と言って喜ばれると思います」
「そ、そうなんですか？」
それでも躊躇うロイドの背を、ランディが軽く突き飛ばした。
「行こうぜ、ロイド！　イリア・プラティエのリハーサルが観れるなんて、ありがたいじゃねえか！」
「呑気なこと言うよなあ……でも、とにかくお邪魔します」
支配人とリーシャに先導され、ロイドたちはホールの扉をくぐる。
瞬間、ロイドたちの視界に劇場の全貌が露わになった。
半円状に並んだ座席は、二階、三階にも重なっている。
その座席に囲まれた中心に、広い舞台が据えられていた。
すでに舞台装置も準備されたステージ上は、本番同様の態勢にある。
だがそこで、舞い踊る人物こそ、本番さながらの……いや、舞台や演劇という枠組みを超えた動きを見せていたのだ。
「あれが……」
絶句するロイドの目には、美神が映っていた。
背中まで流れる長い金髪。

遠目から観ても分かるほど強い、紅く光る瞳。
イリア・プラティエは、白い肌を露わにした太陽の姫の衣装をまとっていた。
だがロイドを釘付けにしたのは、決してその容姿だけではない。
イリアは、音楽に併せて、舞台上を跳躍し、空中で回転し、まさに太陽の如く輝きながら踊っていた。
その動きは、音楽につれて次第に速まり、あふれ出る熱情も高まっていく。
しかしイリアの舞踏に、疲労の色は微塵もなかった。
むしろ音楽を引っ張るかのように、より速く、より高く舞い踊っている。
まさに、観る者を惹き込み、虜にするようなパフォーマンス。
エリィも、ようやく声を搾り出した。
「あれがイリア・プラティエよ……」
ランディも、常の緩んだ表情はどこかへ消え失せている。
「……なんつーか……うん……凄い、としか言いようがないな」
ティオも、珍しく目を見開いて舞台に魅入られていた。
「……さすが看板女優さんだけはありますね」
やがて音楽が止まると同時に、イリアの動きもぴたりと止まる。
同時にロイドたちは、自然と拍手を打ち鳴らしていた。
「え……？」

イリアは、予期せぬ観客たちを不思議がっている。
そこへリーシャが通路を下り、舞台へと近づいていった。
「イリアさん……こちらの方たちが、特務支援課の皆さんです」
「やだ、本当に呼んだの？　あたしは別に気にしてないのに……」
「そうは言っても……」
続いてロイドたちも、舞台の下に進み出た。
「すみません、リハーサル中にお邪魔して……しかし、その……」
ロイドが一瞬口ごもると、すかさずエリィたちも前に出た。
「素晴らしいパフォーマンスでした！」
「俺、魂、抜かれましたよ！」
「……本当に、感動しました」
ランディもティオも、熱っぽい感想を、イリアにぶつける。
それが微笑ましかったのか、イリアは妖艶な笑みで一礼した。
「ふふっ、ありがとう……でも、今のはあくまでリハーサルよ。本番までに、もっと完成度…
上げなければいけないの」
「今のより、もっとですか？」
ロイドが、半ば唖然として聞くと、イリアは笑みを増した。
「当たり前でしょう。今のは、あくまで太陽の姫だけのシーンよ。これにリーシャが演じる…

の舞台を加えて、もっと凄いクライマックスにしてみせるわ」
「は、はあ……」
その言葉を聞き、エリィたちがさらに舞台に詰め寄る。
「是非、拝見したいです。イリアさんの舞台！」
「俺も！　俺も！」
「……ランディさん、落ち着いてください。恥ずかしいですよ」
しかしその様子にも、イリアは鷹揚な笑みで応えた。
そしてあらためて、ロイドたちをじっくりと眺め回す。
「……ふーん、なるほど。確かにあなたたち、全然、警察っぽくないわね」
「……そうらしい、です」
「でも事情聴取とかするんでしょ？　たかが悪戯に、そこまで神経使いたくないわ」
すると客席の最前列に座っていた男が、おもむろに立ち上がった。
「まあまあ、イリア。みんな、お前のことを心配してのことだ。警察の皆さんにもご協力し…
あげたらどうだね？」
口髭をたくわえたその男は、ロイドの手を取って自己紹介した。
「来てくださって感謝します。劇団長のアバンと申します」
「あ、どうも……俺は……」
「イリアはこんな娘ですが、どうか守ってやってください。お願いしますぞ」

託すように、アバンは、ロイドの手を強く握りしめる。
それでもイリアは、面倒くさそうにうなじを掻いた。
「だけどさあ、公演中は、演技に集中するのがあたしのスタイルだし～。リーシャがおっぱい揉ませてくれたら、考えてもいいけど～」
「も、揉ませませんてばっ！」
「えーっ、じゃあ警備は無しね」
「そんな！　もうイリアさん、ふざけないでくださいよお！」
リーシャは、すがるようにイリアに駆け寄った。
「お願いします、イリアさんにもしものことがあったら大変ですから！」
「大丈夫よ。それに警察に、辺りをうろつかれるのは嫌～」
「そんなこと言わないでください～！」
「嫌なもんは、嫌なの。あたしは堅苦しいのが苦手なんだから」
「あ～っ、もう……」
困り果てながらも、リーシャは背後を振り返った。
「すみません、ロイドさん。何とか説得しますから、もうちょっと待っててください」
「ええ、我々もなんとか、ご迷惑にならない警備の方法を……」
ところが。
その会話を聞いた途端、イリアが首を傾げた。

「……ロイド？　あなた、ロイドって言うの？」
「はい。クロスベル警察、特務支援課、ロイド・バニングス捜査官と申します」
ロイドは、今さらながら敬礼する。
するとイリアが、ひょいと舞台から飛び降り、ロイドに抱きついた。
「あはは、やっぱりね！」
「ええっ－！」
その姿に、仲間たちも唖然としている。
あわててリーシャと劇団長が、イリアを引き剝がしにかかった。
「ど、どうしたんですか！　イリアさん、急に！」
「な、なにをしとるんだね！　ご迷惑だろう！」
だがイリア本人は、周囲の混乱も気にせず、豪快に笑ってみせた。
「いや～、世間って狭いわね！　まさか噂の弟君とこうして会えるなんて！」
「……弟？」
「ええ。捜査官になったとは聞いてたけど……そっか、あなたがロイド君か」
ようやく、ロイドも事情を呑み込み始めた。
「あ、あの……もしかしてイリアさん、セシル姉と知り合いですか？」
「もちろんよ。セシルとあたしは親友同士なの。日曜学校以来だから、もう十年以上の付き合いになるわね」

「そうだったんですかー」
驚愕するロイドからようやく離れ、イリアはにっこり笑った。
「やれやれ。そういうことなら、仕方ないか」
「じゃあイリアさん……」
「いいわよ。特別に、あたしの警護を許可してあげる」
そして太陽の姫は、衣装の裾をつまんで会釈した。
「あらためて、どうぞよろしく。私、イリア・プラティエと、劇団《アルカンシェル》をあな
たたちに託すわ」
その一礼すら、優美な舞に見える。
あまりに眩しく、ぬくもりにあふれた太陽であった。

＊＊＊＊

「ほら、これよ」
イリアは、さして勿体もつけずに一通の手紙を差し出した。
ロイドはそれを開封し、文面に目を走らせる。

『公演ヲ中止セヨ。
サモナクバ炎ノ舞姫ニ悲劇ガ訪レルダロウ。
《銀》ヨリ』

イリアは、彼女専用の楽屋でくつろぎながら、それを指す。
「たぶん、ただの嫌がらせよ。こういう手紙が送られてくるの、結構あるし」
しかし劇団長のアバンと、リーシャは気鬱を表にしていた。
「しかしね、今まで送られてきた脅迫状は、ほとんど無記名だったじゃないか」
「そうですよ。それが今回は《銀》なんて名前が書いてあって……ただの悪戯とは思えな
です」
ロイドは、その手紙を卓上に置き、イリアたちに向き直った。
「皆さん、《銀》という名前に心当たりは無いんですか？」
「いーえ、全っ然」
「うちの新公演には、銀という言葉は使われているがねえ」
「……特に、思い当たることって無いんですよ」
劇団長も、リーシャも、困惑したまま視線を伏せる。
続いてエリィが、イリアに質問をぶつけた。
「では、それ以外の心当たりはありませんか？　失礼ですが、最近、誰かの恨みを買うよう
ことがあったとか……」

「それも、全っ然」
イリアは、まるで心当たりがない様子である。
だが横から、劇団長とリーシャがその腕をつかんだ。
「おい、イリア、まさか忘れたのかい？」
「ほら、先日の、例の会長さんのこと……」
二人は、記憶を呼び覚ますようにイリアの腕を揺すぶった。
そしてようやく本人も、はたと気がついたらしい。
「ああ、あのハゲオヤジね！　どーでもいい奴だから、すっかり忘れてたわ」
「誰の話ですか、そのハゲオヤジって……？」
エリィが再び問うと、イリアは迷惑そうに顔をしかめた。
「マルコーニっていう、脂ぎったおっさんよ。なんだっけ……そうそう、ルバーチェ商会っ
いうとこの会長だか、なんだか……」
「えっ！」
「よく接待で、うちの公演に客を連れてくるのよ。いつも貴賓席を使っているから、羽振り
いいんでしょうけど、演技とか全然見ないで、あたしの身体ばっかりいやらしい目で見てん
で、この前そのハゲオヤジが、言い寄ってきたわけ。エレボニア帝都のオペラハウスへの出
を後援してやろうとか、恩着せがましいこと言ってさ」
一気にまくしたてるほど、イリアは憤慨しているらしい。

ロイドは、いったん劇団長に視線を向けた。
「帝都への出演……ですか？」
「そうなんだ。しかしマルコーニ会長の仲介が無くても、その機会は十分にある。以前か
国だけではなく、共和国からも打診は来ているんだよ。期間限定でいいから、特別公演を
てくれないかってね」
「そこにわざわざ一枚噛んでくるってことは……」
「うちの公演を仲介して、金儲けを企んでいるんだろう。あるいはイリア目当て……だか
も慇懃に断るつもりだったんだが……」
劇団長が口ごもると、イリアが口調を強めた。
「ああいう奴には、遠回しに断ってもだめよ。だからあたしが直接断ったの。二度と迫って
る気が起きないよう、ビンタもかましてさ」
「ビ、ビンタ！」
「こ、怖いもの知らずですね、イリアさん……」
ロイドとエリィが目を丸くしても、イリアは平然と笑うだけである。
劇団長も、それを思い出してか、うなじの汗を拭った。
「いやあ、あの時は生きた心地がしなかったよ。まあ、向こうもイリアの身体をべたべたと
っていたから、自業自得だとは思うが……」
「マルコーニのおっさんが、その屈辱を忘れていない可能性はある……か」

ランディの推測に、ティオも深くうなずいた。
「……確かに、脅迫の動機にはなりそうですね」
ロイドは今一度、卓上の手紙を見つめた。
ティオの言うとおり、たしかにマルコーニ会長には動機がある。
だがいくつかの疑問を抱いて、ロイドは再びそれを手にした。
「分かりました。とにかく捜査を開始します。この脅迫状は、お預かりしますよ？」
「ええ、いいわよ。それにしても……ふふっ、目付きが変わったわね」
「え……？」
戸惑うロイドの瞳を、イリアは真っ直ぐに見つめてきた。
「あたしたちが舞台に上がる時と同じような目をしているわ……事件を前にした捜査官も同じなのね」
「それだけ真摯に向き合ってるってことよ……いいわ、あなたたちなら、良い捜査をしてくれそうだし、この件、すべてお任せするわね」
「初めてですよ、そんなこと言われたの」
その言葉に、ロイドたちも居住まいを正した。
「できる限り早く、解決してみせます」
「ええ、イリアさんが新公演に集中できるように」
「俺たちに任せてくださいっ！」

「……それまでしばしお待ちを……」
四人の意気込みを、イリアは微笑して受け止めている。
さながら騎士たちを見送る、太陽の姫であった。

「さて……どうするんだ、ロイド？」
ランディが、伸びをしながら訊ねた。
劇場を出たロイドたちは、歓楽街のベンチに腰かけている。
四人の手には、アイスクリームの屋台で買った濃縮バニラオレがあった。
それを飲みながら、ランディは《アルカンシェル》の劇場を振り返った。
「雲をつかむような事件だが、今のところ、手がかりはルバーチェくらいだぜ」
「一応、《銀》という名前も手がかりになりそうです」
ティオも、バニラオレを一口飲んで言う。
エリィは、まだ口をつけず、ストローでそれを掻き回していた。
「いずれにしろ、悪戯とは見なさない方が賢明ね。物証は脅迫状しかないから、そこから調べる手もあるけど……」
ロイドも、まだ飲み物には口をつけず、しばし思案を続けていた。
「……そうだな。一度、ルバーチェ商会を訪ねてみようか？」
「えっ！」

「おいおい、マジかよ？」

「……大胆ですね、ロイドさん」

仲間たちは驚嘆しているが、ロイドは至って平静だった。

「いや、普通に事情聴取をするだけさ。脅迫状を出したのがルバーチェの会長かどうかは分からないけれど……これを機会に、直接、接触してみるのも手かなと」

ロイドたちは、今まで何度もルバーチェ商会の犯罪を摘発してきた。

しかしルバーチェ商会が、普段どのような環境で活動を行っているのか、それを確認したことはないのだ。

エリィも納得して、バニラオレを一口飲んだ。

「そうね、訪ねるだけなら、危険じゃないと思うわ。それに彼らが、本当はどういう存在なのか……この目で見ることも大事だと思うの」

その意味深な言い方に、ランディがぴくりと反応した。

「なんだよ、お嬢。妙にもったいつけた言い方だなあ？」

「そう？　でも敵を知った方が、これからの捜査もやりやすくなるわよ」

「まあな。あまりお近づきになりたくはねえが、これも任務のためだ」

言うとティオも、ロイドの表情を覗き込んだ。

「でもロイドさんは、今回の事件、ルバーチェ商会が絡んでいるとお思いですか？」

「そこなんだ。今のところ、彼らが犯人に見えなくもない。ただ……」

ロイドは、言葉と一緒にバニラオレを一気に飲み干す。

先入観を口にするには、まだ早いと思えたのだ。

＊＊＊＊＊

あわてふためく足音。

黒ずくめの男が、自らの住処へ駆け込んでいく。

ルバーチェ商会の奥に達した男は、ソファに座る巨漢に走り寄った。

「若頭！」

「なんだ、騒々しい」

ガルシア・ロッシは、武器メーカーのカタログから視線を上げた。

息せき切った男は、呼吸を鎮めてガルシアに耳打ちする。

途端に、ガルシアのこめかみに血管が浮き上がった。

「なに、特務支援課だと？」

「はい、今、表に来て、会長に事情聴取をさせろと」

「ちっ、例のガキどもか……調子に乗りやがって……」

ガルシアは悪態と共に、カタログを乱暴に閉じる。

だがその目は、すうっと細まり、巨体はソファに悠然ともたれかかった。

「……いいだろう。通してやれ」
「しかし若頭……」
「馬鹿野郎。会長に取り次ぐわけねえだろう。俺が相手をしてやる。それでもいいなら入ってこいと言ってやれ」
そして巨漢は、葉巻を一本取りだし、ゆっくり火を点ける。
「……向こうも気づいたんだろうよ。直接、乗り込んで俺たちを確かめる時期だとな。その度胸だけは買ってやる」
「は、はあ……」
「だがくそ度胸だけで、うちが潰せると思ったら大間違いだ。そこら辺をみっちり教えてやらんとな……」
ガルシアは、狡猾で、かつ好戦的な笑みを浮かべた。
彼の前に、四人の『ガキども』が現れたのは、数分後のことだった。

＊＊＊＊

ロイドたちは、ルバーチェ商会のソファに座していた。
なるほど、イリアが『羽振りがいい』と評しただけあって、室内はそれなりの調度品が幾つも飾られている。

真実を知らなければ、格調高い応接間、にも見えるだろう。
しかしロイドの前には、ふてぶてしい面構えの巨漢が座っていた。
背後に立つ数人の黒ずくめの男たちも、ロイドたちを威圧している。
巨漢は、ゆったりと葉巻の煙をくゆらせながら口を開いた。
「ガルシア・ロッソ……ルバーチェ商会の営業本部長だ。まあ、ここでは若頭と呼ばれているがな。しかし……」
ガルシアは、ロイドからの説明を一笑に付した。
「うちの会長が、イリア・プラティエを脅迫だと？　くくっ……とんだヨタ話もあったもんだぜ」
「無論、こちらもそうだと決め付けているわけではありません」
ロイドは、あくまで落ち着いた口調で話を続けた。
「ですが、先日もめ事があったと聞きまして、参考までに話を伺えればと」
「ああ、会長が引っぱたかれた時のことか」
ガルシアは、さもつまらなさそうに、それを思い出した。
「ありゃあ、酒の席の戯れ言だ。会長も酔っていたし、ほとんど記憶にないらしいぜ。それを気にするほど、うちの会長はケチじゃねえ」
「……そうでしたか」
ロイドは、会話を続けながらもガルシアを観察していた。

何度も煮え湯を飲まされた相手ではあるが、過剰な憎悪はない。
逆にガルシアの方は、実力的にも優位に立っているのか、あふれんばかりの余裕を見せつけている。
そんな状況ではあるが、エリィも、いつもの冷静な声を維持していた。
「お聞きした話ですと、帝都への進出をイリアさんに持ちかけられたとか？」
「まあな。うちも芸能興業に手を広げたいと思っている。《アルカンシェル》への打診は、その一環だ」
「なるほど……」
「もっともそっちは口実で、会長は例の会にも彼女を招待したかったらしいが……」
ガルシアは、何気なく言葉を連ねる。
だがロイドは、さりげなく彼の言葉に反応した。
「例の会と言いますと？」
「いや、こっちの話だ。まあ、そういうわけで、うちには何の関わりもねえ。分かったか、坊主ども？」
ガルシアは、見下すように言い放つ。
だがロイドは、明らかにガルシアが口を滑らせたことに気づいていた。
余裕を誇示しすぎて、油断したのか……
しかしロイドも、今は深入りせず、脅迫状を取りだした。

「……分かりました。念のため、脅迫状を確認してもらえませんか？」
「いいだろう……よこせ」
ガルシアは、無造作にそれを受け取り、すぐに失笑を漏らす。
「なんだこれは？　たしかに脅迫状だが、こんなもんで動くとは警察もヒマ……」
と、言いかけて。
ガルシアの目線が止まった。
だがすぐに、巨漢は脅迫状を封筒にしまい、ロイドに投げ返す。
「……ヒマだな。もっと他に、取り締まる事件があるんじゃねえのか？」
「……かもしれませんね」
ロイドもそれを受け取ると、静かに席を立った。
「お邪魔しました。また何かあれば、事情を聞かせていただきますので」
「え、もう……」
呆気ない終幕に、エリィが視線を送る。
だがロイドは、おとなしく出口へと向かっている。
その姿に、ガルシアもソファから立ち上がり、野太い声を響かせた。
「本当はな、会うつもりはなかったんだぜ」
「…………」
「だがせっかくの機会だ。忠告だけはしておいてやろう」

ロイドは、黙ったまま振り向き、巨漢と目を合わせた。
ガルシアの目には、嘲りと侮蔑が混じった光が灯っている。
「てめえらが何をしようが、この街の現実は変わらねえ。ましてや俺たちをどうこうするなんて不可能なんだよ」
「…………」
「これ以上刃向かえば、ガキだろうが容赦なく叩き潰す。それだけは言っておくぜ」
ガルシアの言葉に、ランディが牙を剥きかけた。
「なんだと……」
「やるのか、赤いの？　いつでも相手になってやるぜ」
ガルシアは、ぱきぱきと指を鳴らす。
だがロイドは、ランディの腕を取って、引き留めた。
「……ご忠告、ありがたく受け取っておきますよ」
「おい、ロイド、こいつは……」
「行こう、みんな。聞き込みはこれで十分だ」
そう言ってロイドは、ルバーチェ商会を出て行った。

「ふんっ！　気にくわねえな！」
ランディは、裏通りを抜け、中央広場まで来ても、まだ憤慨していた。

すでに遠ざかったルバーチェ商会を振り向き、苦々しい顔を見せている。
「あの余裕っぷりはなんだよ。俺たちを威すとは十年早いぜ！」
「……それ、向こうが思ってることですよ、きっと」
ティオも大きく肩で息をして、ロイドを見つめた。
「……まるで相手にならない、といった感じでしたね……私たちが何をしたところで、痛くも痒くもないっていうか……」
「う……ん」
「帝国派議員との繋がりは、そんなに強いのでしょうか？」
「た……ぶんね」
ロイドは、少しうつむいたまま短く答える。
その様子に、エリィが違和感を覚えた。
「どうしたの、ロイド？　何か考えてるようだけど……」
「ああ……脅迫状の件なんだけど……」
言いながら、ロイドは広場のベンチに腰かけた。
「……あの若頭の言葉を鵜呑みにするわけじゃないけど、この事件にルバーチェが関与している可能性は低いと思うんだ」
「えっ？」
「待てよ、ロイド！　だってあいつは……」

「……はい。明らかに脅迫状を見て動揺していました」
仲間たちも、ベンチに座って顔を寄せる。
それでもロイドは、首を横に振った。
「ああ……だけどガルシアが驚いたのは、恐らく差出人の名前だ」
「差出人……ああ、《銀》だっけ？」
エリィが言うと、ロイドは再度、脅迫状を取りだした。
「そうなんだ。ガルシアが脅迫状を見ている時、彼の目線を追っていたんだけど……最後の最後で反応を見せた。間違いないよ」
ランディもそれを受け取って、今一度眺めた。
「だけどよ。この《銀》がルバーチェの関係者……って可能性もあるぜ？」
「いや、だとしたら、ガルシアの態度はおかしい。彼は、無関係だってことを、最初から確信していた。だから事情聴取にも応じたんじゃないか？」
「そうか、言われてみれば……」
するとティオが、瞑目して考えを巡らせ始めた。
「……つまりルバーチェと無関係だけれど、彼らが強く意識している誰か……ということですか？」
「ああ。だとすれば、ルバーチェと《銀》……この線から調べた方が良さそうだ」
そう言ってロイドは、ベンチから立ち上がった。

「西通りに行こう。イアン先生なら、何か知っているかもしれない」

＊＊＊＊＊

「なるほど……《銀》か……」
書斎に座る男性は、その名に低く呻いた。
髭面で、大柄な体格から『熊ヒゲ先生』と渾名される、人情厚き弁護士。
企業の法律相談を生業にしながらも、クロスベル市内の暗部にも詳しい人物である。
イアン・グリムウッドは、眼鏡を拭きながらロイドたちに向きなおった。
「たしかに聞き覚えはある。しかし私の知る《銀》と、その脅迫状の差出人が同一人物かは分からんがね」
「是非、聞かせてください、先生」
ロイドは、身を乗り出した。
「こちらとしても手がかりが少ないんです。どんなことでもかまいませんから」
イアン・グリムウッドは、職業柄、様々な情報に精通している。
特にルバーチェ商会がらみの事件を扱うことも多く、そのためにクロスベル警察からも頼りにされている男であった。
ロイドたちも、何度か世話になった男は、おもむろに口を開いた。

「以前、カルバード共和国に行った時に聞いた話だがね。彼ら東方人の間には、奇妙な都市伝説が流布しているらしいんだ」

「都市伝説……ですか？」

「ああ。共和国のどこかに、どんな標的でも必ず仕留める希代の暗殺者……彼らの言い方では凶手と言うんだが……そういう人物がいるらしい」

イアンは、丸眼鏡をかけ直して続けた。

「実在するかどうかも、分からない。噂では仮面と黒衣をまとい、影のように現れ、獲物を殺した後は影のように消えると言うんだ」

「仮面の暗殺者ですか……」

エリィがつぶやくと、イアンも咳払いをひとつした。

「うむ……その、誰も正体を知らない。素顔さえ見せない伝説の凶手が……《銀》と呼ばれているんだよ」

「伝説の凶手……」

ロイドは、それを知るとしばし黙り込んだ。

なるほど、最初は謎めいた脅迫状だったが、知る者が知れば、これほど恐ろしい差出人もいない。

そこへティオが、ひょいと手を上げた。

「……ですが、どうしてその伝説の刺客がイリアさんに脅迫状を？」

エリィも、腕組みして思案に没入する。

「そうね。共和国……東方人……もしかして、《黒月》が絡んでいるのかしら？」

「おいおい、それじゃ益々厄介な方向へ行くぜ、この事件……」

ランディすら、その名に顔をしかめている。

《黒月》……カルバード共和国の東方人街に根を張る犯罪組織である。

その勢力は近年、クロスベルにも食指を伸ばしており、地元勢力であるルバーチェ商会と衝突してもおかしくない、と噂されていた。

ロイドも、ようやく繋がった線に顎をつまんだ。

「なるほど……ガルシアが驚くわけだ。《黒月》と《銀》が結びついているとしたら、ルバーチェ商会としても脅威だろうし」

「しかしロイド君、その《銀》がどうしてイリア・プラティエを脅すのかね？」

イアンの疑問は、もっともだった。

劇団《アルカンシエル》が公演を中止しても、ルバーチェ商会には無関係である。

ましてイリアが、《黒月》や《銀》の恨みを買った様子もない。

すると椅子を軋ませて、イアンがゆっくり問いかけた。

「どうやら、まだ事件の全貌は見えないようだね？」

「ええ。しかし先生のおかげで、《黒月》の存在にも行き当たりました。ガルシアの動揺も理解できたし……だけどまだすべては繋がっていない……」

「だったら、訪ねてみてはどうだね、《黒月》も？」

「えっ……」

ロイドが聞き返すと、イアンは野太い笑い声を響かせた。

「そんなに驚く必要もないだろう。ルバーチェ商会に直接乗り込んだ君たちだ。もう一方の懐にも飛び込めば、また何かつかめるかもしれんよ」

だがその助言に、エリィが顔をこわばらせた。

「でも、相手は国際犯罪組織ですよ。ルバーチェ商会とは規模が違います」

「まあな。ルバーチェより危険なことはたしかだ」

ランディも自重を口にするほど、その勢力は広範に広がっている。

東方人という異文化のベールに包まれ、謎めいた部分も多い。

しかしロイドは、イアンの発言に、興味を覚えていた。

「先生、もしかして今のお言葉は……《黒月》にも話の分かる人物がいる、という意味でしょうか？」

「鋭いな、ロイド君。実は先日、黒月貿易公司の支社長と会ったばかりでね」

「黒月貿易公司の支社長……」

無論、ロイドたちも、それが犯罪組織《黒月》の隠れ蓑だと知っている。

すでにその支社は、クロスベル市内で開業しており、だからこそルバーチェ商会が対抗心を剥き出しにしているのだ。

イアンは、その時の対面を思い出しつつ、説明を続けた。

「その支社長は私に、クロスベルでの商取引について、法的に問題ないか、監査を依頼してきたんだよ。まあ、違法なところは無かったがね」

「どのような人物でしたか？」

「ふむ……一言で言うと、キレ者だね。まだ若いが、飄々とした言動で……一筋縄ではいかない頭脳派だと思う」

「なるほど……ガルシア同様、歯応えがありそうですね」

ロイドは、思わずそうつぶやいた。

巨漢で無頼なガルシアと、若き頭脳派の東方人……

その衝突は避けなければならないが、傍から見れば何とも対照的に思えたからだ。

だがロイドのつぶやきに、イアンが顔をほころばせた。

「……今の表情、ガイ君のことを思い出すな」

「……え……」

思わぬ名に、ロイドは身を固くする。

しかしイアンは、昔を懐かしむように笑っている。

「彼も、あえて危険だと知りながら、そこに飛び込む無鉄砲さを持っていたよ。やはり君も、その血を受け継いでいるのかもしれんな……」

「…………」

ロイドは、ふと考えた。
もしあの人がまだ生きていたら、この事件をどうやって捜査しただろうと。
恐らく、ロイドと同じように、ルバーチェ商会に乗り込んだだろう。
だとすれば、《黒月》にも足を向けたはずだ。
キレ者の頭脳派に会う理由は、それだけで十分に思えた。

＊＊＊＊

クロスベル市、港湾区。
昼間は、保養地ミシュラムに向かう船客や、釣りを楽しむ人々でにぎわう、穏やかな河岸地域である。
その港湾区に、東方風の建物がひとつあった。

『黒月貿易公司　クロスベル支社』

事情を知らぬ者には、開業したばかりの貿易会社にしか見えない。
だが最上階の支社長室には、不穏な空気が漂っていた。
「クロスベル警察、特務支援課が事情聴取に……？」

部屋の主は、その名を聞いてくすりと笑った。
「これは面白い……わざわざ来ていただけるとは望外ですね、ラオ？」
「しかし支社長……」
名前を呼ばれた側近は、表情を曇らせた。
「いいのですか？　いくらガキとは言え、警察は警察です」
「そう、そのクロスベル警察がね……私には物足りないのですよ」
支社長は、細い指を組んで微笑んだ。
「帝国派議員の飼い犬となって、おとなしく鎖に繋がれ、こちらに噛みつくどころか、吠えもしないような警察に興味はありません。ですが……」
彼の視線が、机上に積まれたクロスベルタイムズを指した。
一面には、『特務支援課、ルバーチェ商会の軍用犬密売を阻止』との見出しが大きく出ている。
その一文に、支社長は薄い唇を舐めた。
「どうやら彼らは、鎖には繋がれていないようです。吠えもするでしょうし、噛みつくこともあるでしょう」
「だったら……！」
「だから会うのですよ、ラオ」
静かに諭して、支社長は顎をしゃくった。

「お通ししなさい。いずれ会うことになる相手です。追い返しなどしたら、《黒月》の名に傷がつくというものですよ。ふふふっ……」

＊＊＊＊

「よくいらっしゃいました。黒月貿易公司、クロスベル支社を任されている、ツァオ・リーと申します」
現れた支社長は、ロイドたちに慇懃な笑みを向けた。
赤紫の髪を肩に垂らした、細面の青年。
尖った顎も、切れ長の目も、どこか女性的ではある。
だが笑顔ではいても、触れれば切れそうな危険さが匂っている。
それでもツァオ・リーは、優しげな声でロイドたちにソファを勧めた。
「さあどうぞ。ロイドさんに、エリィさん、それからランディさん、ティオさんでよろしかったでしょうか？」
「え、どうして俺たちの名前を……」
ロイドは、思わず動揺を表にしてしまった。
するとツァオは、新聞紙の束を手にして微笑んで見せた。
「いえね、実はクロスベルタイムズを読んで、以前からあなた方のファンになっていたんです

よ。それで失礼ながら、色々ってを使って、お名前を調べさせてもらった次第で」
「そ、そうでしたか……」
ロイドが冷や汗を拭く間に、ツァオは自ら茶の用意を始め、背を向ける。
その隙にエリィとランディが、素早く耳打ちした。
「……すごい先制パンチね、今の」
「……ビビんなよ、ロイド。しっかりやれ」
ティオも、聞こえぬようにそっとつぶやいた。
「……生半可な手は、通用しそうにありませんね」
「……ああ、まったくだ」
ロイドが姿勢を正すと、ツァオが優美に茶を配膳した。
「さて、本日はどのようなご用件で？　もしや、当社の営業活動に何か問題でもあったのでしようか？」
「いえ、実は現在、劇団《アルカンシェル》に関する事件を調べていまして……」
「《アルカンシェル》……ああ、あの有名な！」
「ええ……その捜査線上に浮かび上がった人物の名を、もしかしたらこちらでご存じではないかと伺った次第です」
ツァオは一口、静かに茶をすすった。
「で、その人物の名とは？」

「伝説の凶手、《銀》です」
ロイドは、ずばりと切り込んだ。
「こちらの貿易会社は、カルバード共和国の東方人街に本社がおありだとか……もし何か情報をお持ちでしたら、ご教示いただけませんか？」
余計な前置きは不要だ、とロイドは思っていた。
このような男に、遠回りで触れようとすれば、のらりくらりと逃げられてしまう。
ツァオも、ロイドの意図を察したのか、不敵な笑みを浮かべた。
「ふふふ……なるほど。たしかに《銀》の噂は聞いたことがあります」
「………」
「しかしロイドさん、まるで私どもが、その《銀》なる人物と関わりがあるかのような仰られようですね？」
ツァオは、ちくりと苦言を呈した。
だがそれも彼なりの、会話の楽しみ方だとロイドも悟っている。
「いえ、とんでもない。正直、我々としても東方人社会の情報が少なくて……それでこうしてお訪ねしたというだけなんです」
「ふふっ、そうでしたか。たしかに《銀》という名前は、東方人街では非常に有名です。仮面と黒衣で身を包み、素顔を見せず、狙った獲物は決して逃がさない……そしてここが肝心です が……どうやら不老不死という話なのです」

「不老不死ですって？」
エリィが思わず目を丸くすると、ツァオはまた茶を口に含んだ。
「そうなんですよ、お嬢さん。《銀》は、百年以上前……つまりカルバード共和国が民主化された直後から、記録に登場するようなのです。動乱期の最中、要人を次々と葬った謎の暗殺者としてね」
そこへランディも、慎重に口を挟んできた。
「ならやっぱり、ただの言い伝えで実在はしてないと？」
「……いえ、実在はします」
唐突に、ツァオの表情から笑みが消え失せた。
「東方人街の裏側において、《銀》はただの伝説ではありません。正体不明ではありますが、条件さえ合えばミラで雇える最高の刺客にして暗殺者……そう、認知されています。噂では、とある組織に重宝され、よく仕事を任されているそうですがね……」
言うとツァオは、ロイドに真っ直ぐ視線を突き刺した。
明らかに犯罪組織《黒月》と《銀》の繋がりを匂わせている。
さらにツァオは、わざとらしく思い出したように言った。
「ああ、そうそう。その《銀》ですが……噂では最近、東方人街から姿を消してしまったようですねえ。何でも、その組織から大きな仕事が入ったらしく、とある自治州に向かったのだとか……」

「ツァオさん、あなたは……」
「ふふ、どうしました、ロイドさん？　その組織が何なのか、私はまだ申し上げていません
よ？　その自治州がどこなのかもね」
　ツァオの顔に、再び笑顔が甦っていた。
　だがその笑みはさっきまでとは違い、狡猾かつ悪辣。
　エリィも、ランディもティオも、その冷ややかな殺気に呑まれている。
　しかしロイドは、腹をくくって彼に応じた。
「つまりその組織は、《銀》を使って、どこかの自治州の邪魔者を消そうとしている。たとえ
ばその土地の英雄的人物……クロスベルであれば、劇団《アルカンシェル》のイリア・プラテ
ィエのような人を……」
　だがツァオは、両手を広げて首を横に振った。
「さあ、どうでしょう？　それでその組織が潤うとも思いませんね」
「と言いますと？」
「土地を奪う時、その土地に咲いている花まで摘み取る必要はありません。その花にたかる、
害虫だけを駆除すればいいのです」
「分かり易い比喩ですね、ツァオさん」
　たしかにツァオの言う通りである。
　もしも《黒月》がクロスベルの利権を狙っているなら、莫大な財貨を稼ぐイリア・プラテ

ィエを殺すはずがない。
　今のまま公演を続けてもらって、その旨味だけを横取りするはずだ。
　邪魔なのは、ルバーチェ商会だけのはず……
　そう悟ったロイドに、ツァオは少し表情を和らげた。
「私としても不思議ですよ。なぜ劇団《アルカンシェル》と《銀》が繋がるのか……私には
るで接点が見えないのですがね」
「なるほど……いや、非常に参考になりました」
　言って、ロイドは席を立った。
「またこちらにお伺いすることもあるでしょう。次は、別の事件かもしれませんが……」
「ふふ……そうかもしれませんね」
　ツァオも立ち上がって、ジャケットの乱れを直した。
「しかしロイドさん、先ほども言ったように、私があなた方のファン……というのは、事実
すよ」
「…………」
「今回の一件……なかなかに興味深い。いちファンとして、あなた方がどのように解決して
れるか……お手並み拝見といきましょうか」
　ツァオは、また笑みの色を複雑に変えて、ロイドたちを見送る。
　たしかにイアンの言う通り、一筋縄ではいかぬ男であった。

川面から、涼しい風が吹きよせる。
行き交う船が見える河岸で、ロイドたちは思案顔を寄せていた。
「あの支社長、つかみどころのない男だったけれど……」
ロイドは、風になびく髪を整えながら口を開いた。
「意外に腹を割って話してくれたと思う。彼の言葉をそのまま解釈するなら……《銀》という暗殺者はこのクロスベルに潜入しているようだな」
ランディも、緊張から解放された様子で嘆息した。
「たぶんそうだろうな。けど、あの支社長がイリアさんを脅迫したとも思えなかったぜ。もしそうなら、《銀》との関係を仄めかしたりしねえだろ」
「たしかに……むしろ彼自身も、疑問に思っているようだったなあ」
ロイドが同意すると、ティオが青空を見上げた。
「……ということは、《銀》は《黒月》とは関係なく、単独で動いているのでしょうか？」
「だとしたら、捜査も手詰まりになりそうだ。《銀》が動いている理由を知るには、直接本人に訊くしかないからなあ」
ロイドは、他にも《銀》に繋がりそうな人物を考えた。
しかしもはや自分たちの捜査範囲に、そのようなつては無い。
勿論、ツァオ・リーが真実を知りながらとぼけている、という可能性もある。

だが彼の口からそれを吐かせるのは、とてつもない困難に思えた。
と、エリィが突然、力無い声でつぶやいた。
「もう、私たちの仕事ではないかもね……」
「え……」
不意の諦観に、ロイドたちは一斉に顔を上げる。
けれどエリィは、熟慮を重ねた表情で言葉を連ねた。
「どうやら《銀》は、私たちにどうにかできる相手じゃないらしいわ。逮捕どころか、居場所を突き止めることすら難しいわよ……」
「それはそうだけど……」
「だったら今回は……たとえば捜査一課に任せた方がいいんじゃないかしら？」
ロイドも、一応それを考えて腕組みした。
「たしかに捜査一課なら、人員も経験も豊富だ。情報だって、うちより持っているだろう。しかしたら《銀》についても何か知っているかもしれない。けど……」
「ああ、果たして動いてくれるかねえ？」
ランディも半ば諦めムードでつぶやいた。
「あちらさんは、もっとデカい事件を追っかけて忙しいはずだ。政治汚職や薬物捜査……いくらスター女優の危機でも……」
しかしエリィは、しっかりと首を横に振った。

「ううん、イリア・プラティエという存在は、クロスベル市にとってとても重要よ。もし彼女に危害が加えられたなら、クロスベル警察にとっては汚点になるはず」
「そうか……」
「だから捜査を依頼すれば、必ず動いてくれるわよ。警察の威信にかけてもね」
エリィの言葉は、いつになく熱っぽかった。
そして彼女の言葉を裏付けるように……
「その通りだ」
いつの間にか、ロイドたちの傍に、理知的な顔立ちの男が立っていた。
仕立ての良いスーツに身を包み、身のこなしには寸分の隙もない。
眼鏡の奥からは、見下すような視線。
その男に、ロイドは見覚えがあった。
「あ、あなたは……捜査一課の……」
「アレックス・ダドリー捜査官だ」
警察本部の若きエースと噂される男は、仏頂面で名乗った。
しかし見た目以上に老成した感があり、とっつきにくい雰囲気を醸し出している。
さらにダドリーは、ロイドたちに苦々しい表情を向けた。
「まったく、どういうつもりだ？　お前たちのような小僧どもが、いきなり《黒月》に踏み込むとは……いったいどんな事件を追っている？」

「それは……」
「《黒月》から得た情報も一切合切、ここで報告しろ」
その命令口調に、ランディが眉を寄せた。
「ちょっと待てよ、いきなり図々しいじゃねえか。俺たちも決して無謀に動いているわけじゃあ……」
「図々しいのはどっちだ。我々一課は、一月以上前から《黒月》をマークしていたんだぞ。そこへ何の断りもなく、割って入ったのはお前たちだ」
「え、マーク……？」
動揺するロイドの横から、ティオが問いかけた。
「……もしかして、捜査一課さんの方でも《銀》を？」
ダドリーは不承不承、その問いを肯定した。
「……そうだ。《黒月》が、ルバーチェ商会に対抗するため、凄腕の暗殺者を雇った……その情報を入手して以来、我々は《黒月》を監視してきたのだ。その苦労をフイにするような行動は慎んでもらおうか」
だがランディは、なおもそれに抵抗した。
「言ってくれるじゃねえか。だったら《黒月》だけじゃなく、ルバーチェ商会も監視したらどうなんだ？　ルバーチェだって軍用犬を解き放って、みんなに迷惑を……」

「ふっ、まだ分かっておらんようだな。一課とて、ルバーチェの動きは監視している。お前たちが関わった軍用犬事件についても、ある程度は事前に掴んでいたのだ」

ロイドは、その言葉に怒気を露わにした。

「だったらどうして、すぐに捜査しなかったんですか？　あのまま行けばマインツ鉱山の採掘権は……」

「あの程度の事件で動いていては、キリが無いというだけだ」

「あの程度……！」

ティオも声を上げたが、ダドリーは頑なに表情を変えなかった。

「そう、あの程度の事件だ。殺人が起こったわけでもなし、採掘権はマインツ鉱山町だけの問題だ。一課が扱う事件に比べれば、小さないざこざにすぎん」

「ダドリーさん、あなたは……」

「我々捜査一課の任務は、この街の秩序を保ち続けることだ。犯罪組織や外国の諜報機関から可能な限り社会を守る……ルバーチェの軍用犬事件は、そのような重要案件より脅威度が低かった、そういうことだ」

たしかにそのような思考は、ロイドにはない。

事件に優先順位を付けて捜査を行うことも疑問に感じる。

しかしエリィは、また諦観を込めてつぶやいた。

「やっぱり……脆いんですね、クロスベルの平穏と繁栄は……まるで薄皮一枚の上にかろうじ

て成り立っているみたいに……」

その表情には、何かを胸の内に抱え込み、思い詰めたものがある。

ダドリーも、いくぶん口調を緩めて続けた。

「ルバーチェは帝国派議員と、《黒月》は共和国派議員と関係を深めている。ある意味、両国の代理戦争というわけだ。おいそれと手が出せる状況ではない」

「しかしそこに《銀》という切り札が投入された……ということですか」

ロイドの推測に、ダドリーは深くうなずく。

「そういうことだ。我々としても慎重に事態を見守っている。余計に動いて暴発すれば、こクロスベル全体の危機に飛び火しかねん」

「けれど黙って見ているわけにも……」

「ならばこの状況を、お前たちだけでコントロールできるのか？　《黒月》に《銀》、そしてバーチェ商会、そしてその背後にある両大国の思惑を？」

「それは……」

黙して、ロイドは拳を固く握る。

彼らにとっては、あまりに高く、険しすぎる壁であった。

第五章　星無き街で

「手を引くしかないか……」
ロイドは、劇団《アルカンシェル》の劇場を見上げた。
夕陽を浴びた建物は、オレンジ色に染まっている。
その煌めきから目を逸らすようにして、エリィがつぶやいた。
「仕方ないわ、ダドリー捜査官の言う通りだもの。イリアさんの警護は……」
「捜査一課に任せる……しかないんだな」
ロイドが独白すると、ランディもティオも沈黙した。
彼らの前にそびえ立つ壁はあまりに高く、強固だった。
それに対して、『やればできる』という思いこみだけで立ち向かっても、到底イリアを守れるとは思えなかった。
ロイドは、踏ん切りをつけるように大きく深呼吸した。
「行こう。イリアさんに事情を説明しないと……警護は捜査一課に代わるって」
「そうね、話は通しておきましょう」
「ふがいねえぜ、我ながらよ……」

「……ですが、イリアさんが捜査一課の警護を許可するかどうか……」
仲間たちが、それぞれの思いを口にしていると。
劇場内から、杖をついた白髪の老人が現れた。
老人とは言っても、足取りは闊達。
しわ深い顔には、慈悲深い瞳が輝き、身のこなしにも気品があふれていた。
背後には、秘書らしき若い男を従え、劇場の階段をゆっくり下りてくる。
その姿に、ロイドはどこかで見覚えがあると思ったが、記憶の糸をたぐり寄せる前に老人が、こちらに視線を向け……
「……おお、エリィ！」
「エリィお嬢さん！」
若い男と共に、にこやかに手を振り、こちらへ近づいてくる。
エリィも意外そうに、二人へ歩み寄った。
「おじいさま……アーネストさん……」
「え……おじいさまってことは……」
ようやく、ロイドも思い出した。
クロスベル市長、ヘンリー・マクダエル。
老齢ながらも、この厄介な街を統轄する人物である。
その市長も、孫娘を前にして穏やかな笑みを浮かべていた。

「エリィ……元気でやっているようだね。仕事の方は頑張っているのかな？」

「は、はい……まだ新人なので至らないところもありますが……マクダエル家の名に恥じぬよう、頑張らせてもらっています」

エリィは、身内だというのに、妙にかしこまっている。

市長は、そんな孫娘を、あたたかい声で労った。

「そうかね……前にも言ったが、家のことは気にしなくてもいい。それより、そちらの諸君は、同僚の方々かな？」

「は、はい」

エリィに視線を送られ、ロイドは一歩前に出た。

「はじめまして。クロスベル警察、特務支援課、ロイド・バニングスと申します」

「同じく、ランディ・オルランドっす」

「……ティオ・プラトーです」

市長は、不揃いな仲間たちにも、丁寧に一礼した。

「孫娘がいろいろ世話になっているようだね。どうかよろしく頼むよ」

「いえ、そんな……世話になっているのは、我々も同じですから……」

ロイドも、恐縮して頭を下げる。

今さらながら、この老人がとてつもなくタフに思えた。

マクダエル市長は、帝国派と共和国派、双方の派閥と距離を置く中立派だ。

そういった立場に身を置きつつ、市政の舵取りを行うのは至難の業である。

この市長のおかげで、クロスベルは微妙なバランスを保っているのだ。

するとアーネストと呼ばれた秘書が、心配そうに進み出た。

「しかし、エリィお嬢さん……たまには御実家にも顔を出された方が……」

「……そ、そうね。でも、せっかく自立したのに頼るのもどうかと思って……」

「そんな。お嬢さんは、もっと……」

だが、言いかけたアーネストを、市長が笑顔で制した。

「いいんだ、アーネスト君。それだけエリィの決意も固いのだろう」

「は、はい……」

アーネストが退くと、市長は再び孫娘に視線を戻した。

「エリィ、お前が選んだ道だ。納得のいくまでやってみなさい」

「はい……おじいさま」

「公私混同はできんが、出来るかぎり協力はさせてもらうよ。ではまたな……」

そう言い残して、市長とアーネストは、待たせていたリムジンに乗り込んだ。

車が見えなくなると、ランディが深いため息を吐いた。

「やれやれ……話には聞いてたが、お嬢って本当にお嬢様だったんだな？」

「そんな……私は別に……」

「しかしなんでまた、市長は《アルカンシェル》に来てたんだ？」

「そうね……今回の新作は、市の創立記念祭と併せて公開されるそうだから、たぶんその打ち合わせじゃないかしら？」
エリィは言って、劇場へと歩き始める。
妙にぎこちない再会だと、ロイドは気づいていた。

「伝説の暗殺者……まさかそんな危険な奴だなんて……」
アバン劇団長と、バルサモ支配人が顔を見あわせる。
稽古を終えたばかりのリーシャも、衣装のまま、楽屋で驚愕した。
「本当にそんな人が……脅迫状を送ってきたんですか？」
「まだ分かりません。しかし可能性は高いです」
ロイドは事情を説明し終えると、イリアに視線を向けた。
主演女優は、ロイドたちの話を不満そうに聞いている。
「イリアさん……」
「嫌っ。無理っ」
「率直に申し上げて、公演を中止することはできませんか？」
「だめっ。そんなの、ありえないっ」
イリアも、太陽の姫の衣装を着たまま、そっぽを向く。
「たとえ劇場を爆破する、って威されても、あたしは舞台から降りないわよ」

「しかし、この脅迫状は、もう悪戯とは思えないんですよ」
「…………」
「もし公演を行うなら、うちの捜査一課の警護を受けてください。面目ない話ですが、我々特務支援課だけでは対処しきれないんですよ」
イリアは、しばし黙って。
やがて仕方ないといった顔で、うなずいた。
「……ま、背に腹は代えられないわね。で、その捜査一課の担当ってどんな人？」
「えーとですね……見るからに有能そうで、エリートといった感じの……」
「うげっ、勘弁して欲しいわね」
イリアは、一瞬がくっと肩を落としたが、すぐに表情を引き締めた。
「だけど、公演続行だけは譲れないわ。たかが脅迫状一枚で幕を下ろしたら、あたしたち《アルカンシェル》の名折れよ、そうでしょ劇団長！」
「ま、まあそうだね」
アバン劇団長も、イリアの熱さに、たじろぎつつ言った。
「イリアだけじゃなく、うちの劇団員みんな、そう思ってるんじゃないかな。誰の指図も受けず、自由に歌い、踊る……それがみんなの信条だからね」
「そうよ！　劇団長、いいこと言うわね！」
イリアは、ぽーんとアバンの肩を叩く。

それを見てランディは、手のひらに顎を載せた。
「まったく……皆さん、舞台の魅力に取り憑かれちまっているな」
「ふさぎ込まれるよりは、ずっといいけどね」
ロイドも、苦笑しながらうなずいた。
するとリーシャが、おずおずと口を開いた。
「で、でも、ロイドさんたちはこれから……」
「ああ……申し訳ないけど、捜査は一課に引き継ぐことになります」
「そ、そうでしたか……」
「すみません、こちらも力不足で……」
「いいえ、そんな……」
リーシャも、力無く肩を落とした。
思えば彼女が、最初にロイドたちに支援を要請してくれたのだ。
リーシャ自身も、ロイドたちにすまないと思っているのかもしれない。
それを察したのか、ランディが笑顔を向けた。
「気にするなよ、リーシャちゃん。それよりプレ公演、頑張ってくれよな！」
「……は、はい、ありがとうございます」
リーシャは、とても嬉しそうに微笑んだ。
しかしロイドは……

「えっ、プレ公演って？」
「なんだ、知らないのか？　情けない奴っ！」
ランディは顔をしかめて、壁に貼られた公演のポスターを指した。
「《アルカンシェル》は、新しい本公演を行う前に、必ずお披露目のプレ公演をやるんだよ。ほら、そこに書いてあるだろ？」
「あ、ほんとだ……」
「そうなんです。当日は、マスコミや後援者の方々が大勢、招待されるそうで、今から緊張しちゃって……」
ロイドが気づくと、リーシャもうなずいた。
「へえ、そうだったのか……あ、もしかして、さっき市長が来たのも？」
ロイドが問うと、劇団長も微笑みながら髭をしごいた。
「ああ、主賓としてお迎えする予定だよ。なにしろマクダエル市長には、創立記念祭と併せて劇団を後援していただいているしねえ」
その名を聞いた途端……
またエリィが、目を伏せた。
それが何かを堪えるように見えたのは、ロイドの錯覚だったろうか。
日の落ちた中央広場に、明かりが灯っていく。

ロイドは、特務支援課への階段を下りながら、ため息混じりにつぶやいた。
「……もう、何もできることはないのかな……俺たちに……」
「…………」
エリィは黙り、ランディは思案に暮れた。
「そうだな、このまま日常業務に戻るのもな……」
ティオも、魔導杖で石畳をこつこつとつつきながら、視線を伏せる。
「……リーシャさんの期待に、応えたかったですね」
「……ああ」
力無く返事をして、ロイドは特務支援課の前にたどり着いた。
すると建物の前に、見覚えのある若い男が立っている。
その姿に、エリィがはっと我に返った。
「……アーネストさん……！」
「ああ、お嬢さん！　良かった！　本当にここでいいか、迷っていたんですよ」
市長の秘書は、安堵した顔で微笑んでいる。
しかしエリィは彼に駆け寄ると、唇を固く結んだ。
「……もしかして私を訪ねて来られたんですか？」
「ええ、さっき劇場の前で会った時、気になったものですから」
「気になる？　私がですか？」

ロイドたちが遠巻きに見つめる中、アーネストはエリィの顔を覗き込んだ。
「そう……なんだかとても、元気がなかったように見えて」
「いえ……ただちょっと、いろいろ難しい事件に当たっただけです」
エリィは、それだけ言って沈黙する。
アーネストも、しばらく迷っていたようだが、思いきって口を開いた。
「……単刀直入に言いましょう。お嬢さん、警察を辞めて、マクダエル市長の元に戻って
せんか？」
「……！」
エリィが驚愕を呑み、ロイドたちも硬直する。
だがアーネストは、エリィを諭すように言葉を連ねた。
「いろいろお考えの上、警察に入られたことは承知しています。ですが、そんな疲れ
て……迷った目をして……本当に警察が、あなたの進むべき道なのですか？」
「そ、それは……」
「お嬢さんが、今の市政に絶望しているのも知っています。でも、マクダエル市長の
判っていただけませんか？」
アーネストは、あくまで優しげな声で告げた。
「半年後には市長選があります。マクダエル市長ご自身は、引退されるおつもりです
託せそうな候補者がいなくて困っているんです」

「…………」

「そんな今、お嬢さんが側に居てくれたら、どれほど市長も心強いことか」

「…………」

「今から政治の世界に戻って、マクダエル市長の後継者として勉強を始めるつもりはありませんか？」

エリィは、ずっと黙っている。

するとアーネストは、ロイドたちにも視線を向けた。

「すみません。急にこんなことを言いだして……」

「いや、いいんですよ、アーネストさん」

「けれど、どうしてもお嬢さんに伝えておきたかったんです。マクダエル市長を尊敬する者として……」

アーネストは、ひたすら恐縮して、エリィに視線を戻した。

「もちろん、お嬢さんの人生です。決めるのはお嬢さん自身……ですが、本当にそれが正しいのか、今一度、考えてくれませんか？」

「……少し、考えさせてください」

エリィは、小さく言うと、特務支援課のドアを押し開けた。

「みんな、ごめんなさい……少し疲れたから、先に部屋で休ませて」

「あ……ああ」

そしてエリィは、そのまま二階へと上がっていく。

ロイドは、気まずい空気に抗うように、声を搾り出した。

「……いろいろと、事情がおありのようですね」

「ええ……名家マクダエル家が背負う、宿命のようなものでしょうか」

だがランディとティオは、少しふくれてアーネストを見つめた。

「ま、あんまりお嬢のこと、いじめないでやってくれよな」

「……なんだか、エリィさんを取られそうな気がしています」

「ははっ、別にそんなつもりは無かったんですが……」

アーネストも謝意を示しつつ、エリィがいるであろう二階を見上げた。

「ただお嬢さんは、元々、政治家志望だったんですよ」

「なんとなくは聞いています」

ロイドも、彼女の部屋を仰いで言った。

「留学から帰ってきた時、政界入りすると思われていたようですね」

「ええ、市長の後継者となるべく、各国に留学して、国際的な政治感覚を養ってきたはずなんです。それが、帰国したと思ったら、いきなり警察入りを志望して……」

ランディも、うらぶれた自分たちの建物を眺めて苦笑した。

「たしかに、何でこんな所にマクダエル家のお嬢様が……って思ったけどな」

「警察の仕事も大切だと思います。けれどお嬢さんには……彼女にしかできない仕事もあるん

です。私としては、できればそれを選んでほしい」
アーネストは言って、ロイドたちに一礼した。
「お嬢さんが結論を出すまで、しばらく見守ってくれませんか？　このまま続けたとしても……あんな風に迷いを抱えたままでは……」
「……迷い、ですか」
ロイドとて、この状況に迷いを感じているのは同じだった。
しかしエリィは特別に……

夜風が、いつもより優しく吹いていた。
すり鉢の底のような特務支援課でも、屋上に上ればクロスベルの夜景が見える。
きらめく明かりは遠くまでたなびき、街の喧噪も途絶える気配はまだ無かった。
ロイドは、その屋上に続くドアを静かに開けた。
踏み出せば、屋上の端にはエリィが背を向けて立っている。
夜風に髪をなびかせていた彼女は、気配に気づいて振り返った。
「あ……ロイド……」
「……うん」
「どうしてここに……？」
「いや、部屋をノックしたら返事がなかったから、ここかなって……」

「……そう」
「……そっち、行っていいかな？」
「……いいわ」
ロイドは、エリィと並んで夜景を眺めた。
遠くには、そびえ立つクロスベル国際銀行ビルの灯りが煌めいている。
エリィは、その夜景を見ながら静かにつぶやいた。
「……多分、大陸全土を見回しても、クロスベルほど夜景が綺麗な街は、他にないんじゃないかしら」
「そうなのかい？　俺はあまり余所の国のことは分からないから」
「ええ……だけど……街の明かりが増えれば増えるだけ、星の光は見えなくなる……女神の慈愛の証たる、清らかな星の光は……」
そう言ってエリィは夜空を仰ぎ、ロイドも視線を同じくした。
たしかに彼女の言うとおり、あまり星は見えない。
郊外まで出れば、満天の星空が見えるのだろうが、まるでクロスベルだけがその恩恵から除外されているような気さえした。
「……今日は、いろいろあったわね」
エリィが、ぽつりと言った。
「ルバーチェ商会……《黒月》……捜査一課とおじいさまの市政……みんな、この街の闇に関

わっているわ。でもすべて、クロスベル自治州の真実よ」

「エリィ……」

「クロスベルは、帝国と共和国の狭間で生かされ、誇りも持てず、嘘と欺瞞にまみれてる……でも諸外国から集まる富によって、こんなにも繁栄している……だからみんな、諦めてるのよ、この街の闇を……」

ロイドは、天を向くエリィの横顔を見つめた。

「エリィは、それを……諦めたくないんだね？」

「……父と母がいたの」

「え……？」

「ごめんなさい、急に……それにこんな言い方すると亡くなっているみたいだけど……二人とも今も元気よ。もっとも離婚して、それぞれ共和国と帝国で暮らしているけど」

「そうだったのか……」

エリィは、まだ夜空を見上げながら続けた。

「父は元々、共和国の人だったの。この街で母と出会って……マクダエル家に入ることで政治家としての道を志した」

「………」

「そして議員になってすぐに、この街の歪んだ現実に気づいたのよ。正義感の強い人だったから何とかしたいと思ったんでしょうね。何年もかけて、粘り強く、様々な改革案を打ち出して

いった。でも……」

そこまで言って、エリィは目を伏せた。

「……結局、父の改革案は潰された。帝国派、共和国派……どちらからも拒絶されて」

「………」

「信じていた同志にも裏切られ、友人も無くし、政敵には嘲られて……それで父はクロスベそのものに絶望してしまったの。議員も辞して、私と母を残して共和国に帰る道を選んでしった……」

ロイドは、じっとエリィの言葉に耳を傾けていた。

視界に入る夜景は、まだ眩しく、美しい。

だがエリィは、この夜景に潜む闇をも見つめていたのかもしれない。

彼女の悲しみにそっと触れるように、ロイドは小さな声で訊ねた。

「それで、お母さんは……？」

「母は……父のいないクロスベルに住むのが辛くなったみたいで……親戚のいる帝国に身を寄せているわ。そして私は……祖父に引き取られることになった」

「………」

「……私が政治の道を志そうと思ったのはその時からよ。別に、父の仇を取ろうとかそういうつもりじゃなかったけど……納得いかなかったの。あんなにも幸せだった家族が、どうして壊れてしまったんだろうって」

そしてエリィは、ロイドを真っ直ぐ見つめた。
「でも、政治を学べば学ぶほど、クロスベルの置かれている状況は、困難だって分かったの。結局は、帝国と共和国……両大国の重力に、あらゆる利害が引き寄せられ、正義は圧し潰されてしまう。それで私……壁にぶつかったような気がして……」
「……壁か」
ロイドも、その比喩に納得した。
クロスベルの現状を思うに、必ずその概念が立ちはだかる。
だがエリィは、その壁の本質を、もっと深く理解しているようだった。
「ねえ、ロイド。クロスベル自治州の政府代表って誰か知ってる？」
「それは……マクダエル市長じゃないのか？」
「ううん、正確には『クロスベル市の市長』と『自治州議会の議長』の二人よ。つまり今なら、おじいさまと帝国派のハルトマン議長が、クロスベル政府の共同代表なの」
「そうか……自分が暮らしている場所なのに、そんなことも知らなかったよ。だけど、どうしてそんなややこしい体制になってるんだ？」
するとエリィは、捨て鉢な声でつぶやいた。
「決まってるわ。同格の代表が二人いれば、政治改革が起こりにくいからよ」
「そんな……いや、でも……」
「トップが二人いれば、どちらかが改革を起こそうとしても、もう片方が必ず足を引っ張る

……これはもう必然なのよ」
「だけどそれを決めたのは……」
ロイドも、ようやく思い至った。
クロスベル自治州の法律を定めたのは、クロスベルの人間ではない。
七十年前、帝国と共和国の法律家たちが、協議の上、作成したのだ。
つまりクロスベルは、今なお他国の思惑に縛られている。
エリィも、その忌々しいくびきを思って、唇を噛んだ。
「まるで大国の呪いよ。クロスベルは自由を奪われ……政治的に自由を追い求めた人は、そ
呪いに蝕まれてしまう……だから私、父や祖父とは違うやり方で、自由を見つけようと思っ
の」
「それで……警察を選んだのかい？」
「ええ……政治とは別の視点で、この街の歪みを観察すれば……いずれクロスベルの改革を
現する手がかりになるんじゃないかって思ったの。だけど……」
エリィは、夜風に舞った髪を手で撫でつけた。
「……壁は、想像以上に高かった。それにぶつかって、私は途方にくれてしまった」
「エリィ……」
「……やっぱり何も変えられないのかなって……それで私……」
しばし、沈黙が流れる。

次第に夜景の灯りが少なくなり、夜空に星々が戻ってきた。

ロイドは、その星明かりを浴びると、ゆっくり微笑んでみせた。

「……いいじゃないか、ぶつかっても」

「……え？」

「一度も失敗せずに、やり遂げる必要はないだろ？　ぶつかったら立ち止まって、力を蓄えて、また挑めばいいんだ」

「一人でぶつかるのが無理なら、力を合わせればいい。今日乗り越えられなかった壁は、明日には乗り越えられるかもしれない」

「あ……」

言ううちに、ロイドの胸にも何かがこみ上げてきた。

それは無数の壁に押し潰された、自分の思い。

堪えていた熱さが、今になって甦ってきた。

「だから、俺ももう一度、ぶつかってみようと思う。イリアさんを巡る事件に」

「えっ──　でもこれ以上、私たちができることって……」

エリィも、意外な言葉に口元を押さえている。

しかしロイドは、沸き立つ気持ちを冷静に言葉に置き換えていった。

「エリィが政治とは違うやり方を探したように……俺たちも通常の警察とは違うやり方で事件が追えるんじゃないかな」

「ロイド……」

「いや、俺たちならできるはずだよ。なにしろ特務支援課は、まさに違うやり方のために作れた部署なんだから」

「あ……」

エリィも、今さらながら自分たちの立場を思い出したようだ。

うなずいてロイドは、声に力を込めた。

「たしかにクロスベルの呪いは、俺たちにもまだ解けない。でも小さな壁をひとつずつ乗りえれば、いつか大きな壁も乗り越えられるんじゃないかな？」

「………」

エリィは、不思議そうにロイドを見つめている。

まるで信じられぬものを見たように、彼女は静かに問いかけた。

「……どうして、そんなに前向きでいられるの？」

「えっ？」

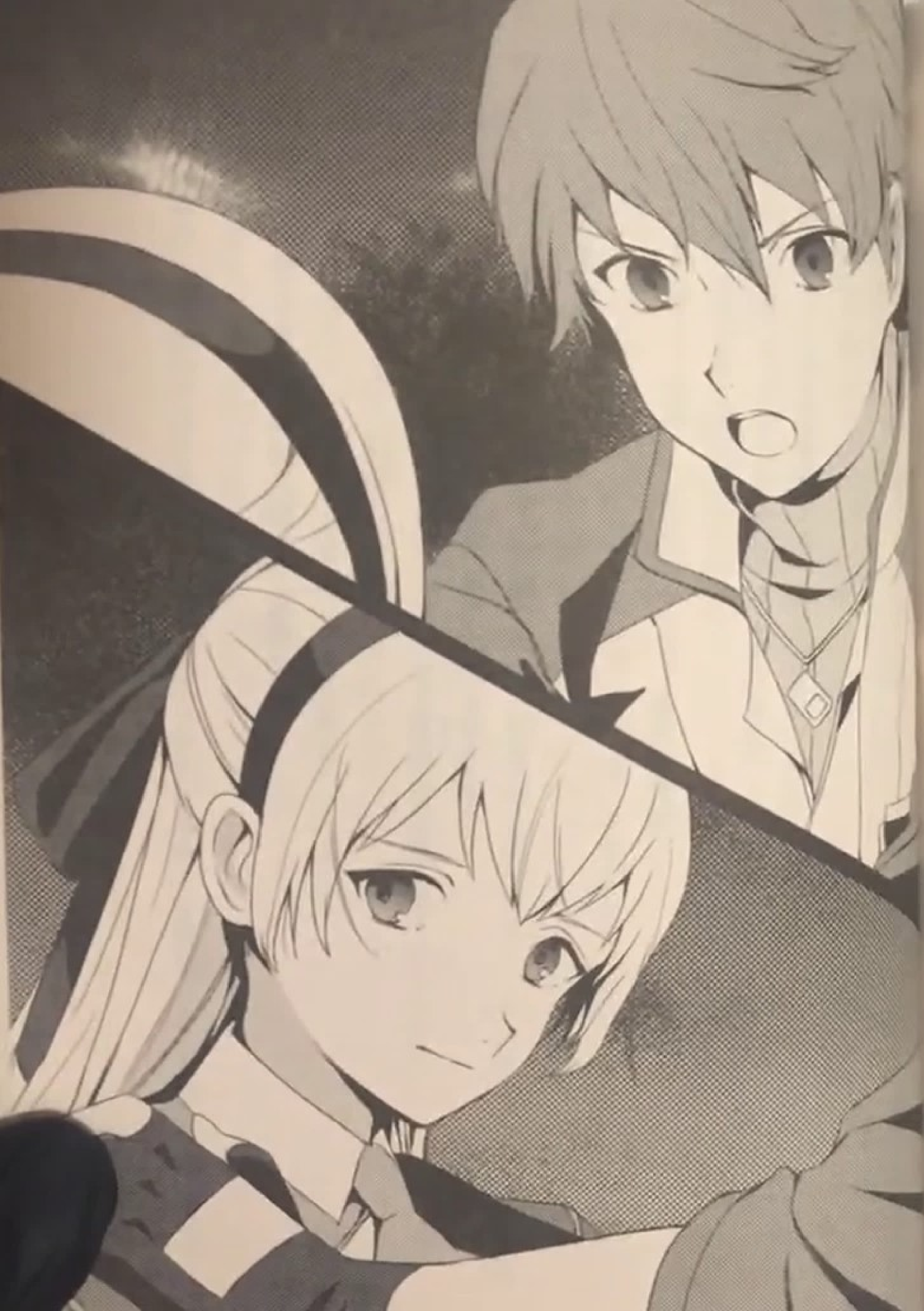
「たぶんロイドも……いろいろな悩みを抱えているのに……どうして……」

そしてエリィは、疲れたように笑って見せた。

「……でも私は……あなたほど強くないみたい」

「エリィ……」

「……壁にぶつかることに、もう疲れたのかもしれない……このままじゃ、みんなと力を合



せることも無理……だったらいっそ……」
そのまま、エリィは言葉を続けようとした。
だがロイドは……
「……あっ……」
かすかに、エリィが声を上げる。
ロイドは、彼女の両肩に手を置き、指先に思いを込めた。
「俺には……俺たちにはエリィが必要だ」
「ロ、ロイド……」
「射撃の腕、交渉センス、政治経済の知識……この街を相手にするには、エリィの力が必要なんだよ。だけどそんなことより……」
ロイドは一瞬、口ごもって。
それでも躊躇を振り捨てて、エリィに告げた。
「……俺は、エリィに傍にいてほしいんだ」
「え……」
エリィは、困ったように視線を外す。
けれどロイドは、かまわずに思いを口にした。
「不揃いな俺たちだけど、ようやく信頼し合えるようになってきたじゃないか。そんな仲間がいるんだ。絶望するには、早すぎるよ」

「疲れたなら、休めばいいよ。俺たちに甘えてもいいよ。エリィ、君は……一人じゃないんだから」

「……あ……」

ロイドは、そこまで言って、腕の力を緩めた。

つい気持ちが高ぶって、エリィを支える力が強まっていたらしい。

しかしエリィは、優しい微笑を取り戻していた。

「一人じゃない……か。そうね。そんな当たり前のことも、忘れてたのかも」

そして再びロイドを見つめ、嬉しそうに瞳を輝かせた。

「……ありがとう、ロイド。私の問題はすぐには解決しないけど……それでも少し、気が楽になった気がするわ」

「そ、そっか……」

「それにしても……ふふっ、少しびっくりしちゃったわ」

「え、びっくりしたって？」

ロイドが戸惑うと、エリィは急に顔を赤らめた。

「だ、だって……私が必要だとか、傍にいてほしいとか……なんだか、その……告白でもされているのかなって……」

「……あ……」

今頃ロイドは気づいて、エリィから手を離した。

「い、いや！　違うんだ、別にそんな意味じゃ……！」

「え……私のこと、そこまでは好きじゃないってこと？」

「そ、そうじゃなくて……エリィ、俺のこと、からかってるだろ！」

するとエリィは、ようやくいつもの笑顔を取り戻した。

「ふふっ……ちょっとだけね。でもロイド、気をつけた方がいいわよ。あなた、天然っていうか……すごく女たらしな所があるから」

「なんだよそれ！　ランディならともかく、なんで俺が……」

「……自覚がないところがまた困るのよね……でも、ありがとう。あなたの言葉だけで、こんなに気分が変わるなんて思わなかった……」

そう言うとエリィは、すっとロイドから離れ。

髪の香りをたなびかせて、屋上の扉に向かった。

「おかげで今夜は、ゆっくり休めそうよ。おやすみなさい、ロイド……」

「ああ、おやすみ……」

「また明日ね……」

エリィは、ロイドに背中を向けて、屋上から去っていく。

その後ろ姿に、もう迷いや弱気は見えない。

ロイドにとっては、かけがえのない、頼もしい仲間の背中に思えた。

＊＊＊＊＊

深夜。港湾区。
黒月貿易公司のビルには、まだ明かりが灯っている。
さっきから支社長室では、ツァオ・リーが報告書に目を通していた。
「ふむ……ルバーチェ商会も面の皮が厚いことだ。あれだけ叩かれておきながら、まだ軍用犬を調達するとは……」
ページをめくりながら、若き支社長は独白する。
「それではこちらもアルタイル市に送り込んだ人員を呼び戻しますか……長老殿の力を借りれば後が怖いですし……奴らに対抗するには、自力でどうにかするしかない」
言ってツァオは、眼鏡を外し、疲れた目元を揉んだ。
「やれやれ……人員不足も頭が痛いですが、これで《銀》殿がもう少し協力的だと助かるんですがねえ……」
すると、部屋の隅から唐突に。
「……契約分はきちんと働いているつもりだがな」
感情を押し殺した声が聞こえてきた。
しかしツァオが、声がした方へ視線を向けても、観葉植物があるだけだ。

だがその植物の陰から……ふわり、舞うように人影が現れる。
ツァオは、眼鏡をかけ直して、微笑んだ。
「おや、いらしてたんですか。これは失言」
「ふっ……わざと聞かせたのだろう？　相変わらず食えない男だ」
陰から現れた人物は、低く声を響かせる。
ツァオにも動揺する素振りはなく、微笑を維持していた。
「ところで今宵は、どのようなご用件で？　うっとうしいルバーチェの軍用犬を、始末する
になっていただけましたか？」
「たかが軍用犬なぞ、お前の部下でどうにかできるだろう。私が相手をするのは、ガルシア
ロッシを始めとするルバーチェの主力のみ……そういう契約だったはずだ」
「つれないことを仰る。それが凶手のプライドですか？」
「そのようなものだと理解しておけばいい」
「なるほど……しかしクロスベル警察もなかなか優秀です。わざわざ劇団《アルカンシェル
を威すなど、いったい何をお考えで？」
すると陰から現れた人物は、かすかな苦笑を漏らした。
「今はまだ言う必要もあるまい。それより特務支援課、どう感じた？」
「おっと、今宵の用件は、彼らでしたか？　しかし何故……」
「いいから聞かせろ。お前の話は、まだるっこしくていかん」

ツァオも肩をすくめて、破顔した。
「そうですね……興味深い若者たちでしたよ。特にリーダー役のロイド・バニングス捜査官……勘も悪くないようですし、なかなか好みのタイプです。何より、クロスベルの鎖に繋がれていないところがいい」
「他には？」
「マクダエル市長のお孫さんは、相当な政治センスをお持ちのようですな。参謀役と言っていいでしょう。エプスタイン財団の娘さんは、特殊な資質を持っているようです。赤毛の彼は……我々と似たような匂いがしますね」
「……なるほど」
「しかし……どうしてまた彼らに興味を？」
ツァオに問われて、現れた人物は口元に笑みを浮かべた。
「なに……たしかめておきたかったのだ。この私の……《銀》の依頼を託すのに、ふさわしい相手かどうかをな」
そう告げる表情は、不気味な仮面に覆われている。
漆黒のマントを垂らしたその姿は、さながら闇を舞う夜鷹に思えた。

第六章　金の太陽、銀の月

「《銀》の存在を知っている人間は誰だろう？」
ロイドは、朝食のトーストをかじりながら言った。
「手がかりを探すなら、そこから考えよう。まず雇い主である《黒月》、対抗組織のルバーチェ商会、それから捜査一課の他には……」
「恐らく、ハルトマン議長も知っていそうね」
エリィも、広間のテーブルについて、サラダを取り分ける。
「なにしろルバーチェ商会最大の後援者だもの。でも議長は帝国派議員の筆頭だし、むしろ《銀》に狙われてもおかしくない立場よ」
「なるほど……ハルトマン議長が死ねば、議会は共和国派が台頭して、《黒月》が勢力を伸ばす芽も出てくるか。だとすると、ルバーチェ商会も危機感を覚えて……」
と、そこまで話し合って。
ロイドとエリィは、ふと視線を変えた。
同じテーブルにつくランティとティオは、不審な目でこちらを見ている。
「な、なんだよ、二人とも？」

「どうしたの？　不思議そうな顔して？」

するとランディとティオは、居心地が悪そうに顔を見あわせた。

「いや……だって、なあ、ティオすけ？」

「……ええ。なんだか、ロイドさんとエリィさん、今朝はすごく元気ですね？」

何かを勘ぐる視線に、エリィもあわてて笑顔を見せた。

「あ、うん……昨日はごめんなさい……でももう大丈夫よ。私、おじいさまの元には戻らない。これからも特務支援課でがんばるわ」

「そうなのか、お嬢？」

「……よかった、ほっとしました」

ロイドもそれを聞いて、胸を撫で下ろした。

「俺も嬉しいよ、エリィ……ずっとここにいてくれるんだね」

「ええ……でも、あの……」

「俺たちには、エリィの力が必要だからさ」

ロイド自身は、素直に自分の気持ちを告げたつもりだった。

だがその言葉に、何かを感じたのか、再びランディとティオの目が細まった。

「……怪しいな」

「……ええ、怪しいです」

二人は、ロイドとエリィを見比べ、声を低める。

「よ……いや昨夜……屋上から話し声が聞こえたな、ティオすけ？」

「はい……ということは……おめでとうございます。ロイドさん、エリィさん」

ランディとティオは、無機質な拍手を送る。

顔を真っ赤にして、ロイドとエリィはあわて始めた。

「い、いや、別に俺たちはなにも……」

「そ、そうよ！　ただちょっと、いろいろ話しただけで……」

だがランディは、抗議を聞き流してコーヒーを飲んだ。

「なるほど、いろいろねえ……で、どこまで行った？」

「お、おい、ランディ！」

「ちょっと！　ティオちゃんもいるのに！」

しかしティオも、トーストをぱくっと食べて平然としている。

「ああ、それはつまり、手を繋いだとか、抱き合ってキスをしたとか……」

「テ、テ、テ、ティオーっ！」

さらに赤くなるロイドに、二人は歓声を上げた。

「いよっ、男前っ！　やるねえ、ひゅーひゅー！」

「……ひゅーひゅー、ですね、これは」

けれどエリィは、きっと二人を睨み付けた。

「い・い・か・げ・ん・に・し・て・よ・ねっ！」

「……はーい、すんません」
「……私としても、かなり面白かったのですが……」
残念がるティオに、ロイドはぐったりとして席にもたれた。
「まったく……俺とエリィがそんな仲になるなんて、あり得ないだろ？」
「……え……？」
「そもそもそんな雰囲気にならないっていうか……そうだよなあ、エリィ？」
「……………」
朝食の席に、沈黙が流れる。
ロイドも、微妙な空気を感じ取って仲間たちを見渡した。
「……あれ？　俺、なんか変なこと、言ったか？」
「おい、ロイド、お前……踏んじまったな」
「……踏みましたね、確実に……」
ランディとティオが、女神に祈るポーズをとる。
ただ一人、エリィだけが、小さくわなわなと震えていた。
「……そうね、そうよね……ただ話をして、つまらない相談に乗ってもらっただけだものね……そんな甘い雰囲気にはなりませんでしたとも！」
「ど、どうしたんだよ、エリィ？　笑いながらそんなこと言うなんて……」
「知らないっ、もおっ！」

エリィは、さっさと自分の食器を片付け始める。
それを横目に、ランディはコーヒーをもう一口含んだ。
「くっくっくっ……でもまあ、お嬢に元気が出て何よりだぜ」
「……私も安心しました。もしかしたら、特務支援課を辞めるんじゃないかって……」
ロイドも今一度、それを思い出して安堵した。
この四人なら、まだ何かができるはずだと信じている。
だがどうやって、《銀》にたどり着けるかが分からない。
それにもし、たどり着けたとしても、彼の背後に絡み合う複雑な……
と、ロイドが思案を巡らせていた時、部屋の隅からエリィの声がした。
「ねえ、端末に導力メールが来ているわよ」
広間の隅には、導力ネットワークの端末が置かれている。
特務支援課への支援要請は、警察本部からこの端末へメールで送られてくるのだ。
だがメールを開封したティオは、表情を曇らせた。
「……これは……皆さん！」
呼ばれて、ロイドとランディも駆けつける。
端末画面には、いつものように支援要請が届いていた。
ただし、その内容は……

【支援要請】
【試練を乗り越え、星見の塔へ参ぜよ。さすれば汝らに使命を授けん】
【依頼主・《銀》】

「こ、これは……！」
ロイドは、ランディと顔を見あわせた。
普段は豪放なランディも、さすがに困惑を隠せない。
「悪戯にしちゃあ、タイミングがあれだな……」
エリィは、画面を食い入るように見つめた。
「ティオちゃん、このメールはどこから？」
「……警察本部ではありません。恐らくネットワークに不正アクセスした端末……しかし星見の塔とは……」
ロイドは、すぐに書棚から地図を引っ張り出した。
クロスベル周辺図を広げ、市街から南に延びるウルスラ間道を指でなぞる。
そこから分岐した道の奥に……
「行ってみよう、ここに」
星見の塔と呼ばれる、遺跡があった。

＊＊＊＊＊

その塔は、人も通わぬ僻地に建っていた。
そもそも、中世に錬金術師が建築したらしい……とだけ伝わっている遺跡である。
辺りは、陰鬱な森林に囲まれ、観光客が来るような場所でもない。
塔に至る道も、平素は警備隊によって封鎖されているのだが……

「これは……」
ロイドたちは、塔へと続く道で、いったん歩みを止めた。
警備隊が設置したはずの木製バリケードが、真っ二つに裂かれ、転がっている。
ロイドはそれに近づき、切断面を観察した。
「……魔獣の仕業じゃないな。鋭利な刃物で切断されている」
「ということは、《銀》が？」
エリィは、すでに導力銃を抜き、辺りを警戒している。
その得物は、流線型の共和国製導力銃、ラスティネイルに更新されていた。
なにしろ相手は、伝説の凶手と呼ばれる暗殺者である。
四人とも、ありったけの資金を吐き出し、防具も装備も新調したのだ。

ロイドも、バトルハンマーと呼ばれる打撃力の高い衝撃警棒を手にしていた。
「とにかく先を急ごう。しかしまだ昼間だっていうのにここは……」
生い茂る木々が陽光を隠し、辺りは薄暗い。
やがて道を進むうち、目指す遺跡が視界に入った。
「ここが……」
ランディが、集団制圧用の斧槍ライアットバスターを手に呻く。
四人の前にそびえていたのは、中央と左右、三つの建物から成る遺跡だった。
中央の建物には、たしかに塔が据えられ、ひときわ高くそびえている。
辺りの土地は荒れ果てているものの、不思議と建物は堅固なままである。
するとティオが、やはり新型の魔導杖を塔へ向けた。
「……どうやらこの場所は、少々、変わっているようです」
「変わっている……どういう意味だ？」
ティオがかざすのは、デモンズスペルという魔導杖である。
それに備え付けられた補助ユニットが、警告灯を点滅させていた。
「……ここには地・水・火・風、四属性以外の上位属性が働いています」
「上位属性……時・空・幻の三属性か？」
「はい、恐らく導力魔法を使用した場合、効果が歪曲される恐れがあるかと」
「だからってどう対応すればいいんだ？」

四人は、ロイドとランディを前衛に、中央塔へ近づいた。
扉を押し開ければ、暗い塔内が露わになる。
だが不思議と、内部には無数の明かりが瞬いていた。
小さな光球が、ちらちらと舞い踊り、上層へ続く螺旋階段が見えている。
エリィは、その幻想的な光景を唖然として見上げた。
「きれい……まるで蛍みたいね」
「星見の塔とは言うけど、まるでここが星空みたいだな」
ロイドも一瞬それに見とれたが、すぐに耳をそばだてた。
円形の塔内の奥から……がしゃん、がしゃん、がしゃんという地響きが近づいてくる。
接近する金属音は、ふたつ。
距離が縮まるにつれ、圧するような雰囲気も伝わってきた。
ロイドは、衝撃警棒をぐっと握りしめた。
「……気をつけろ、何か来るぞ」
「早速、《銀》のお出ましか……違うっ！」
ランディが、闇から現れた巨体に驚愕した。
ロイドたちの前に姿を見せたのは、甲冑に身を包んだ巨人だった。
さながら中世の騎士の如く、金属の兜をかぶり、二つ並んで前進してくる。
だが、その中に生物がいる気配はない。

ただ暗黒が、鎧をまとって歩いている……としか見えなかった。

「……導力仕掛けの機械ではありません」

ティオが、すぐさま分析を口にした。

「もしかしたら中世の錬金術師が造った人造巨人……ゴーレムの類かも……」

「なんだって？」

ロイドが驚くと、ランディは斧槍を構えた。

「何でそんなものが動いてんだよ、もしかしてこれは《銀》の罠……」

「来たわ！　気をつけて！」

エリィが、導力銃を連射する。

二体の生ける甲冑は俄然、突進を始め、ロイドとランディに襲いかかったのだ。

「うあっ！」

ロイドは、身を低めて拳をかわし、生ける甲冑の膝へ衝撃警棒を打ち込んだ。

得物から電撃が走り、甲冑全体が小刻みにわななく。

だが生命を宿していない甲冑が、それで気絶するはずもなく、二度目の、続いて三度目の

を振り下ろした。

「くそっ、こいつは……！」

ロイドは左右へ跳躍し、甲冑の拳を避ける。

一方、ランディは斧槍に炎を灯して、生ける甲冑へ叩きつけた。

「魔獣と同じ戦い方じゃ無理だぜ、こいつら！」

ランディの一撃は、甲冑をへし曲げるほど強く食い込む。

しかし彼の炎撃もやはり、肉体を有さぬ甲冑を傷つけることはできなかった。

背後から援護射撃を続けるエリィも、唇を噛んだ。

「生半可な攻撃より、属性有効率の高い魔法を撃った方が良さそうね！」

その傍ではティオが、すでに生ける甲冑の解析を終えていた。

「……敵の強度二一。地、水、火、風の四属性は八〇%しか効果を発揮しません。時の属

ら有効率一八〇%の威力を発揮します！」

髪飾りのセンサーから情報を得て、ティオは魔導杖を振りかざした。

「一体ずつ攻撃します、ソウルブラー！」

叫喚と共に、魔導杖から漆黒の閃光が放たれた。

時属性の単体攻撃魔法、ソウルブラーが生ける甲冑に炸裂すると、巨体はくぐもった悲鳴

上げ、大きくかしいだ。

だが時属性の攻撃魔法を使いこなせるのは、ティオだけである。

ロイドもランディもエリィも、身につけたエニグマには、まだ時属性の結晶回路を組み込

ではいない。

有効打を撃てるのはティオだけと察して、ロイドは指示を飛ばした。

「ランディ！　エリィ！　そのままティオと攻撃を一体に集中してくれ！　こっちの一体は、

俺が防ぐ！」

「おお！」「分かったわ！」

ランディが斧槍を振るい、エリィが導力銃を連射する。

決して効果的な攻撃ではないが、二人が時間を稼ぐ間に、ティオが導力魔法を準備し、再び発動した。

「……もう一度、行きます。ソウルブラー！」

漆黒の攻撃魔法が、したたかに生ける甲冑を貫く。

すると空間を震わすような叫びを上げ、甲冑はばらばらに砕け散る。

後には七耀石の欠片が残されただけで、巨体は蒸発するように消え去った。

「よし、これで……つあっ！」

ロイドは、鋼鉄の拳に叩かれ、壁際まで吹っ飛んだ。

さらに詰め寄る巨体が、彼を別の方向へ蹴り飛ばす。

骨格が砕けそうな痛みに耐え、ロイドは床に這いつくばった。

「くっ……！」

「ロイド、今、援護するわっ！」

すかさずエリィが、回復の銃弾ホーリーバレットをロイドの頭上に打ち上げ、癒しの光を臨させる。

その光でロイドが生命力を取り戻す間に、ランディが前に出た。

「てめえの相手はこっちだぜ！」

ランディは背後から甲冑に斬りかかり、ロイドから注意を逸らす。

つられて巨体は、頑強な拳を振りかざし、ランディはそれを斧槍で受け流した。

「ティオすけ！　早いとこ頼むぜ！　お前が頼りだ！」

「……分かっています！」

またも、ティオの魔導杖がソウルブラーを叩き込んだ。

甲冑の隙間から内奥へ流れ込んだ攻撃魔法は、巨体をがくがくと震わせる。

ロイドも、ようやく死地から立ち直った。

彼は素早く、ランディと挟み撃つ形で、背後から巨体に肉薄する。

「一気に行くぞ！」

ロイドは、左右の得物を、あらん限りの速さで連打した。

一発一発の効果は、薄いかもしれない。

それでも旋風の如き連撃は、甲冑を動かす疑似的な生命力を、確実に削っていた。

やがてぐらり、と巨体がよろめき、膝を突く。

生ける甲冑は断末魔の叫びと共に弾け飛び、七耀石の欠片に変じていった。

最期の声が塔内に響き、それが途絶えると、ロイドはほっと安堵した。

「……やはり魔獣とは違うな。いったいこいつらは……」

その時、ティオが天井を仰いだ。

「……みなさん、新手です！」
「なんだって！」
ロイドも咄嗟に顔を上げ、頭上を睨んだ。
吹き抜けの上層部から、凄まじい速度で、何かが急降下してくる。
それは四つの、猛速で回転する戦斧だった。
「危ないっ！」
ロイドは頭を低めてそれを避け、ランディは斧槍で弾き返す。
だが戦斧は、床に落ちもせず、再び回転しながらロイドたちに襲いかかったのだ。
「なんだ、こいつらっ……！」
ランディは、右へ左へ斧槍を振るい、刃をはね除けた。
すると戦斧は、手強い前衛を避けて、エリィとティオにも迫ったのだ。
「もしかしてこれっ……！」
「……意思を持っています、この斧！」
エリィは柱の陰へ、ティオは螺旋階段の後ろへ走って身を隠した。
しかし生ける戦斧は、障害物を回避して、二人へ回り込み、巨大な刃を横薙ぎに叩きつけた。
「きゃあぁっ！」
間一髪、エリィは床に伏して斬撃をやり過ごした。
空を切った戦斧は、そのまま石造りの柱を真っ二つに両断する。

人間の身体にぶち当たれば、即死は免れないだろう。
さらに別の戦斧が、伏したままのエリィに急迫した。
「エリィ、危ないっ！」
ロイドは神速、両者の間に割って入り、衝撃警棒を振り抜いた。
けれどまともに打ち合っては、警棒の方が切断されてしまう。
鋭利な刃に触れぬよう、ロイドは戦斧の柄を叩き、その軌道を逸らした。
「あ、ありがとう、ロイド！」
「早く立つんだ！　また来るっ！」
戦斧は、ブーメランの如く、いったん遠のき、またこちらへ接近してくる。
さらに背後からも、別の戦斧が迫り、ロイドとエリィを挟撃せんとしていた。
ロイドは、エリィと背中を合わせ、戦斧との間合いを測った。
「お互いをカバーしよう！　あれから目を離すな！」
「わ、分かったわ、ロイド！」
エリィも導力銃を両手で構え、狙いを絞る。
ロイドは、ぎりぎりまで戦斧を引きつけ、寸前で衝撃警棒を打ち込んだ。
「させるかっ！」
ロイドの一撃が、再び戦斧をはね返す。
その背後ではエリィが、導力銃を連射して戦斧を弾き飛ばしていた。

戦斧は、びきびきとひび割れながら、なおも再接近してくる。
ロイドとエリィはその軌道を読み、再び打撃と銃弾でそれを迎え撃つ。
二人の背中はぴたりと合い、呼吸も、踏み出す間合いもまったく同時。
傍で見ているランディも、その動きに感嘆した。
「やるな、お二人さん！」
言いながらランディは、自らに迫る戦斧を真っ二つに焼き切る。
ティオも、時属性の導力魔法を二度、顕現させた。
「……援護します！」
魔導杖からほとばしった導力魔法ソウルブラーが、飛び来る戦斧を粉々に撃ち砕き、七耀石の欠片に変えた。
残る二つの戦斧は、なおもロイドとエリィに迫ったが、二人はすでに阿吽の呼吸で戦う術を会得していた。
「エリィ、回りながら迎え撃つぞ！」
「いいわよ、ロイド！」
ロイドが打ち、エリィが撃つ。
さらに二人は背中を合わせたまま、素早く位置を入れ替え、また打ち、また撃つ。
打ち、撃つ。打ち、撃つ。
二人は回転しながら、戦斧を寄せ付けずにひたすら攻め続ける。

やがて連撃をくらった戦斧は、あえなく失速し、空中で四散した。
ロイドたちの周囲に、ようやく静寂が戻ってきた。
「……倒したのか……？」
「……ええ、そうみたい」
ロイドは、振り返ってエリィと視線を合わせた。
エリィも、嬉しそうに微笑んでいる。
戦いが済んだ安堵よりも、これほど呼吸を合わせて戦えたことが嬉しかった。
ランディとティオも、驚いた顔で駆け寄ってきた。
「おいおい、二人ともいつの間にそんな技を身につけたんだよ？」
「……お見事です。これも昨夜こそこそしていた賜でしょうか？」
「ちょっと、ティオちゃん！」
エリィは、真っ赤になって抗議する。
だがロイドは、まだ警戒を解いてはいなかった。
「待て……そこにいるのは誰だ！」
気配を感じたのは、螺旋階段の上。
光球がちらちらと蠢くその場所には、誰もいない。
しかしロイドの視線の先に忽然と、不気味なシルエットが現れた。
「……はじめまして、特務支援課の諸君」

声を発したのは、黒いマントを羽織り、フードで頭を覆った人影。
薄暗がりの中、鳥の嘴めいた仮面が鈍く輝いている。
歪な形の刀剣を握り、ふわり、ロイドたちの近くへ舞い降りた。
「我が名は、《銀》……まずはようこそ、と言っておこう」
ロイドたちは、一斉に武器を構えた。
「……ああ、こんな歓迎をしてくれるとは思いも寄らなかったよ」
「これは失礼。しかしあ奴らは、元々この塔を徘徊していた者たちだ。お前たちの腕を見極めるため、戦ってもらっただけだ」
「見極めて、どうする？」
「ふふふ……ロイド・バニングス。薄々、見当はついているのだろう？」
名前を呼ばれて、ロイドは眉をひそめた。
「どうして俺の名を……」
「探していたのだ。私の用件を託せる者を」
「用件？」
「とぼけるな。お前ならば、私の用件も分かっているはずだ」
《銀》からは、まったく殺気が伝わってこない。
むしろロイドとの会話を楽しんでいる風すらあった。
ロイドも少し緊張を緩めて、考えを巡らせた。

「……あんたの用件など分かるものか。ただ俺たちが知りたいのは、イリア・プラティエさんに宛てた脅迫状……その真実について聞かせてもらいたい」
「ほう……真実と言うからには、嘘もあると言うのか？」
「ああ……恐らくあの脅迫状を送ったのは……あんたじゃない」
ロイドの推理に、仲間たちが声を上げた。
「え……！」
「どういうことだ、ロイド？」
「……まだ、話が見えませんね」
しかし《銀》は、低い笑い声を響かせた。
「その通り……あれを送ったのは、私ではない。私の名を騙る何者かというわけだ」
「やっぱりか……その真犯人をあんたは……」
「知らぬ。私とて名を騙られて憤慨しているのだ。しかし……どうして分かった？」
問われて、ロイドはこれまでの捜査を振り返った。
「違和感だよ。あんたは伝説の凶手、と呼ばれている。しかしそれに比べて、あの脅迫状は、あまりにコケ脅しな感じがしたんだ」
「ならば何故、あんなものが送られたと思う？」
「さあね、そこまでは分からない」
ロイドは、観念するように答えた。

「だから俺の推理も止まってる……しかしあんたがクロスベルに来ていることを知っている
は限られている。《黒月》、ルバーチェ商会、捜査一課……問題は、誰がこの状況を利用した
だ」
すると《銀》は、また微笑を漏らした。
「そう……問題は状況だ。ニセモノとは言え、あの脅迫状で捜査一課が介入してきた。今
リア・プラティエの周辺には万全の警備態勢が敷かれている。それこそ公演中に狙われて
未然に防げるほどにな……」
その言葉に、ロイドは閃くものを感じた。
「もしや……脅迫状を送って、この状況を作り上げることで、何か別の狙いを達成しようと
ている……そういうことか？」
「私もそう睨んでいる。そこでだ」
《銀》は、すっとロイドを指さした。
「お前たちに依頼したい。我が名を騙った、何者かの企みを阻止してもらいたい」
「なっ……！」
ロイドが絶句すると、エリィたちも動揺した。
「ちょっと待って、どうしてそんな……」
「それはあんた自身が探せばいいだろう？」
「……あなたの武名は、あなた自身が守るべきかと」

しかし《銀》は、悠然とマントをひるがえした。

「だがお前たちにも断る理由はあるまい。どのような企みかは、私にも見当はつかぬが、悪事であることは、目に見えているではないか？」

「理屈としてはそうだが……」

ロイドは半ば納得しつつも、《銀》を睨んだ。

「俺たちに捜査をさせておいて、その間にあんたは誰かを殺すつもりか？　たとえばルバーチェ商会の会長や、ハルトマン議長あたりを……」

「ふふふ……ここは紳士協定といこう。お前たちが動いている間は、凶手として動くことは止めておこう」

「なにが紳士だ。それがあんた本来の……」

「いずれにせよ、お前たちはこの事件を追いたいのだろう？　だったら依頼を受けるか否か……答えてもらおう」

ロイドは、しばし黙した。

だが彼の中で、もう答えは決まっていたのだ。

「……あんたの頼みには応じない」

「なにっ！」

「俺たちは警察だ。暗殺者の言いなりにはならない。けど真犯人は探す」

「ふふふ……まあいい。理由はどうあれ、私の望んだ結果だ」

《銀》は、満足げな声を響かせて笑った。

「もし真犯人が何か仕掛けてくるとすれば……プレ公演か、本公演の初日だろう。気をつ
ことだな」

それを聞いてエリィも、深くうなずく。

「たしかにね……関係者一同が招待されるプレ公演は危険だわ」

だがランディは、首を横に振った。

「いや、一番盛り上がるのは本公演の初日だぜ？　大勢の観客を巻き込むつもりなら、初
警戒した方がいい」

二人の意見にも、《銀》は口元だけで笑ってみせる。

「いずれにせよ、気張るのだな。当日は捜査一課の目を盗んで、密かに劇場内を巡回した
いい。そうすれば、いざという時、すぐに行動できる」

「勝手に決めるな……けど、筋は通ってるな」

ロイドが呆れると、《銀》は数歩、後じさった。

「……では、朗報を期待している。せいぜい上手くやれ」

「あっ、おい……！」

引き留める間もなく、《銀》は柱の陰に入り込んだ。

そしてその姿は、闇にとけ込むように消えていく。

後に残されたロイドたちは、呆然とその場に立ちつくすだけであった。

蛍のような光球はまだ、ちらちらと辺りを飛び回っている。
それがロイドたちに示された、小さな希望に思えた。

数日後。
夜の歓楽街は、ひときわ賑わいを見せていた。
《アルカンシェル》の専用劇場には、大勢の招待客が吸い込まれている。
今夜は、『金の太陽、銀の月』のプレ公演。
捜査一課が厳戒態勢で配備につく中、貴賓席には、マクダエル市長もアーネストを従えて来場している。
その様子を、ロイドは控え室脇の扉の陰から覗き見ていた。
「マクダエル市長もお出でになったな……」
「そうね……おじいさまも、今夜の公演をすごく楽しみにしているみたいよ」
エリィも言って、後ろを振り返った。
二人の背後には、すでに本番の衣装を着たリーシャが控えている。
「……期待に応えられるといいんですけど」
「大丈夫よ。リーシャさんは、あのイリア・プラティエが認めた大型新人だもの。きっとう
くやれるわ」
だがエリィの励ましにも、リーシャは不安そうにつぶやいた。

「それより……《銀》という人が言ったように、本当に何か起こるんでしょうか？」
「……さあね。けど、可能性は高いと思う。劇場内には捜査一課がいるから、イリアさんは
丈夫だと思うけど」
ロイドは、場内をうろつく捜査官たちを観察した。
無論、その中心で指揮を執っているのは、ダドリー捜査官である。
イリアをはじめ、これだけ街の名士が集まれば、警備もさぞ大変だろう。
しかしロイドたちは、捜査から外された以上、表だって警護はできない。
場外にはランディとティオ、さらに神狼ツァイトがこっそり配備についていた。
リーシャも、少し安心したように笑顔を見せた。
「……でも、ロイドさんたちが警備についてくれて、私も嬉しいです」
「ああ、頼りになるよう、がんばるよ」
「それより……イリアさんに今回のこと、伝えなくてよかったの？」
エリィは、念を押すように問うた。
ロイドたちが《銀》と遭遇し、脅迫状がニセモノだと聞いたことは、イリアには告げてい
いのだ。
それを希望したリーシャは、こくんとうなずいた。
「はい……イリアさんには、余計な心配をさせたくないんです。あの人には、公演だけを考
て、輝いていて欲しい……それが劇団全員の願いなんです」

「本当に、彼女を尊敬してるんだね？」
「ええ、イリアさんは、私をこの世界に導いてくれた人ですから……」
　言ってリーシャは、豊かな胸に手を当てた。
「初めてイリアさんを見た時、本当に驚いたんです。こんなにも力強く輝ける人がいるんだなって……私とは全然違う……だから憧れてしまったのかもしれませんね」
　するとエリィが優しげな声で言った。
「イリアさんが太陽なら、リーシャさんは月ね……たしかに違うかもしれないけれど、あなた自身も輝いているはずよ」
「エリィさん……」
「だからイリアさんに選ばれたんでしょ？　自信をもって」
「はい……じゃあ私、そろそろ行きますね」
　リーシャは、祈るような視線を二人に向けた。
「ロイドさん、エリィさん……どうか、私たちの舞台を守ってください」
「ああ、力を尽くすよ」
「あなたもがんばって」
　リーシャは、手を振って舞台袖に去っていく。
　同時に館内放送が、プレ公演の幕開けを告げた。

「……皆様、お待たせしました。
　これより、劇団《アルカンシェル》の新作、『金の太陽、銀の月』のプレ公演の幕を上げさせて頂きます。
　最後までごゆっくりお楽しみください……」
　場内の照明が落ち、客席から拍手が沸き起こる。
　ロイドとエリィも、緊張した面持ちで視線を合わせた。
「始まったようだ。何も起きなければいいが……」
「行きましょう、捜査一課に見つからないよう気をつけて」
　二人は、一階客席の扉をわずかに開け、舞台の様子をうかがった。
　すでに場内には、荘厳な曲が流れ、幻想的な照明が明滅している。
　男声アナウンスが、語り部のように物語を紐解き始めた。
「……ここは『ラの国』。
　天の女神の祝福と慈愛により、大いなる繁栄を誇った古の王国。
　古来より『ラ』では、『姫』と呼ばれる舞い手によって政が決定されてきた。
　有力者たちは競うようにして、それぞれの『姫』を擁立し、星の祭殿において競い合うことで、その政の正しさを世に知らしめてきた。

そんな中、《太陽の姫》と謳われる当代一の舞い手が星の祭殿に現れた……」

場内に、清冽な鈴の音が鳴り響く。

その楽の音と共に、イリア・プラティエ……いや太陽の姫が舞台に現れた。

鈴の音が繰り返され、やがて銅鑼が打ち鳴らされると、激しい太鼓の音に合わせて太陽の舞いが始まった。

イリアが跳躍し、飛翔し、回転しながら、また宙へ舞う。

その躍動に観客たちが圧倒され、呑まれていく気配がロイドにも伝わってきた。

「凄いな……あれがイリアさんの本番か」

「ええ、あれを前にして警備に専念しなきゃいけないなんて、一課の人たちも辛いわね」

「ははっ、そうかもしれないな」

ロイドは、通路へ戻ってエニグマの通信機能を立ち上げた。

「こちらロイド……二人とも、聞こえるか？」

ランディとティオの返答は、すぐに耳に届いた。

「ああ、聞こえてるぜ」

「……始まったようですね。場外に異常はありません」

ロイドはそれを聞いて、まずは安心した。

「わかった。とりあえずこちらも、場内の巡回を始める。何かあったら教えてくれ」

「了解。けど、そっちはいいな。舞台が見えるんだろ？」

「ああ、イリアさんに見とれないよう注意するよ」

「一課の連中にも気取られるなよ、じゃあな」

ランディとの会話が終わると、場内から拍手が聞こえる。

舞台は順調に進行しつつあり、その歓声に紛れて、ロイドとエリィは場内を移動した。

すると通路の先に……

「……おっと、まずいまずい」

ロイドは、ダドリー捜査官の姿を認めて首を引っ込めた。

貴賓席に近い階段では、ダドリーが部下たちに指示を下している。

だがその動きは、いつもより神経質そうに見えた。

「……ピリピリしてるなあ。まあ無理もない。舞台上のイリアさんだけじゃなく、観客席にも気を配らなくちゃいけないんだからな」

「もしかしてダドリーさんも、本当は舞台が気になるのかもね」

「ははっ、それはそうかもな」

ロイドは言って、また場内を覗き込んだ。

視線を上げれば、貴賓席の様子もどうにか確認できる。

マクダエル市長は、アーネストと共に舞台を楽しんでいる様子だった。

だがその背後には、私服警官が一人いるだけだ。

「市長の警護には一人だけか？　ちょっと不用心な気もするけど……」
「そうね……でもおじいさまにはアーネストさんも付いているし……それに犯行を予告されているのはイリアさんよ？」
「うん……まあね……」
ロイドがつぶやくと、今度は女声の語り部が声を響かせた。
「こうして《陽の一族》が擁立する《太陽の姫》に対抗すべく、新たな姫が名乗りを上げたのです。
その姫の名は《月の姫》……
『ラ』の国の勢力を二分する、《夜の一族》の舞い手でした……」
再び、鈴の音。
だが舞台は、さっきとは打って変わって、暗く神秘的な光に覆われる。
背景に描かれた巨大な月に重なるように、すっくと立った人影。
それこそがリーシャ……月の姫の登場であった。
月光を浴びて、舞い踊るその姿に、ロイドとエリィはそっと微笑んだ。
「いよいよ、彼女の出番だな」
「そうね……がんばってー」

リーシャの舞いも、イリアに引けを取らぬほどの歓呼を得ている。
次第に音楽は高鳴り、場内は観客たちが息を呑む気配で満ちた。
「……女神の気まぐれか、それとも悪魔の悪戯か……
《太陽の姫》は、《月の姫》が生き別れた実の妹であると知る。
しかし《月の姫》はその事を知らず、氷のような敵対心を向けてくるのみ。
思い悩んだ《太陽の姫》は、白装束と仮面で正体を隠し、森の廃墟に《月の姫》を呼び出した……
そこはかつて幼き姉妹が、仲睦まじく遊んだ秘密の場所……」
白装束をまとったイリアが舞い、応えてリーシャが踊る。
森の中の廃墟を背に、二人の動きは共振し、物語は佳境へ入っていった。
「かつて幼き姉妹を離れ離れにした恐るべき陰謀劇……
その真相を知りながらも結局、姉妹は相争うこととなった。
なぜならば彼女たちは『姫』……
女神の意志を宿せる『巫女姫』は、たった一人しか許されぬ掟。
互いへの思慕の念と、燃えるような対抗意識を胸に秘め……

「二人の姫は、『星の祭壇』に降りたった……」
舞台は、篝火が焚かれた『星の祭壇』へと移り変わった。
対決を見守るのは、ラの国の放蕩王子や貴族たち。
そして星の祭壇の守護戦士にして、姉妹たちの想い人たる青年。
彼らの目の前で、太陽の姫と月の姫は対峙し、互いの思いを舞いにぶつける。
銅鑼の音はいっそう大きく、そして速く打ち鳴らされていった。

「ロイドさん、エリィさん……！」
二人が場内を巡るうち、劇場支配人が階段を駆け下りてきた。
「ああ、バルサモさん……」
「どうなさったんですか、そんなにあわてて？」
バルサモは、周囲を警戒すると、物陰に二人を引き入れた。
彼の額には、うっすらと汗が流れている。
「それが……不審なお客様がおりまして……そちらの階段の上から、どうやら貴賓席の様子を窺っているらしく……」
瞬時にロイドとエリィは、緊張をみなぎらせた。
「分かりました、すぐに確認してきます」

「バルサモさんは、こちらで待機していてください！」
「わ、分かりました、何かありましたらすぐに……！」
ロイドは衝撃警棒を、エリィは導力銃を準備して階段を駆け上がる。
だが踊り場に達した時、二人が見つけた人物とは……
「え……？」
「ちょっと、あの人は……！」
場内を覗き込んでいるのは、カメラを構えた、見覚えのある女性だった。
「なによもお〜、全然、貴賓席に近づけないじゃない……まったく、どうしてダドリーの奴がこんな場所にいるんだか……！」
「あのお……グレイスさん（肩をとんとん）」
「邪魔しないでよ！　せっかくのスクープチャンスなんだから！」
「えへん……グレイスさん？（もう一度、肩をとんとん）」
「うるさいわねえ……ええい、こうなったらこの位置から写真だけでも……」
「グレイスさん！」
ロイドとエリィは、捜査一課に聞こえぬぎりぎりの声量で呼びかけた。
ようやく女性……クロスベルタイムズのグレイス・リン記者は、二人に振り返った。
「あ、あら……ロイド君？　エリィちゃんも、こんな所で何してんのよ？」
「それはこちらの台詞です……」

「グレイスさん、どうしてここに？　招待された訳ではありませんよね？」
ロイドたちが怪訝な視線を向けると、グレイスはぎこちなく笑ってみせた。
「あ、あはは……そうね、招待状ね、うんうん」
「ご・ま・か・さ・な・い・で・く・だ・さ・いっ！」
「実は清掃業者の人たちに紛れて、こっそり……って感じで？」
「ええっ！」
「よくまあ、捜査一課の目を盗んでそんなことを……」
呆れる二人に、グレイスは唇をすぼませた。
「だってぇ～、うちの社に来た取材用チケット、他の記者に取られちゃったんだもん！　だからネタを追うには、忍び込むしかないじゃない？」
「あ、あのですね……」
「なんて人騒がせな……それよりネタって何ですか？　まさか脅迫状の件じゃ……」
しかしグレイスは、初耳とばかりに小首を傾げてみせた。
「脅迫状……なによそれ？　そういや妙に捜査一課が出張ってると思ったけど、もしかしてダドリーたちも『彼』を監視してるの？」
「『彼』……？」
「《銀》の事ですか？」
だがその名前にも、グレイスはまた首を反対側に傾げた。

「《銀》？　なんなの、全然、話が見えないわ。もしかして事件？　ねえ事件？」
「質問しているのは、俺たちです。あなたがどんなネタを探しに来たのか、答えないなら捜査一課に突き出しますよ？」
ロイドは、口調を強めて詰め寄った。
だがグレイスも、なぜか表情を曇らせている。
「そ、それは……言ってもいいけど、エリィちゃんの前で話すのは抵抗があるわね」
「私が……どういう意味ですか？」
問いかけるエリィに、ようやくグレイスも笑みを捨て去った。
「うん、まあいいか……気をしっかり持って聞いてよね？」
「は、はい」
「あたしが追ってるネタは、マクダエル市長の第一秘書に関する黒い噂よ」
「…………！」
ロイドもエリィも、あまりの驚愕に言葉も出ない。
だがグレイスは、いつもの敏腕記者の表情に戻って先を続けた。
「『彼』……アーネストって言ったわよね。あいつ、相当ヤバイわよ。市長に内緒で事務所の資金を勝手に流用してるらしいの」
「そんな……アーネストさんにかぎって……」
「信じられないのも無理ないわ。でも最近じゃあ、帝国派議員と密会して、何か企んでるらし

いのよ。まさか市長を亡き者にって……あはは、流石にそこまではしないか」
しかし……
ロイドとエリィは、笑いもせず、顔を見あわせた。
二人の脳裏には、まったく同じ懸念が浮かび上がっていたのだ。
「エリィ……もしここで今、市長が暗殺されたら……」
「目撃者さえいなかったら、誰もが犯人は《銀》だと思うわ。だって《銀》からの脅迫状があるんだもの」
「……それが狙いか！」
二人は、脱兎の如く、貴賓席へ向かった。
あわててグレイスも後を追いかける。
「ちょ、ちょっと待ってよ！　まさか！　まさかでしょ！」
もうロイドたちは、身を隠すことも放棄していた。
捜査一課の者たちの脇を走り、指示を飛ばすダドリーの横すら疾走した。
「お、お前ら、いったいどこから……！」
返事もせず、ロイドとエリィは駆ける。
その疾走にただならぬものを感じたのか、ダドリーも導力銃を抜いた。
「待て！　どこへ行く！　そっちは貴賓席だ！　説明しろ、ロイド・バニングス！」
だがロイドたちはなおも走り、貴賓席の手前まで達した。

すると扉の前に、警護役の私服警官が倒れているではないか。
身体には数カ所の切り傷。床には、鮮血が広がっていた。
「ダドリーさん、彼を頼みます！」
「おい、これはいったい……」
「エリィ、飛び込むぞ！」
「え、ええ……！」
ロイドは、前蹴りで貴賓席の扉を蹴破った。
途端に、視界が広がる。
貴賓席は、クライマックスを迎えた舞台を見下ろす位置にあった。
舞台では太陽と月をイメージした照明が輝き、イリアとリーシャが最後の曲を踊っている真っ最中である。
観客たちもその姿に手拍子を送り、貴賓席に目を向ける者はいない。
だがこの小さな空間では……
市長が倒れ、アーネストが立っていた。
アーネストは、指紋がつかぬよう、東方風の短剣をハンカチごしに握りしめている。
そしてその刃を、市長の胸に突き立てる寸前で、ロイドたちに振り向いた。
「お、お前は……！」
「させるかあっっ！」

ロイドは、アーネストの間合いに素早く踏み込んだ。
と同時に、衝撃警棒を振り抜き、短剣を手から叩き落とす。
だがアーネストも、退きながら市長を抱え、胸元から拳銃を引き抜いた。
「おじいさま！」
「くそっ……そんなモノまで！」
エリィは導力銃を、ロイドは警棒を構え、アーネストに詰め寄る。
そこへ駆けつけたダドリーも、あわてて導力銃の狙いを定めた。
「なんだ、これはいったい……！」
そこでようやく、アーネストが笑みを漏らした。
あの温厚で、誠実そうな秘書の顔はもうない。
市長の首に銃口を突きつける顔は、邪性に満ちていた。
「まさか君たちがここに現れるとはな……とんだ巡り合わせもあったものだ」
「アーネストさん、いったいどうして！　あなたは、ずっとおじいさまを……」
エリィは、銃口を震わせながら問う。
しかしその失望にも、アーネストはさほど関心が無いようだった。
「くく……エリィお嬢さん、あなたと同じですよ。私もいいかげん、この状況にはうんざりしていたんだ……」
「アーネストさん……」

「いくら市長が理想を掲げても、改革は実行されない……結局、このクロスベルを変えるためには、もっと強い力が必要なんですよ！」
アーネストは、ぐいと拳銃を市長に押しつける。
マクダエル市長は、冷静な顔つきのまま、瞑目した。
「君がそんなことを考えていたとはな……わしも見る目がなかったということか……」
「おじいさま……！」
エリィが、苦しげに声を絞る。
ロイドは、アーネストにじりじりと詰め寄っていった。
「だから《銀》の名を騙って、イリアさんに脅迫状を送り……《銀》が現れると思い込ませたうえで、市長の暗殺を図ったのか！」
「なんだと！」
ようやくダドリーも事情を呑み込み、アーネストに銃口を向けた。
「……そういうことか。ずいぶんと舐めた真似を……！」
「ははっ、悔しいだろうね。しかし捜査一課といっても、所詮は無能な警察官にすぎない。君たちも、ルバーチェ商会も、《黒月》も、本物の《銀》も……みんな、私の手のひらの上で踊っていたにすぎないんだよ！　ははっ……はははっ！」
アーネストは、自分に酔うように哄笑を響かせる。
しかしダドリーは、憤然として引き金に指をかけた。

「おとなしく銃を捨てろ。抵抗するようなら、容赦はせん……」
「それはこちらの台詞だ。マクダエル市長の命、お前たちの目の前で散らしてやってもいいんだぞ？」
「やめて！」
エリィの悲鳴を聞いても、アーネストは微笑んだままだ。
秘書は、ぐいと銃口で戸口を指し示した。
「さあ、道を空けてもらおうか。全員、壁際まで移動しろ」
「どうするつもりだ？　この場を逃れても、あんたは結局……」
「うるさいっ！　いいから言う通りにするんだっ！」
アーネストは、甲高い声でロイドの言を遮った。
その様子に、ロイドは不審なものを感じていた。
自らの行動に酔いしれたり、突然激昂するなど、情緒不安定な感がある。
それでもロイドは、数歩、壁際へ後じさった。
「……これでいいのか？」
「ああ……それで十分だ」
言うなり、アーネストは市長を突き放した。
その身体をエリィが抱きとめる隙に、秘書は扉から脱していく。
ロイドは、すぐにその後を追いかけた。

「待て！　アーネスト！」
「逃すものか！」
ダドリーも遅れて、追跡を開始する。
だがさすがに上演中の館内である。発砲はできない。
そして狙いを定めようとしても、アーネストは驚異的な跳躍で階段を飛び越え、瞬く間にエントランスに達した。
「な、なんだ、あの速さは！」
ダドリーが唖然とする間に、ロイドはエニグマを起動した。
「ランディ、ティオ！　そっちにアーネスト秘書が行く！　捕まえろ！」
『はあ？　なに言ってんだ、お前？』
「いいから逃がすな！　アーネストが真犯人だったんだよ！」
『……よ、よく分かりませんが了解しました！』
会話するうちに、アーネストは正面入口から飛び出した。
階段を飛び越え、繁華街に紛れ込めば逃げ切れる……そう思っていたかもしれない。
だが街に逃げ込む寸前、ティオが魔導杖を振るった。
「……そこまでです、アイシクルエッジ！」
「ぬおっ！」
アーネストの足もとに、ティオの導力魔法が発現した。

水属性の攻撃魔法を受けた途端、アーネストの足は、接地面からぴしぴしと凍結し、その場で転倒してしまう。

続けてランディが突進し、斧槍の柄でアーネストの顔を殴打した。

「ぐがっ……！」

苦悶を漏らして、アーネストは意識を失った。

それを見下ろして、ランディとティオは不思議そうな顔をしてみせた。

「ふぅ……気絶しちまったが、これでよかったのか？」

「……みたいですね？」

二人も、まだ何が起こったのか把握できずにいる。

そこへようやく、ロイドとダドリーが追いついてきた。

「ランディ、ティオ！　よかった……捕まえてくれたか！」

「ああ、だけど本当によかったのかよ。だってこの人……」

「……それに、どうしてロイドさんが一課のメガネスーツさんと？」

「だ、誰がメガネスーツだ！」

ダドリーは、段取りよくアーネストを捕らえたロイドたちを見回した。

「お前たち、これは一体どういうことだ？　あれほど関わるなと釘を刺したのに、場外にまで人員を配置するとは……！」

「まあ……念には念ですよ」

「な、なにいっ！」

「それより手錠をかけますよ。アーネストの身柄はうちで……」

ロイドが、そう言いかけた時だった。

不意に、ティオが放った凍結魔法が砕け散った。

意識を失ったと思われていたアーネストがゆっくり身を起こし、がくがくと震える。

そして夜空に向かって……

「があああああっ！」

人間とは思えぬ、咆哮を発した。

同時に跳躍し、ロイドたちの頭上を飛び越えると、そのまま行政区の方へと走り出す。

あわててロイドは、その背中を追った。

「馬鹿な！　まだ動けたのか！」

「なんてタフな野郎だ！」

「……今度こそ逃がしません！」

ランディとティオも、得物を握って走り出す。

だがアーネストの疾走は、尋常な速度ではない。

ロイドの耳には、夜風に乗って彼の哄笑が聞こえてきた。

「ふははっ……こんな所で終わるものか……私は……次期市長になるのだ！　ハルトマン議長の後ろ盾さえあれば、きっと次の市長選を……！」

そう、ロイドが思った時、横合いから黒い影が飛び出した。
いや、純白の影と言うべきか。
待機していた神狼ツァイトが、アーネストに横からぶち当たったのだ。
「……がぁっ！」
アーネストは再び倒れ、ツァイトの四肢に組み敷かれる。
抵抗しようにも、その喉元には神狼の鋭い牙が迫っていた。
ロイドは、急いで神狼へ駆け寄った。
「ありがとう、ツァイト……助かったよ」
ランディも拍子抜けしたように、歩みを止める。
「やれやれ、最後はお前がおいしいとこ取りかよ」
「……お手柄です」
ティオも、ツァイトの頭をぐりぐりと撫でてやった。
しかしさらなる影が、劇場の方から追いつき、歓声を上げたのだ。
「なに言ってんの！　お手柄はあたしのおかげでしょ！」
グレイス・リンは、遠慮もせずフラッシュを焚いた。
ロイドがアーネストに手錠をかける間も、一瞬も逃すまいとシャッターを切りまくる。

その隙に、ランディとティオは、呆れて顔を見あわせた。
「え、あんた、いつの間に……どっから……？」
「……ロイドさん、何があったか説明してください」
「うん、そうだな……だけど……」
長い話になりそうだ、とロイドは思った。
それに、劇場に残してきたマクダエル市長の容態も気になる。
ロイドの腕の下では、なおもアーネストが苦悶を発していた。
「は、離せ……私は絶対に……絶対に次期市長になるんだあっっ！」
錯乱した声は、しばらくロイドの耳から離れなかった。
しかし、ロイドは疑問に思った。
果たして錯乱だけで、アーネストは事に及んだのだろうか。
そう思えるほど、彼の叫びはどこか……

〈アルカンシエル〉の舞台に、出演者たちが手を繋いで整列した。
すでに演目は終わり、観客は総立ちになって拍手と喝采を送っている。
エリィはそれを、貴賓席から見下ろしながら、エニグマに入った通信に答えていた。

「おじいさま……無事、終わったようですわ」
「そうか……それはよかった……」
マクダエル市長は、何事もなかったかのように座席につき、拍手を送っていた。
市長が受けた打ち身には、すでにエリィが回復の導力魔法を施している。
市長は、ただ心の動揺だけを抱えて、ため息を吐いた。
「いろいろとあったが、私の事件を公表するのは終演後……いや、観客たちが帰った後でいい。今はみな、喜びの中にいるのだからね……」
「はい、おじいさま」
「それが《アルカンシェル》の諸君に対する私なりの礼だよ……」
市長の言葉を聞くと、控えていたバルサモ支配人がそっと進み出た。
「もったいないお言葉です……ありがとうございます、マクダエル市長……」
舞台では、イリア・プラティエが前に出て、手を振っている。
続いて、リーシャ・マオが歓呼に応えた。
そして太陽の姫と月の姫が、手を繋いで一礼する。
《アルカンシェル》史上に残る名演と讃えられる一夜が、幕を閉じたのだ。

エピローグ

特務支援課に、朝の平穏な空気が満ちていた。
広間にはツァイトが寝そべり、その背中をティオが優しく撫でている。
朝食を終えたロイドはコーヒーを飲み、ランディはソファに座ってクロスベルタイムズを読んでいた。
無論、一面記事は昨夜の大事件を伝えている。
『劇団《アルカンシェル》プレ公演、絶賛の嵐！』
『市長第一秘書、横領と殺人未遂で逮捕』
『特務支援課、マクダエル市長の暗殺を未然に防ぐ！』
『偶然、現場に居合わせた本誌グレイス・リン記者が逮捕写真を独占撮影！』
ランディは、それをひととおり読み終えると頭を掻いた。
「やれやれ……すげえ大事件になったもんだな」
「……まあ、仕方ありませんね」

ティオは、ツァイトと戯れながらうなずく。

「《アルカンシェル》の新作お披露目中に市長の暗殺未遂ですから……騒ぎにならない方がおかしいですよ」

するとロイドは、ランディが机に置いた新聞を手にしてざっと記事を眺めた。

「だけど、結局アーネストと関係していたとされる帝国派議員の名前は上がってないか……ハルトマン議長の名前も載ってないし……」

「まあ、規制されてんだろ。それにさすがに、あの暗殺未遂は、アーネストの単独暴走なんじゃねえのか？」

「多分、そうだろうね」

ロイドは、ばさっと新聞を机に置いた。

「帝国派にとって、市長を暗殺しても、さほど旨味はないだろう。まあ、暗殺者を《銀》に仕立てて、《黒月》や共和国派を攻撃する材料にはなるけど……」

「まだるっこしいな、それ」

「うん。やっぱりアーネスト個人の犯行なんだろうなあ……」

ロイドが天井を見上げると、ティオもふと視線を上げた。

「でもあの秘書の人……何だか様子がおかしかったです。正気を失っているというか、尋常じゃないというか……」

「ああ……一課が取調べを始めてるらしいけど、結局、どうなったんだろう？」

そこへ、執務室のドアがゆっくり開いた。

「どうやら錯乱しちまって、話せる状態じゃないらしいぜ」

「あ、課長……」

ロイドは、くわえ煙草で現れたセルゲイ・ロウに向き直る。

彼らの上司は、いつもと変わらぬ様子で淡々と告げた。

「今、一課から連絡が入った。アーネストは、取調べができる精神状態じゃないそうだ。いったん拘置所送りにして、七耀教会のカウンセラーを付けるか、聖ウルスラ医科大学の助けを借りるつもりらしいぜ」

「そうでしたか……」

ロイドとしても、あまりに気になる結末だった。

そしてアーネストが見せた、あの力は何だったのかと思う。

ティオが放った導力魔法を打ち砕くとは、いったいどんな……

するとセルゲイが、不意に笑みを漏らした。

「くくっ……しかしお前らも、とんだ大金星じゃねえか？　さっきの連絡でも、ダドリーの奴、お前らのことを誉めてたぜ」

「えっ……？」

「ま、功績を認めているのは、ダドリーだけじゃなく、クロスベル警察全体だろうな。出し抜かれた捜査一課としては面白くないだろうが、これでお前らを見る目も、少しは変わるだろう。

今は素直に喜んでおけ」
「そう……ですね」
ロイドはそう返事をして、空いている席を見つめた。
ランディもティオも、その席の主を思って、沈黙する。
だがロイドは、なにかを決意したように立ち上がった。
「……パトロールに行ってきます」
「なんだよ、ロイド、ずいぶん早いな？」
ランディが問うと、ロイドは笑ってうなずいた。
「ああ、良かったら二人も行かないか？　ここでじっと待ってるより、その方がずっといいと思うんだ」
その言葉を聞いて、ティオは何か感づいたようだった。
「……どこにパトロールに行くんですか、ロイドさん？」
「ああ……住宅街、西の外れからまわってみようと思う」
ロイドが言うと、ランディがにやりと笑った。
「いいな、付き合うぜ」
「……私も、お供します」
ツァイトも、一声小さく吼えた。
神狼も待っているのだ。彼女が帰ってくることを。

「明日から復帰なんて早すぎます！」
エリィは、驚きの声を上げた。
だが市長は、マクダエル家の私室で、ベッドから身を起こした。
「なに、たいしたことはない。創立記念祭も近いし、仕事は山のようにあるのだよ。この程のことで、市長としての責務を放棄できんさ」
「この程度のことって……」
エリィは言って、目を伏せた。
「おじいさまは……悔しくないんですか？　あれだけ目をかけていたアーネストさんに裏切れて……」
「うむ……今回のことがショックでなかったといえば嘘になる。聞けば、随分前から事務所資金を使い込んでいたようだ。それで精神的に追い詰められてしまったのかもしれないな。の意味では、気付いてやれなかった私の責任でもある……」
「そんな、おじいさまは……」
「だがね、私は政治家だ。この身をクロスベル自治州の未来に奉げると誓った。いかなるこがあろうと、職務を全うする。そう、自分に課しているのだよ」
エリィは、言葉を失った。
自分の祖父は、自分が思う以上に強い人物だったのだ。

信念のためなら、自らの命さえ惜しまない。

そして今度は、マクダエル市長が孫娘の手を握りしめた。

「すまない、エリィ。私は、お前の父さんも母さんも、引き留めてやれなかった。さぞ恨んでいるだろうね」

「そんな！　おじいさまは私の誇りです！」

エリィも、祖父のしわ深い手を強く握り返した。

「私が警察に入ったのも……別の形で、おじいさまのお手伝いがしたかったからです。でもこんなことになって……アーネストさんが居なくなったなら……私、やっぱり警察を辞めておじいさまのお手伝いを……」

「馬鹿言っちゃいかん！」

市長の叱責で、エリィははっと顔を上げた。

「お、おじいさま……」

「お前が選んだ道だ。悔いはないのだろう？　だったら戻ってくる必要はない」

「あ……」

「私のことなら心配はいらんよ。秘書は他にもいるし……次の市長選を機に引退することは少し難しくなってしまったが……なに、もう五年、楽隠居が遠のくだけのことだ」

そして市長は、また優しげな声に戻った。

「お前は、お前が選んだ道を全うしなさい。それが私にとっても、何よりの励みになるのだ

よ」

「おじいさま……」

「それにお前の仲間も、それを望んでいるようだ」

「……？」

「外を見てみるのだね」

促されて、エリィは窓辺に立った。

朝陽に向かって窓を開けると、マクダエル家からは住宅街が一望できる。

しかしエリィの実家の前では……

「あ……」

ロイドが、手を振っていた。

ランディが、ウィンクを投げていた。

ティオが、ぺこりとお辞儀をしていた。

神狼が、嬉しげに一声吼えていた。

三人と一匹の仲間に、エリィはしばし呆然とし……

「……ありがとう、みんな……」

祖父に一礼すると、エリィは部屋を飛び出していった。

振り向きもせず、自分が帰るべき場所へ……

＊＊＊＊＊

「おかげさまで助かりました」

ツァオ・リーは、支社長室で微笑んだ。

「あのまま市長が亡き者にされていたら、危うく我々に容疑がかけられるところでしたよ。あらためて御礼を申し上げます」

すると部屋の隅から……

ふわり、《銀》が進み出て言った。

「ふんっ……つくづく因果な街だ。しかし『我々』などとこちらまで一緒にするな。いい迷惑だ」

「やれやれ、つれないですねえ」

「お前たちとルバーチェ商会の抗争に首を突っ込んだばかりに、名前を利用されたのだ。つれなくもなる」

《銀》はあいかわらず、くぐもった声を響かせる。

するとツァオ・リーは、左右の指を組んで話題を変えた。

「それはともかく……お伝えしている通り、こちらの攻勢は記念祭最終日……仕掛けはよろしくお願いしますよ、《銀》殿」

「分かっている」
「あれを潰せば、ルバーチェ商会に大打撃を与えられる。そしてうまくすれば、帝国派議員の皆さん方にもね」
「それがなぜ、そんなに嬉しい？」
「勿論、私が与する共和国派の皆さんに恩が売れるからですよ」
「なるほど……取引上手は変わらんな」
そう言って《銀》は、また影の中に退いた。
「ではそれまで、こちらは自由にさせてもらうぞ。連絡はいずれまた」
「承知しました」
「そろそろ『時間』だ……では……」
音もなく、伝説の凶手は影の中に消えていく。
それを見送って、ツァオ・リーは小さく肩をすくめた。
「あいかわらず神出鬼没な御方だ。しかしいったい……何の『時間』でしょうねえ」
ツァオは、眼鏡をかけ直し、支社長の業務に戻る。
呼吸するように陰謀を巡らす男の横顔は、期待に満ちていた。

《銀》は、夕暮れの街を跳んでいた。
ビルからビルへ、翼でもあるかのように軽やかに飛び移る。

その姿は残像しか残さず、眼下を歩く人々も、一切《銀》には気づいていなかった。
やがて《銀》は、繁華街の外れに着地し。
仮面と黒装束を外して、ひと呼吸ついた。

「……間に合った……」

そして《銀》だった人物は、《アルカンシェル》専用劇場の裏口へ入り、所定の位置に黒装束を隠すと、何食わぬ顔で舞台へ近づいていく。
するとその存在に、イリア・プラティエが気づいた。
「あら、今日はずいぶん早いわね？」
看板女優は、にこやかに微笑みかけた。
「どうしたのよ、もしかしてやる気満々？　そう来なくちゃね。本公演までに、もっと完成度を上げていきましょう。さ、稽古、始めようか、リーシャ？」
「はい、イリアさんっ！」
《銀》だった者は、リーシャ・マオとして元気よく返事をした。
彼女が愛する太陽の姫は、無事、守られたのだ。
それが何より、《銀》の月は嬉しかった……

こんにちは、市川丈夫と申します。
今回、縁あって日本ファルコムさんの「英雄伝説　零の軌跡」のノベライズを担当させていただくことになりました。
名作ゲームの雰囲気を違和感なくお伝えできれば……と思って執筆しましたが、如何だったでしょうか?
読者の皆様が、ゲーム同様、本作も楽しんでいただけたなら幸いです。
にしても、ですよ。
執筆前、あらためて「英雄伝説　零の軌跡」をプレイしたのですが、メイン・ストーリーだけでも登場人物や事件がてんこ盛りなのに、脇道にも魅力的な物語が散りばめられていて、これをどうまとめようか、楽しく悩んでしまいました。
ゲーム中のどの場面も書いてみたかったのですが、その中から、本当に読んでいただきたい部分を抽出して、濃密な一冊に仕上げたつもりです。

特にこの一巻では、理想を追い求める熱血漢ロイドと、冷静沈着に見えて迷いを秘めたエリィの絡みをご堪能ください。
僕自身、書きながら「ロイド、そこでもう一歩踏み込め!　いやエリィから行くべきか?　しかし二人の関係を勝手に進展させてはゲーム内容から逸脱……」とやきもきしたり。
謎めいた少女ティオの背景は、二巻以降で。
「みっしい」ねたも必ず書きます!　とここで宣言しておきましょう。
ランディのハードボイルドな過去にも踏み込みます。
個人的には、セルゲイ・ロウ課長が好きなんですよ。
まあ、年齢的にも近いのですが、若いもんに現場を任せる、でも現場の責任は取る、という仕事のスタンスに憧れるなあと。
いや、なかなかできませんぜ。さらりーまん仕事の中でそういうことは。
(僕も六年ほど、さらりーまん経験ありです)

BOOKS）としてノベライズされていますので、併せてそちらもお読みいただければと思います。

また近々、プレイステーションVita版ゲームとして「零の軌跡　Evolution」も発売されるそうなので、通称「零えぼ」も是非、どうぞ。

それでは近いうちに「英雄伝説　零の軌跡」二巻でお会いいたしましょう！

※二巻サブタイトルは未定。でも「零の軌跡」ファンの皆様なら、この後、どんなストーリーに繋がるかは御承知のはず……

二〇一二年　七月　東通り・龍老飯店で猛虎炒飯を食らいつ

市川　丈

富士見 DRAGON BOOK 530

英雄伝説　零の軌跡①
金の太陽、銀の月

平成24年8月25日　初版発行

原作＝日本ファルコム株式会社
著者＝市川丈夫
発行者＝山下直久

発行所＝富士見書房
〒102-8144
東京都千代田区富士見1-12-14
http://www.fujimishobo.co.jp
電話　営業 03(3238)8702
　　　編集 03(3238)8939
印刷所＝旭印刷
製本所＝本間製本
装幀者＝岡村元夫

2012 Fujimishobo, printed in Japan

ISBN978-4-8291-4687-3 C0176

©2012 Nihon Falcom Corporation.
©2012 Takeo Ichikawa, Katsumi Enami, Kashiwa

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

落丁乱丁本はおとりかえいたします